

被爆前後の石内村の生活と体験

原爆と戦争

広島市佐伯区石内公民館
石内地区被爆誌編集委員会

被爆あとの石内村の
生活と体験

広島市佐伯区石内公民館
石内地区被爆誌編集委員会





語り部

俳句

沖村ナツエ

八月のかの日めぐりて山河老ゆ
飢えー日の日月淡ー昔の夢

新宅淳子

また一人親ーきく述く原爆忘
悲み月雲の中より原爆忘

有岡絹枝

刈り草を焼きけぶらすやひろーも忘
八月や焰のいろを見ー佛

西垣内純雄

語り徒ぐ落ー又とて原爆忘
ばと子と念佛わくわくて原爆忘

久保田恵美子

夕空へ獲物を放つ原爆忘
灼くる日の閃光万の声沈む

田中則子

ひろーもや笑天罪のどく負う
八月や人の祈りの中にて



原本レゲ子
菜園に水張りちく原爆忌
花鈴によみす片袖原爆忌

中山敦子
片影に母呼ぶ声や原爆忌
眠なうらに乳房摘らるる原爆忌

倉本恵子

短歌

原爆忌参徒の母は、十路過ぐ
目に浮かぶ顔みな若し原爆忌
戦死せる君に思ひのみだれーか
玉音きこし八月十五日

皆本月枝

兄の遺骨胸に抱きうさまよそり
死臭たよう原島のもち

藤田幸恵

父の忌に夕餉をかみうから等々
雑炊をすーく速き目語る

定森、千代



石内地区被爆誌「原爆と戦争」

目次

語り部（俳句・短歌）

地区の概況……………四

戦況（緒戦）……………五

被爆前の状況……………五

出征兵士と村葬……………五

徴兵制と免役……………八

衣料と服装……………八

食糧増産と供出及び配給……………一三

松根油及び生松脂（手記）……………一七

金属回収……………二一

防空壕と防空訓練（防空必勝の誓）……………二三

興亜奉公日から大詔奉戴日……………二六

常会に於ける徹底事項（皇土決戦五訓）……………二七

結婚改善必行事項……………三一

各団体の活動（翼賛壮年団、婦人会、

警防団在郷軍人会、国民義勇隊）……………三二

国民学校と青年学校……………三四

敵機撃墜（手記）……………三八

疎開……………三九

戦時中の村の主な出来ごと……………四一

週報にみる戦時論調……………四六

被爆時の状況……………四八

原爆投下（手記）……………四八

黒い雨（手記）……………五五

空から飛来物（手記）……………五八

被爆後の状況（救護活動）……………六〇

被爆者が続々と石内へ……………六〇

救護所の状況……………六一

その他の救護活動（手記）……………六二

終戦後の生活……………七七

進駐軍と民主化……………七九

平和記念都市の建設……………八一

平和の塔……………八一

戦没者名簿……………八四

昭和戦役出征者名簿……………八八

戦没者慰霊碑……………九三

合祀者一覧（原爆死学徒を含む）……………九三

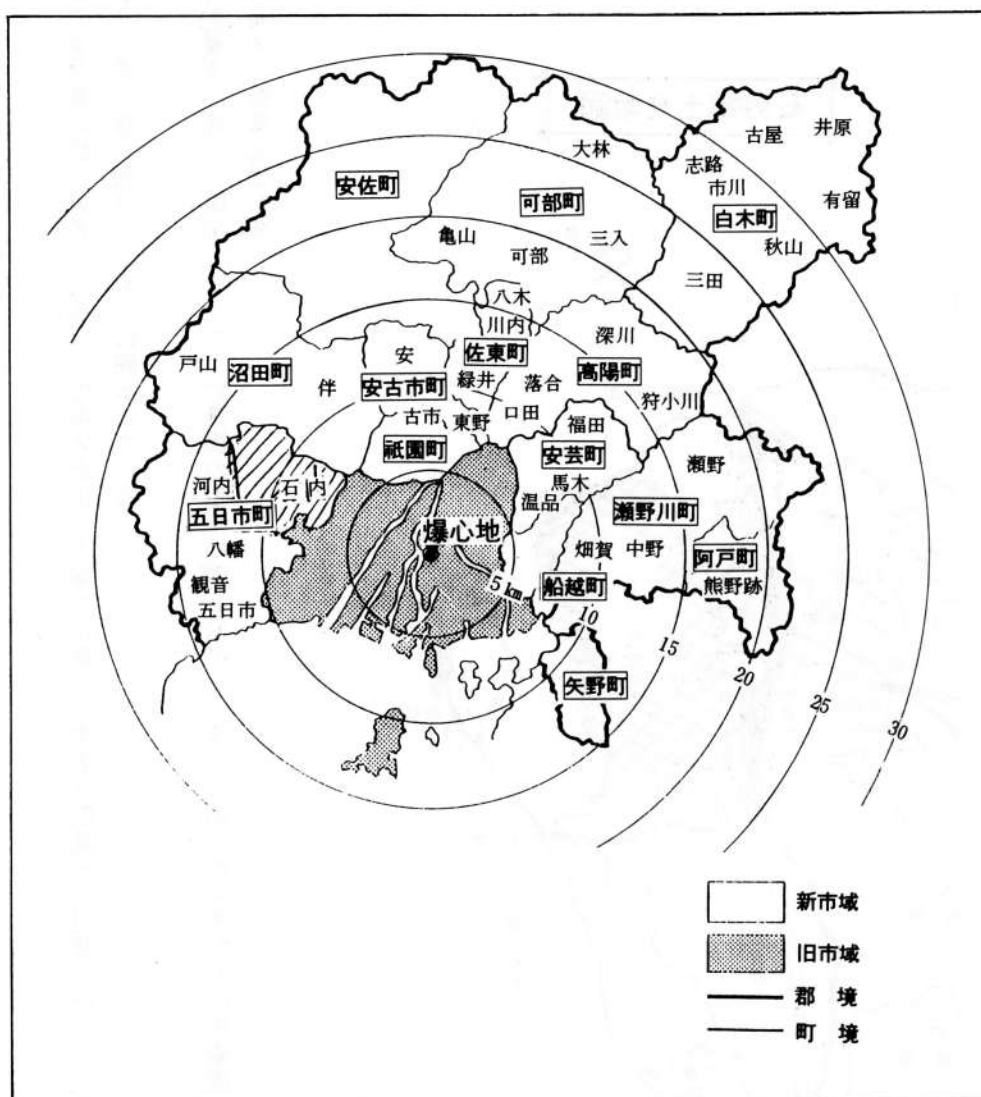
出征兵士の手記……………九五

参考文献……………一〇九

編集を終えて……………一一四

被爆当時の新市域の略図

(「あのとき閃光を見た広島空に」広島市教育委員会刊より)

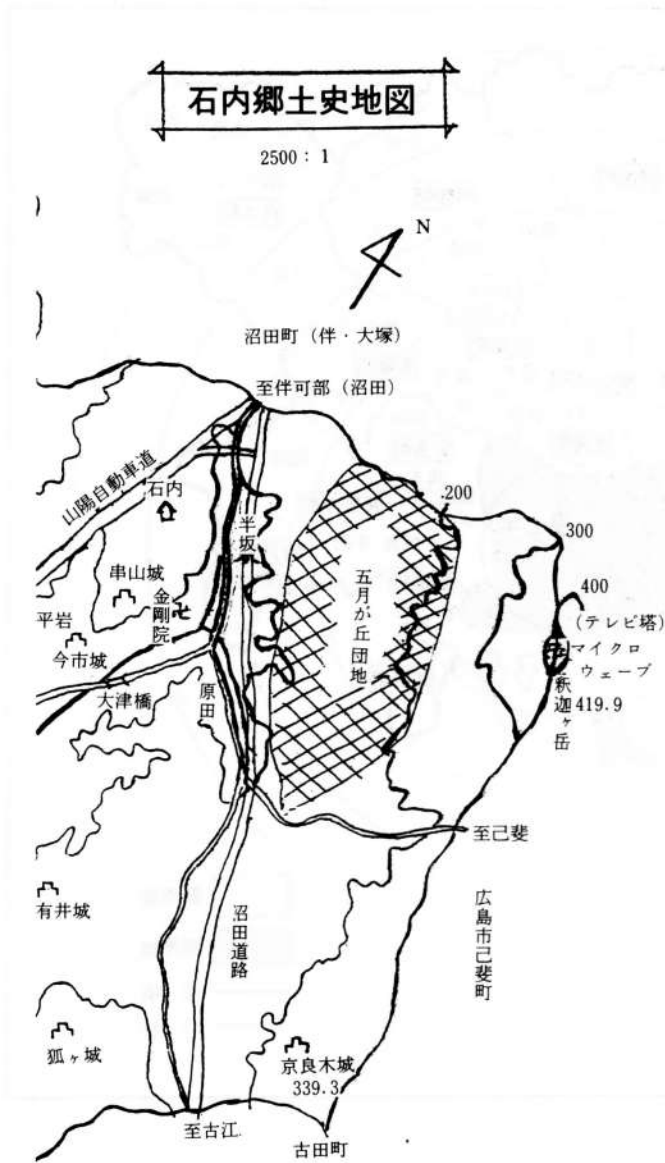


位置

佐伯区の東北部に位し東及び北部は安佐南区沼田（大塚）に接し、南方は広島市（己斐古田）に、西は五日市町八幡、河内地区に接し、南に僅か開け、三方山に囲まれている。

地質

秩父古生層系に属し、腐殖土にして、針葉樹の生育に適し松山よく茂り、地区の中央を石内川南流し、地味肥沃にして米麦の栽培に適す。松茸もまた多し。



	藩政時代 五日市町区域内の 各村課税標準石高	
	村 名	石 高
五日市	皆 賀 村	229.8石
	五日市村	1772.6
	海老塩浜	669.6
八幡	中須賀村	467.2
	高 井 村	86.8
	口和田村	261.5
	寺 地 村	113.1
	利 松 村	414.8
	寺 田 村	142.0
	保井田村	242.7
石内	石 内 村	2239.0
河内	上小深川村	306.1
	下小深川村	79.2
	上河内村	643.1
	下河内村	326.2
観音	倉 重 村	454.9
	千 同 村	436.3
	坪 井 村	308.5
	三 宅 村	310.6
	屋 代 村	230.0
	佐 方 村	755.8
	合 計	10490.711

芸藩通誌1825による

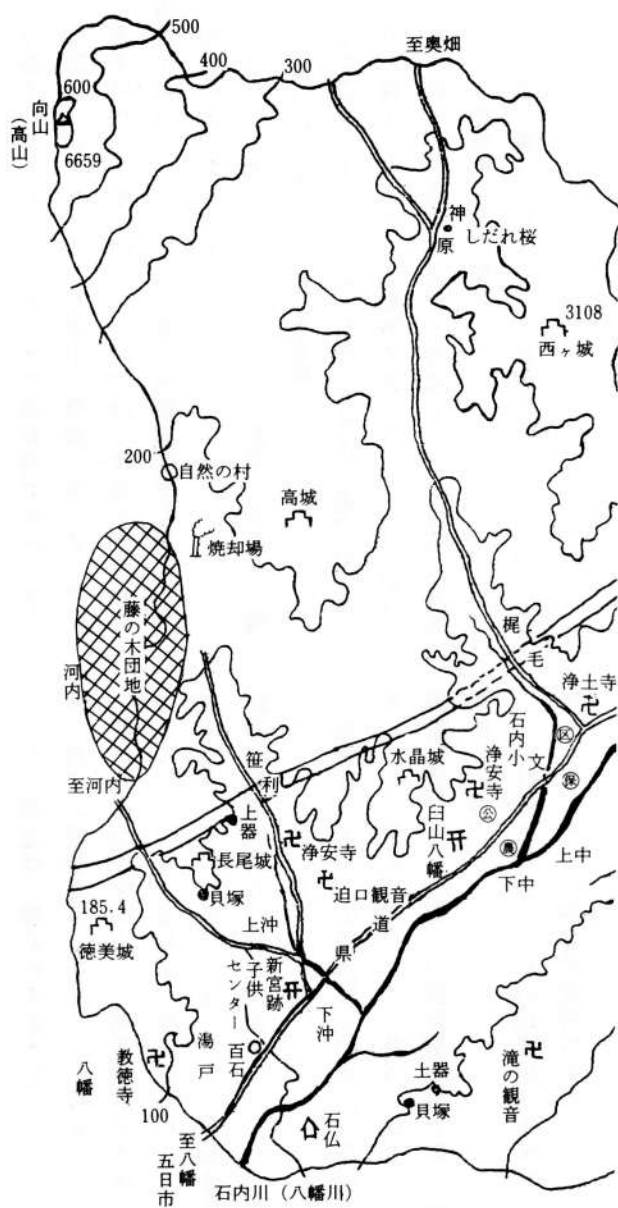
当時の石内の

人 口 2113人

戸 数 507戸

牛の数 281頭

馬の数 86 〃



地区の概況

石内地区は、佐伯区（旧五日市町）の北東部に位置し、終戦当時は佐伯郡石内村と言い、面積は約十八平方料、人口は約二千人の米麦を中心とした農山村であった。

周りの三方を山で囲まれ、中央の細長い平坦部を南西に流れる石内川に沿って、僅かに南に開けて、五日市方面に通じている。

古代は石道村と言い、地区の中程にある白山八幡神社のあたりまでは海水がおし寄せていた。また奈良時代から、九州に通ずる山陽道が通じており、交通上、要衝の地であった。

また、源平時代から戦国時代にかけては、水晶が城を始める多くの古城が築かれ、土器や貝塚等の埋蔵文化財も多く、歴史的にも由緒のある地区である。

石内村は昔から「米どころ」といわれ、良質の米が多く穫れ、藩政時代には約三千石の米を、家老職に納めていたという。

地区の平坦部を沼田から、石内を経て五日市に通ずる県道、原田―五日市線が、唯一の交通動脈であるが、石内原田部落から己斐峠を経て、広島市へ通ずる峠道も、また重要な道路で、昔から人や物資の往来が繁かった。

原爆の被災者が続々と石内へと、避難して来たのも、この峠道であった。

石内地区は、東側が広島市の己斐・古田町に接し、市の中心部から僅か六・七料の近距離にあるが、釈迦が嶽（四一九・九米）を始め約三百米の山々が連なっていて、交通上は不便であったが、この山々のお蔭で原爆の熱光線も、爆風の衝撃もさえぎられ、被害が少なかったのではないかと考えられる。

因みに、石内村は昭和三十年四月、河内、八幡、観音、五日市の五か町村と合併し、五日市町となり、さらに昭和六十年三月広島市と合併して、佐伯区となり、現在は広島市佐伯区五日市町大字石内と呼称する。

しかし最近では、都市化の波が急におし寄せ、専業農家は激減し農家の後継者は、殆どいない現状である。

特に昭和四十年頃より、開発業者が宅地造成のため山林を多く（六二〇ha）買収し、既に五月が丘・藤の木団地は、造成を完成しているが、今後石内川の全面改修や、都市計画街路等の整備が進めば急速に開発が行われ、地区の様相を一変しようとしている。

尚昭和六十年、広島市は石内地区・沼田地区の三八〇〇haを、二十一世紀に向かって、住み・働き・憩い・学ぶという機能を備えた自立都市の構想を発表し現在着々として事業を進めている。

この計画に対して、石内地区民は積極的に参加し理想的な町づくりのため、鋭意研究努力中である。

戦況（緒戦）

昭和十六年十二月八日の払暁「帝国海軍は西太平洋に於て、米英艦隊と戦斗状態に入れり」の臨時ニュース。引続いて午後に至つて、ラジオはさらに、真珠湾奇襲攻撃を発表し、日本は遂に第二次世界大戦に突入したのであった。

続いて宣戦の大詔があり、緒戦の六か月は、連戦連勝の臨時ニュースに、我が日本国民は、戦えば勝ち攻めれば奪う皇軍の戦果に酔いしれていたのであった。

しかし月日が経過し、米軍の反撃が次第に盛んとなり「我が軍はガダルカ島より後退転進するに決せり」という至極簡単な臨時ニュースがあつてから、戦いは次第に我に利あらず、連合艦隊司令長官山本五十六元帥が、ソロモン海域の空中戦に於て、壮烈な戦死を遂げられる等戦局は漸次悪化し、桐一葉の感を深くするようになった。

東條首相は、必勝の信念を以て、内政的には大政翼賛会の強化、債券生活必需物資統制令、米穀の配給通帳制の実施、貯蓄債券、報国債券の発行等を行い、戦力増強を鼓吹した。

さらにまた、御前会議で（一）戦力増強企業警備要綱（二）工場戦時特例法（三）学徒戦時動員体制確立要綱（四）女子学徒動員法（五）国民徴用令改正等大東亜建設指導大綱という法を制定し、「討ちてしまはん」「欲しがりません、勝つまでは」を合言葉と

し、神州不滅、聖戦完遂を期して、一億国民総決起の陣頭指揮をしたのであった。

しかしミッドウェー海戦で主力艦を失い、ソロモン海戦で航空母艦の殆んどを撃沈され、西太平洋の制海制空権が米軍の手中に入つてから、グアム、テニアン両島がB29の発進基地となり、東京を始め関東、東海、関西、九州に至る臨海軍事施設や、重要都市の爆撃は、熾烈を極めるようになった。

このような戦局に対応するため、我が国は戦争完遂のため、必勝を信じ、滅死奉公の精神に燃えていた。

被爆前の状況

出征兵士と村葬

昭和十九年も後半になると、我が国は完全に敵米軍の制空圏内に入り、主要都市の空襲は毎日のように行われ、特に昭和十九年十一月の東京空襲は激甚を極め、帝都は焼野が原と化した。

広島も軍都として重要な位置にあるので、空襲は毎日のように行われ警報も毎日のように発令されるようになった。

しかし、我々日本国民は神国日本を信じ、敗戦など夢にも考えず、耐乏生活に堪え、必勝を信じ、国策に協力して、尽

忠報国の精神に燃えていた。

このように戦局がきびしくなるにつれて、若い元気な者や働ける者は、殆んど召集や徴用にとられて、村には老人や子供、それに病弱者が残り、村や一家の中心は婦人であった。

兵役に服し出征することは、日本男子の本懐であり、家門の誉れと考えられた時代なので「出征兵士の家」という表札の掲げていない家は、肩身の狭い思いをしたものであった。

戦局が進むに伴ない応召される人も多くなり、また帝国軍人の質も低下し、これまで兵役に服さず出征したことのない、第二国民兵役（丙種合格）の者まで、次々と召集令状が来るようになった。

石内村に於ては昭和十八年十月二十七日昭和七年徴兵の第二国民兵（丙種合格）へ初めて召集令状が来た、当時の石内村の人口は約千五百人であったが、その約一割以上の人が出征していた。

召集令状（赤紙）を受けると、家の玄関に大きな国旗を掲げ、家族親族、近所の人々が集って、祝杯を挙げ、出征当日は朝早く村社、白山八幡神社に詣で、村長の激励の言葉を受け、武運の長久を祈り、万才の三唱をして、日の丸の小旗を手に／＼した村人の、軍歌に送られながら出征した。

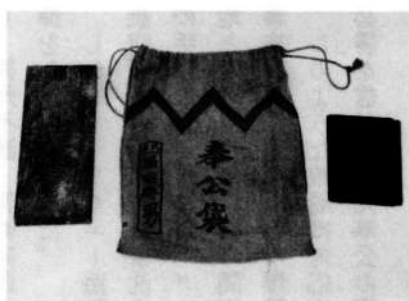
わが大君に召されたる生命ある朝ぼらけ、

讃えて送る一億の歓呼は高く天をつく、

いざ征け兵士。日本男子。（出征兵士を送る歌）

勝ってくるぞと、勇しく誓って国を出たからにや、手柄たてずにや死なうか、進軍ラッパ聞く度に、臉に浮かぶ旗の波。（愛馬行進曲）

出征兵士は、軍隊手帳と紐や、お守り等を入れた奉公袋を手に「出征兵士」と染めぬいたたすきを肩にかけ、村境（己斐峠の頂上か湯戸）まで村人の見送りを受け、そこでまた「帝国軍人として、恥ずかしくないよう一生懸命やってきます」と決意の言葉を残して出発した。



出征誓之家・奉公袋・軍隊手帳

当時、村役場で兵事係として、召集の事務を担当しておられた前田盛登氏（故人）は、次々と召集令状を伝達するのが心苦しく、二度と生還の保証のない家族の心中を察する時、職務とはいえ、断腸の思いがしたと言っておられた。

連戦連勝の緒戦の頃は、

このように日の丸の旗の中で、盛大に壮行式を行っていたが、敗戦の色が濃くなってからは、防諜上の配慮もあってからか、家族や身近な者だけの見送りで、こっそり出征するようになったという。

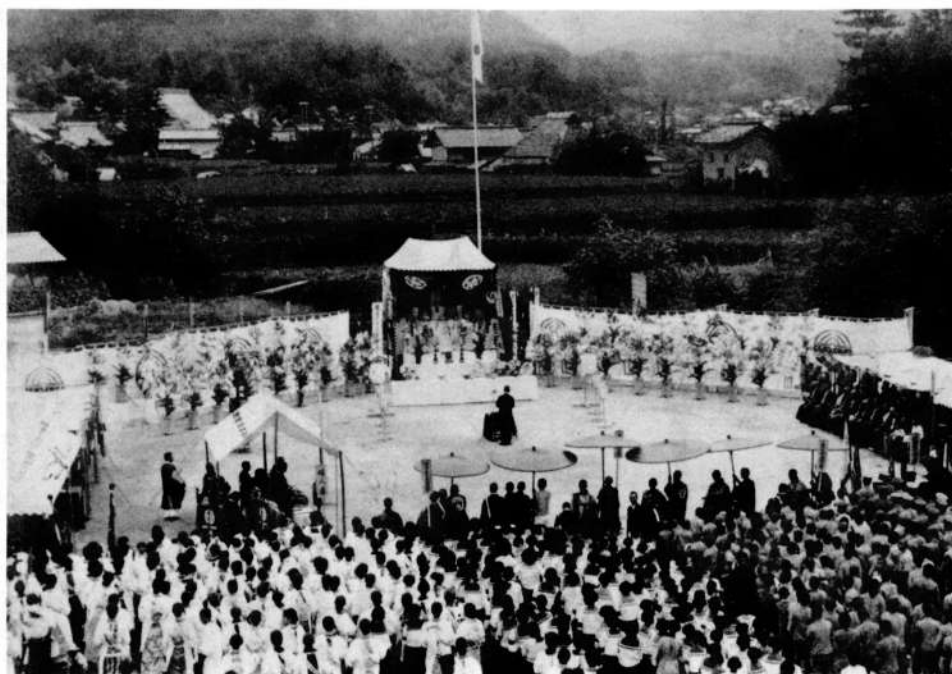
また武運つたなく戦没者の村葬は、村民多数が弔旗を掲げ、村境まで遺骨を出迎え、石内小学校の校庭に荘厳な祭壇をしつらえ、村長が葬儀委員長となり、小学校の児童はもちろん、各種団体、村民多数参列のもと、

海行かば水づく屍、山行かば草むす屍、
大君のへにこそ死なめ、かえりみはせじ。

の荘重な曲の流れる中、善正寺、光禅寺住職並びに浄土寺住職が導師となり、仏式により盛大に執行されていた。

しかし、戦争の経過とともに、簡略となり戦没者も多く、合同葬が多くなり、終戦後は敗戦の混乱か進駐軍の指令か分らないが、村葬は行われなかったといわれている。

そうした関係でか笹利部落では部落葬として、葬儀が行われたという記録が残っている。また終戦後、期日ははっきりしないが、浄土寺で合同葬が執行されたと言うが、主催者は誰であったか記憶がないという。



戦没者の村葬

出征兵士の遺家族の援護については、一家の柱石を失ない働き手がいないので、隣り近所はもちろん村としても、農作業を始め力仕事を手伝い、隣保共助の精神を以て、銃後を守ったのである。

後になると、県に於ても勤労奉仕団が結成され、麦刈りや田植え、稲刈り等の援助の手をさしのべた。(戦時中の石内村の主な出来ごと参照)

尚石内地区から第二次世界大戦に出征された兵士は、実に二百四十五名を数え、その中七十五名が戦死または戦病死されている。

徴兵制と免役(軍制綱領による)

明治五年の徴兵告諭で「全国四民男子二十才ニ至ル者ハ、尽ク兵籍ニ編入」する国民皆兵の大原則をたてた政府は、徴兵令に於て、健康体格以外の免役規定を設け、四民平等の理想を自らくずした。

それは第一に官吏、学校生徒留学生などのエリートを、徴集から除外し、第二に戸主、嗣子など家族制度の存続に必要な者を免役とし、その上代人料二七〇円を納めた者を、徴兵から外した。

代人料による免役は、極めて少数であり、「エリート免役」

は一般庶民には無縁であったが、戸主免役、嗣子免役が一般庶民にとっても免役の道であった。

注一 兵役ニ当ラザル者ハ左ノ如シ

第一 身ノ丈五尺(曲尺)未滿ノ者

第二 身体ルイ弱及ビ宿痼、痼疾等ニテ兵役ニ堪ヘザル者

第三 官省、使庁、府県ニ奉職スル者

第四 文部、工部、開拓其ノ他ノ公塾ニ学ビタル専門生徒及ビ洋行修業中ノ者、並ビニ医術、馬術ヲ学ブ者、教導職試補ノ者

第五 一家ノ主人タル者

第六 嗣子並ビニ承祖ノ孫

第七 独子、独孫

第八 罪科アル者、但除族並ビニ徴役実決一ヶ年以上ノ者トス

第九 父兄存在スレドモ、病氣若クハ事故アリテ、父兄ニ代リテ家ヲ治ムル者

第十 常備兵在役中ノ兄弟 以上

衣料と服装(配給物資)

日常生活に必要な衣料の中、綿製品は外貨獲得の重要物資

であったので、すでに昭和十三年頃より、他の物資にさががけて配給統制になっていた。

第二次世界大戦が勃発してからは、次第に統制がきびしくなり、昭和十七年二月、衣料切符制が実施されることになり、衣料切符が家族数に応じて割当られるようになった。

始めのうちは木綿の配給も相当あったが、日が経つにつれて、人絹やスフが多くなり、遂にはオールスフとなり、洗濯すれば縮んだり破れたりして、長持ちしなかった。

また桑の皮やラミー（まほう草の皮）を婦人会や学童が採集して、供出したりつむいだりして衣料にした。

大人一人当りの年間割当ての点数は都市部一〇〇点、郡部八〇点でおもな衣料品の点数は、背広（五〇点）、国民服（三二点）、レインコート（三〇点）、婦人服ワンピース（一五点）、ツーピース（一七点）、小学生上衣（一七点）、ズボン（五点）、長袖シャツ（一二点）、ワイシャツ（一二点）、モンペ（一〇点）、足袋（二点）、靴下（一点）であった。衣料切符三五点で、肌着の上下が手に入ったように覚えていた。大変少ない配給品なので、子供や家族の多い家庭では、とても間に合わず古着や着物を、仕立て直したり、繕ったりしてしのいだ。それも古い布切れの当たつぎはぎだらけの、服やズボン、モンペであったが、少しも恥ずかしくなかった。

また子供たちは、兄姉のお下がりや、近所の家から小さく

なったり、不用になった衣料を譲り受けたり、交換したりして、胸には住所、氏名、血液型を記入した名札を縫いつけて、非常の場合に備えた。

登校したり外出する時は、必ず戦斗帽か防空頭巾をかぶり、総べての持物に名前をつけねばならなかった。

婦人は、木綿の紺のモンペに筒袖の「上つぱり」が普通で、外出時には、防空頭巾にモンペ姿でないと、警官に注意された。

男の人は、戦斗帽に菜っぱ服の上下、それに巻ゲートル姿の戦時体制の人が殆んどで、頭髮は丸刈りで、長髪は許されなかった。結婚式や葬儀等の儀式の時は、男子は新しく制定された国民服を着る人が多く、女子は黒色の国防婦人会の正服（上着）に統一された感じであった。

履物は、わら草履が主で、ゴム靴や革靴は殆んどなく、学童のズックの配給は、僅かしかなく抽織で配給されるような状況であった。わら草履は破れ易く、一、二日で駄目になるので、毎晩夜なべに作ったり雨降りの日を利用して精出して作った。

日用品のマッチ・石鹸・ローソク・ちり紙等も総べて切符配給制となり、日常生活は困窮を極めた。遂には切符制も現品がなくなり、有名無実の制度となったようである。

山根吾作氏の話によると、マッチの配給も現品が少なくな

り、遂には中身を一本ずつ数えて配給したという。また敗戦後はマツチの配給がないので、火打ち石で火を起したり、天眼鏡（凸レンズ）を太陽に当て、その焦点で発火させた人も多かった。

たばこの配給は昭和十九年一月から配給制となり、男子一人一日に六本になっていた。

統制となった物資

昭和十三年

綿糸・ガソリン・重油・鉄鋼・皮革・石炭・銅・鉛・錫

昭和十四年

釘・針金・鉄線・ゴム製品・米肥料・地下足袋・カーバイト・木炭

昭和十五年

生糸・屑紙・ゴム底布靴・白金・マニラ麻・黄麻・砂糖・小麦・小学生服・靴下・農機具

昭和十六年

マツチ・小麦粉・酒・体温計・硫黄・グリセリン・塩さけ・たら・菓子類・食用脂・煉炭

生活に必要な物資を各部落常会では、どのように各家庭、

各個人に配給したであろうか。一例として当時の石内村笹利部落の状況を述べてみよう。

笹利部落は戸数一九、人口一四四人（内一般成人四五名）の小さな部落であるが、配給物資も地下足袋のように、労働に必要な物は働く成人のみへ、石けんのような物は家族数に応じて全員へと、対象別に物資別に順序を決めて、それぞれ名簿を作り公平に配給していた。

一、労働できる一般成人へ配給する物

労働用手袋 労働用足袋

二、各戸へ平等に配給する物

ネル布地 東京糸 シツケ糸 黒木綿糸 白木綿糸
シャツ 大人用下駄 シャツ用布地 ズボン（男成人）
大徳用マツチ 小徳用マツチ 紙包マツチ 片栗 鱈
チリ紙

三、家族数（全員）に配給する物

洗濯用石けん 浴用石けん 粉末石けん 西洋手拭
風呂手拭 酢 和洋手拭

四、抽せんによる物

腰巻 男子用靴下 人造手編糸 雨傘 味付海苔

（注）上記の配給物資（約三十品目）毎に配給順位を決定し、公平に名簿が作製されている。

氏 名	配給日		労働用手袋配給順位		
奥 明 多寿見	5. 1	(昭和19年)			
増 崎 積	11. 8		氏 名	配給日	
加古川 勲	11. 8		新 宅 新 造	8. 27	(昭和17年)
美 能 コキヌ	11. 8		畠 讓	9. 14	
向 井 富太郎	11. 8		山 田 ハルノ	9. 14	
畠 シズカ	11. 20		国 本 マツノ	12. 7	
国 本 保	1. 11		香 本 徳 一	12. 7	
香 本 シズヨ	1. 11		岡 本 タ カ	12. 7	
岡 本 衛	1. 11		西 本 悦 造	12. 14	
西 本 ハルミ	1. 11		岡 原 正	12. 14	
岡 原 フジノ	(以後配給ナシ)		岡 野 関次郎	5. 1	(昭和18年)
岡 野 ウ メ			美 能 索	5. 1	
美 能 ハルコ			加古川 東 一	5. 1	(昭和19年)
以 下 略	(124名あり)		増 崎 光 男	5. 1	配給ナシ

白木綿糸配給順位 (笹利部落)				
氏 名	配給日	配給日	配給日	配給日
畠 讓	(昭和17) 6. 3	5. 20	1. 30	4. 26
西 本 イ シ	"	"	/	/
増 崎 積	"	"	1. 30	4. 26
奥 明 多寿見	"	"	"	"
新 宅 新 造	"	"	/	"
山 田 熊 二	7. 28	"	1. 30	"
岡 野 関次郎	"	"	/	/
増 崎 光 男	"	"	1. 30	4. 26
岡 原 正	8. 22	"	/	"
岡 本 衛	"	"	1. 30	"
西 本 悦 造	"	"	4. 26	
国 本 保	"	"	"	
香 本 徳 一	"	"	"	
大 田 里	12. 7	"	/	
向 井 富太郎	"	8. 28	4. 26	
加古川 勝太郎	"	"	"	
加古川 京 一	"	"	"	
美 能 コギヌ	(昭和18) 5. 20	(昭和19) 1. 30	"	
美 能 索	"	"	"	

昭和23年8月4日 酢の配給 笹利部落			
氏 名	家族数	配給量	金額
畠 讓	10人	10合	25.0
香 本 徳 一	9	9	22.5
岡 原 正	8	8	20.0
岡 本 衛	8	8	20.0
国 本 保	7	7	17.5
向 井 富太郎	7	7	17.5
加古川 勝太郎	9	10	25.0
増 崎 積	8	8	20.0
増 崎 光 男	6	6	15.0
美 能 索	6	6	15.0
山 田 熊 二	6	6	15.0
小 野 昭	5	5	12.5
増 崎 正 夫	5	5	12.5
新 宅 新 造	4	4	10.0
美 能 進	4	4	10.0
上 田 テ ル	10	10	25.0
増 崎 柳 助	3	3	7.5
奥 明 多寿見	3	3	7.5
加古川 文 江	3	3	7.5
大 田 サ ト	1	1	2.5
西 本 イ シ	1	1	2.5
合 計	124	124	

元来19戸の戸数であったが2戸疎開され21戸となっている。



軍 票

塩引換券	みそ用	購入者印	
塩引換券	しょうゆ用	購入者印	
塩引換券	予備券 (乙)	購入者印	
塩引換券	予備券 (甲)	購入者印	
塩引換券	漬物用 (乙)	購入者印	
塩引換券	漬物用 (甲)	購入者印	

— ご 注 意 —

1. まず右端の塩購入原票を効力なしとしてご自分の好きな小売店に登録し、下欄に預り印を押して貰って下さい。登録変更は毎月でも自由にできます。
2. この引換券で買える塩の数量は小売店の店先に表示します。
3. 右片は当月限り有効です。左片の特配券の使用については市区町村役場を通じてお知らせします。
4. 都道府県外に移転されるときは、登録先より原票の返かんをうけ、表紙の住所をご訂正の上、捺印を得てから小売店に登録して下さい。
5. この購入券は特別の理由がなければ再交付しません。再交付は市区町村役場に申出て下さい。

市県小売店印	小売店印
購入印	

食糧増産と供出及び配給

「腹がへっては、戦は勝てぬ」の諺の通り、食糧増産は農家に対しての至上命令であった。

すでに、昭和十四年四月、米穀統制令が公布され、続いて同年十一月米穀強制買入法、翌十五年五月、米穀強制出荷命令発効等、次々と供出制度が強化されていたが、戦局が進むにつれて、益々強制供出がきびしくなってきた。

働き盛りの男は、応召や徴用で出勤し、農村にはいわゆる爺ちゃん、婆ちゃん、母ちゃんの三ちゃん農業となり、それに肥料は不足し、生産力の低下は免れなかった。

それでも農家の者は、路傍や山麓の草を刈り、道路の牛馬の糞を拾い、炊事場や風呂水に人糞尿を混ぜて肥料としたり、田んぼに焼土等をして、齒をくいしばり、朝早くから夜遅くまで増産に励んだ。

現在のように化学肥料はないので、石内の県道沿いに大きな肥溜めのつぼを掘り（町内会毎に数か所）五日市や広島市から尿尿を運んで来て、腐熟するのを待って、田畑に使用した。

石内地区は昔からおいしい良質の米の出来る所であるが、一毛作の田もかなりあった。しかし稲作の後に裏作に麦を作ることが強制され陽の当たらない谷間の田へも麦を作らねばな

らず、農家は大変な重労働であった。

戦局の急迫とともに、米麦の供出の割当は益々きびしくなり、供出数量も年々増加し、農家は自分で米麦を作りながら、殆んど全部を供出し、残る米は僅少で、屑米に甘藷、大根を炊き込んだ雑炊を食べねばならなかった。

米の供出は、県、郡を通して各町村に割当量を決定し、村ではそれを各部落に割当て、部落では更に常会を開いて各農家へ耕作面積や、家族数、土地の評価等を考慮して供出量を決定するのである。

昭和十八年一月、決定した石内村の昭和十七年産米の供出量は七千俵（二千八百石）という未曾有の数字であった。

そこでいろいろ交渉して、六千八百俵に減額決定して貰った。しかし農家との話し合いで、供出完納の見通しがたないもので、三月十日村長は廿日市警察署に出頭を命ぜられた。

そこで村長は翌三月十一日、急拠村民を集めて、石内村供米協議会を開催、廿日市警察署長、地方事務所長等が出席し、激論の結果三月十五日までに完了することに決定した。ただし割当は二、七三〇石に減額して貰った。

しかし三月十五日に完納しない部落があったので、廿日市警察署や地方事務所の係官が石内村駐在巡查と共に、未納部落を廻り実態調査をしたので漸く供出を完了したという。

供出米の各農家への割当は、必ずしも土地の面積や評価額

と一致せず、例えば県道沿いの平坦部と、梶毛、神原の谷間
とでは、意見が対立し、容易にまとまらず、少しでも供出を
少なくしようと議論が絶えず、二日も三日も夜を徹して協議
したということである。

また、なかには供出を渋っておきながら、倉に隠し米を蓄
え、横流ししたと、警察官に取り調べられて、叱責され却っ
て多く供出させられたとか、いろ／＼の噂も流れた。

増産々々といっても、肥料は乏しく、一定の面積では収穫
量も限定されるので、耕作面積を拡大することになり、休閒
地の利用や開墾が盛んに行われた。

山林や土手、道端の両側等割合に平坦で開墾出来る所は、
開墾してさつまいもや麦・南瓜等を植えた。遂には小学校の
校庭や、お宮やお寺の境内までも耕して、さつまいもを植え
た。

石内でも、上沖の新宮山の平坦部を、六、七戸の農家が開
墾して、麦やさつまいもを作ったり、石内小学校の校庭にさ
つまいもを植えた。このようにして、農家の人は、供出を完
納しようと努力するのであるが、土地・労力・肥料、農機具
等の生産資材も意の如くならず、従って増産もなか／＼思う
ように捗らず、供出米すら収穫出来ない農家もあった。しか
しそれでも供出せねば責任が果せないもので、他家から米を借
りて完納した家もあった。

また供出を完納すれば、後に保有米がなくなり、生活に困
るのでそのため、心身ともに疲れて病気になったり、なかに
はそのため亡くなった人もあったという。

又一毛作田を二毛作田に改良する暗渠工事が石内でも盛ん
に行われた。そして当時、当局からの指示によれば

「戦争は己が血を流してこそ勝利があり、今日の食糧戦に
勝ち抜く食糧の増産は、国民全部が土まみれになってこそ達
成される。

すでに我々は一粒の米も粗末にすまいと努めているが、そ
れは只乏しい中に勿体ないという消極的な表れに過ぎない。

大事なことはその積極面である。今日十の収穫をあげ得る
皇土が、五のはたらきしかしていないとあったら、誠に勿体
ない限りである。食糧増産は地力を最高度に利用することが
要諦である。科学技術力を発揮すると共に、勤労の威力を示
すにある。

信州の或る村では老人でも冬期にこたつに入らず、土地改
良に挺身しているという。農閑期という言葉は、決戦下の農
村にはない」と。

そしてこの土地改良事業には、県の方からの勤労奉仕団が
度々石内村へも来ている。しかし力仕事なので大変であった。

なお、終戦後は極度に食糧事情が悪化し、供出もまた以前
にましてきびしくなった。供出しないと当局からまず村当局

に対して、高圧的な督促があり、遂には警察官が介入し村長に対して、期日を定めて、完納するよう指示し、若し完納しないと警察に連行するという、大変きびしいものであった。

村当局は、農家と警察の両ばさみとなり、その対策に苦慮した。当時石内村の助役であった平崎栄氏の談によれば「我々助役を始め、担当者は夜を徹して毎日、役場を離れず、農家と供出の交渉をしている最中なのに、一月廿四日には必ず供出を完了するよう、一方的に決定し、若し完納しないと、警察に出頭して貰わねばならないとの厳命であった。

そこで我々職員一同は責任を感じ、悲痛な思いを以て、一生懸命努力した結果期限内にやっとの思いで、供出が完納することが出来て、安堵の胸を撫でおろした。

またこんなこともあった。ある日農家の一老婆が役場に訪れ「自分の家では割当を完納すると、保有米は後一日分しか残らない。自分は年寄りだから何時死んでもよいが、若い者はそうはいかない」と言って行方不明になった。

家族や近所の人々が総出で、方々を探索して、やっこのことで発見したが、この家にはほんとに米がなく、生活に困ることは事実なので、自分の責任に於て、組合にある米を一斗五升無断で、取り出して渡してやった。

それが後になって、警察の知るところとなり、警察署に出頭を命ぜられ取り調べを受けた。しかし自分の個人の横領で

なく、人助けだということになり、間もなく帰宅を許されたという。



現在の農協

昭和十五年には既に広島県から、節米実施要領が出されていた。それによると、米食には二割以上の麦（大麦・裸麦・小麦）の混食を励行すること。一般消費者に対しては、一日に一食は粥食か雑炊にするか、或は隔日に一食は代用食にするか、または二食主義を励行する等、各自でそれ

〴〵意を用いるよう指示されていた。

その頃から代用食が推奨され、野草を食べる研究会が盛んに行われ、米どころの石内でも、各家庭で麦ごはんは大根や、さつまいもやじゃがいもを入れて、増量する工夫がなされ、アザミ、スイバ、イタドリ、ヨメナ、ヨモギ等をゆでたり、お浸しにして食べるようにした。昭和十七年七月には米の配給統制が本格的となり、米麦を合わせて、

一日分 大人（十一才以上六十才）約二合四勺（三四〇g）

子供（六才以上十才）約一合四勺七（二二〇g）

幼児（五才未満）約八勺四（一二〇g）

に定められた。

このように供出統制がきびしくなるにつれて、米麦以外のじゃがいも、さつまいもも供出することになり、大根やじゃがいもを入れた麦飯が毎日の定食となり、副食は野菜、漬物、梅干、味噌等で、肉類や肴や鶏卵等の蛋白源は姿を消し、砂糖（キザラ、黒砂糖）、塩（黒い岩塩）も、不足勝になってきた。

昭和十七年頃までに、醤油、味噌、塩、砂糖、するめ、のり、つくだ煮等も統制品になっていたので、醤油、味噌も手に入り難いので、自分の家で造る家もあり、調味料には苦心した。

戦局が進むにつれて、食糧はいよ／＼不足し、コーリャン、大豆槽、ぬか団子、いもの茎、野草など食べられる物は、何でも食べたといってもよいくらいだった。

何時も満腹することなく、年中ひもじい思いで過していたが、不思議なことに、胃腸の悪い人は殆んどいかなかった。

酒の配給は昭和十六年四月から配給制となり、なか／＼難しく、田植え時や取入れ時期に少量の配給があったが、左党の者は不自由なので、内緒でどぶ酒を造る人もいた。結婚や出征の時には、申請すれば特別に二升くらい清酒が配給された。

当時は菓子等は全くないので、子供の「おやつ」は、蒸し

たさつまいもが何よりのご馳走で、さつまいもを食べて育ったといっても過言でない。

秋になると、稲田の路傍に飛ぶイナゴを採り、一晚中瓶の中に入れて糞を出し、翌日佃煮にしたり、煎って食べたが、案外おいしかったという。



植 田 の 田 穀 献

松 根 油 (生松脂)

近代戦はまず航空戦で、飛行機を飛ばす燃料のガソリンが何より必要である。しかし我が国は経済封鎖によって、その原油の輸入が断たれていたため、ガソリンは底をつき、補給がむづかしくなっていた。

そこでやむを得ずその代用として、松根油に頼るようになった。

昭和十九年の広島県の割当量は、松根油五万石で、その原料の松根は、二千万貫、延べ人員百二十五万人を要したという。

石内地区は、松の山林に囲まれ面積も広いので、松根油の割当量も多く（石内の割当量は四万六七〇〇貫）、地区を挙げて松根掘りに協力した。山林に入り松の切り株を見つけ、根元の肥えている古木の根を掘るのであるが、今日のように機械がなく、シャベルやつるはしで掘るので、能率が上らず、特に女性にとっては、大変な重労働であった。

しかも夏に向っての作業だったので、皆んな汗だく／＼の作業であった。

当局からの指示によれば「現戦局の推移に伴ない、液体燃料の確立は、刻下の急務で、如何なる困難をも克服して、之

が割当を完遂せざるべからざる実状にあり。昭和二十年度に於ても本年度に、数倍する割当がある見込みなるを以て、万難を排して増産に全面的に協力を致されたし」と。

そこで石内地区では、各部落毎に割当量を決定し、各部落では交替で、ガソリンは血の一滴と考え、松根掘りに努力した。

石内には松根工場が、平岩部落（現在の大江商店付近）と、下沖部落（現玉貞氏付近）の二か所にあったので、松根をそこまで大八車で運び、松根を小さく碎き、松根釜に入れて、松割木で蒸し焼きすると、黒い松根油が釜の底の穴から、管を伝って流れ出るのを、ドラム罐に集めるのである。

石内では、一日にドラム罐に、二個くらい採れたと、当時平岩の松根油工場の主任をしておられた、木田克人氏は話しておられた。

下沖の松根油工場は、大隅登氏が主任となり、工場の設備は一応出来上っていたが、終戦となり、実際には使用しなかったという。

また石内では、生松脂採りに協力した。生松脂とは松やにのことで、三、四十年も経った大きな松の幹の根元から、一米くらいの所に、V字状に数條の鋸目を入れ、その下に竹筒やブリキ罐（罐詰の）を吊して置くと、松やにが鋸目を伝って、自然に流れ落ちるのを筒や罐を受けて採取するのである。

松やに出なくなると、鋸目を上へ／＼と入れて行くのである。生松脂は全県下にわたって、婦人会や学童によって、採取されたが、果して実戦にどのように役立ったか定かでない。

又「戦う荒鷲（飛行機）になくてはならない潤滑油に事かかせぬよう大いにひ麻を蒔きましよう」という呼びかけで、ひ麻を作った人も多かった。

種子は部落会から隣組を経て婦人会へ配布され、播種の時期は四月が適期で、連作は嫌うから前年作った所は避けるようにという記録が残っている。

昭和十九年度の石内村の松根の割当は、四万六七〇〇貫となっているが、笹利部落の記録によれば、

昭和十九年度 第二期 松根掘追加割当表として、

半坂組一、	九五一貫	原田組一、	八〇六貫
平岩組一、	九二七貫	下講組一、	四七九貫
中講組一、	六九一貫	上中組一、	四九四貫
下中組一、	九五一貫	笹利組一、	三三八貫
上沖組一、	九九八貫	神原組一、	六九一貫
下沖組一、	六九一貫	湯戸組一、	一七八貫
合計	二二、九〇〇貫		

となっている。第二期追加分となっているので、第一期追加分もあったと思われるが、資料が残存していない。

そのように考えると最初の割当の四万六七〇〇貫の二倍くらい供出したのではないかと考えられる。

次に前述のように、松根油工場が石内村に二か所あり、最初の平岩の工場は、昭和二十年三月十四日に起工式を行ない、四月上旬に完成したと記録されている。

笹利部落会長宛の次のような資料が、保存されている。

昭和二十年四月十日 石内村農業会

笹利部落会長殿

松根出荷ニ関スル件

標記ノ件ニ関シテハ種々御配慮ニ預リ、恐縮至極ニ存候
処、愈々製造工場設立致候條、早速左記ノ通り出荷被下
度此段及通知候也

記

- 一、日時 昭和二十年四月十五日午前八時ヨリ午後四時
- 一、場所 松根工場（平岩）
- 一、数量 約三百貫

この記録によれば、石内村農業会より文書が発送されているので、松根油製造は村と農業会とが一体となり、実際

の事業は農業会が担当していたと思われる。
松根油の製造は四月から開始されたのであるが、松根掘

りは一月頃より開始され、笹利部落では共同で松根掘りを
した記録が次のように残っている。

昭和20年（19年度）松根掘日記控 笹利部落												
	1月 16	17	20	21	30	31	2月 2	6	7	18	19	23
奥明	○	△	○	○	○	○	△	△	△	○	○	<
増崎	○	△	<	婦	○	○	△	△	應	○	○	○
増光	婦	應	婦	婦	婦	婦	應	應	應	婦	婦	婦
美進	○	<	○	婦	婦	婦	△	應	△	○	○	婦
加勝	○	應	○	○	○	○	△	△	△	○	○	婦
加文	○	△	○	○	<	○	<	△	<	<	<	<
岡野	○	△	○	○	○	○	<	△	△	○	○	○
美索	○	△	○	○	○	○	△	△	△	○	○	○
新宅	○	△	○	○	午後女	午前男	△	△	△	○	○	○
山田	○	△	○	○	○	○	<	△	△	○	○	○
向井	○	△	○	○	○	○	△	△	△	○	○	○
西悦	○	△	○	○	○	○	△	△	△	○	○	○
西本	○	△	○	○	○	○	△	△	△	○	○	○
大田	<	<	<	<	<	<	<	<	<	<	<	<
岡本	○	△	○	○	○	○	△	△	△	○	婦	○
岡原	○	△	○	○	○	○	△	△	△	○	○	○
国本	○	△	○	<	○	○	應	△	△	土地調査	午前女	午後男
香本	○	△	○	○	○	○	△	△	△	○	○	○
畠	○	△	○	○	○	○	△	△	△	○	○	○
備考 △<欠席○全日 △半日	一日中	半日	一日中	一日中	一日中サヤノ神	一日中	午前中雨ノタメ	午後午前肥料配給	午前午後雪降中止	一日中	一日中	一日中

松根掘の一シーン 下沖 増田 房江

七月の暑い太陽がじり／＼と照りつける。私たち一同は汗だくになって、黙々と松の根を掘る。

すると突然、いつもの通り空襲警報が鳴り響く。もう聞き馴れてはいるものの、矢張り松の太木の陰にかくれる。B 29 が飛行雲の尾を長く引きながら飛び去った。

今中のおじさんが、そっと私の傍に来られ、小さい声で「この戦争は日本は敗けるぞ」と言われる。「貴女らはアメリカの状況を知らんけえじゃが、アメリカには物資が豊富じゃし、卵や牛乳も食べたい放題じゃ。何でも機械で仕事をするし、とても／＼日本のようなことじゃあない」と。

今中のおじさんは、永い間アメリカで移民生活をされ、立派に成功され、その頃息子さん達もアメリカに住んでおられ、アメリカの実状をよく知っておられる方である。

それに私の父も今中のおじさんと、一しよにアメリカに行き、今も私の兄姉がアメリカに居住しているので、心安くほんとの気持を言われたのだと思った。

しかし当時は、憲兵や特高警察がきびしいので、私はおじさんに、「そんなことを言うと、警察や憲兵に引っぱられるよ。用心せにゃあいけんよ」と言う。

しばらくして、皆んなはまた一斉に松根掘りに取りかゝる。

誰かが「待て／＼わし等は、これから松根を掘って油を造り、それからアメリカをやつつけるのじゃ」と言う声がある。

「一億一心、火の玉だ。勝つまでは欲しがりません」と皆んなは必勝を信じ、戦争に協力していたが、何か心の底では、果して勝てるのだろうかの不安が、つきまとっていたのも事実であった。

これは松根掘りの一日の出来ごとであった。

薪たきぎ及び乾草ほしくさの供出

戦局がきびしくなるにつれて、村当局はその筋の命により度々、供米完遂村民大会、戦争完遂決起大会、村民総ぐるみ防空訓練、村民総出席草刈動員等々と銘うって大会を開催し、戦争へ協力させると共に、国民の志気の高揚に努めた。

昭和十九年八月二十四日には、残暑尚きびしい折から、たきぎ生産並びに米穀供出村民大会が、午後二時から小学校の講堂で開かれた。

佐伯地方事務所並びに廿日市警察署よりそれ／＼係官が臨席し、いろ／＼討論の結果、米穀の供出は従前通りとし、新たに八月末日までに新九万束を供出せよというのである。

八月末日といえは後一週間しかない。しかし国策ならば仕方ない。協力することに決定した。

そして薪の供出は、石内村に在住して諸配給を受けている者を対象とし、部落毎に共同作業で実施せよとのことであった。

薪九万束という一戸当り、平均二百五十束の割当ということで、殊に男手のない家では大変なことである。

山林から大きな松の丸太を切り出し、束の寸法と大きさを一定にして針金で束ねるのであるが、真夏の暑い時期である上に、期限が短いしその上松根を掘らねばならないし、食糧の増産もせねばならぬ多忙な時であったが、不平も言わず、供出に協力し完納した。

また軍馬用の飼料として乾草が必要なので、昭和十八年九月十日に石内村を挙げて草刈動員を行ない、乾草の大量増産をした。当日は午前六時より各部落毎に、山麓や道端や各自の水田の畦草を共同で刈り、天日で乾燥させ、後日一定の目方に束ねて供出したのである。

因みに当時石内村の十九戸の小部落笹利部落の記録によれば、第一回の軍用乾草供出量は総計二八四貫（単価八十銭総計二二円七二銭）、第二回の供出一戸当り一四貫、第三回の供出一戸当り二貫となっている。

金属回収

戦争遂行に必要な兵器弾薬の資材として、金属回収は早くから行われていたが、始めのうちは任意のもので、各家庭にあった古い鍋釜や柄のない鎌、鍬、古釘のような屑鉄が主であった。

しかし昭和十六年八月、金属回収令が発せられてからは、強制的に回収されるようになった。

祖先伝来の宣徳火鉢を始め、火鉢、茶釜、燭台、花器、花瓶等、中には家宝として大切に秘藏していたものもあった。

昭和十八年一月には、仏壇の輪灯、五具足まで供出することになり一月十一日石内で回収した金属は二、〇〇〇貫にも達した。そして遂に浄土寺や金剛院（お大師）の梵鐘までも赤たすきで応召することになった。

昭和十八年一月十八日、浄土寺の梵鐘を供出する時は、住職はもちろん、丑田村長、谷川小学校長を始め、門信徒多数集って壮行式を行った。

浄土真宗の熱心な安芸門徒として、如何に戦争とはいえ、大切な仏具や梵鐘まで供出するのは、仏様や先祖に対して申し訳がないと、涙を流された老人もあったという。

また長い間、愛用していた金時計、床の置物、煙草のキセルのように愛着の深いもの、橋の欄干の金具、蚊帳の吊手の



二宮金次郎の銅像除幕式



浄土寺梵鐘の出征



現在の浄土寺

ような小さいもの、台所の鉄、銅、錫製の鍋ややかんまでも供出した。

石内小学校（当時は国民学校）の校門の脇に、本を読みながら薪を背負って立っていた、二宮金次郎の銅像も遂に応召を受け、浄土寺の梵鐘と同じ日、多くの子供に見送られなが

ら供出された。

また各国民学校にあった綱引用の大綱も、軍隊に於て必要などいうので、その筋の命により、止むを得ず進んで供出した。

防空壕と防空訓練

昭和十五年七月、国防国家建設方針として、全国の市町村に対し、町内会、部落常会を制定し、末端の隣保班に互助協力^{（一）}の精神と、上意下達の命令の伝達を計り、空襲対策として防空壕の設置^{（二）}防火水槽並びに防火用火たき棒、バケツリレー用のズック、バケツの常備^{（三）}外出の際は防空頭巾を着用、上・下着物に住所・氏名を記入した布を縫いつけること^{（四）}常会長指揮の下に防火訓練、竹槍訓練、バケツ訓練を実施することと定められていた。

昭和十八年七月改訂の時局防空必携によれば、敵は絶えず空襲の機を狙っている。何時どここの陸上基地や航空母艦から来襲するかも知らない。広い大空で総べての敵機を捕らえて、一機も逃さず撃ち落すことは困難である。

国民はしばらく空襲を受けることを覚悟しなければならぬ。そこで平素からどんな空襲にも役立つよう準備をし、又訓練も重ね非常の際あわてたり、混乱することなく落ちついて御国を守らねばならないと注意を喚起させている。

そして投下爆弾については、焼夷弾を主とし又爆弾も使うであろう。焼夷弾には、エレクトロン、油脂、黄磷等がある。多数の小型焼夷弾と、焼夷力の大きな焼夷爆弾とを使用す

ることもありさらに爆弾を併用することもある。爆弾は枢要部を破壊するためには大型のものも使用される。

尚なかには落ちてから暫く経った後、或いは数日後に不意に爆発する時限爆弾もある。又毒ガス弾や細菌弾を投下したり、飛行機銃撃を行わないとは断言出来ない。

更に宣伝ビラや焼夷カードを撒いたり、玩具や万年筆に見せかけた謀略弾を投下することもある。その他空襲時には味方の高射砲弾の破片が落ちて来ることもあるから注意せねばならない、と。

各家庭の防空のふだんの準備

- 1、防火用資材 イ、水槽（水がめ） ロ、砂袋か土袋（五〇ℓ以上） ハ、蕤^{むしろ}・吹^ふ ニ、バケツ ホ、火叩き
- ヘ、鳶口^{とび} ト、柄杓
- 2、防空用服装 皮膚が露出しない頭巾、手拭、足袋、鉄兜^{かぶと}等
- 3、防毒面 4、灯火管制用具 5、ローソクか懐中電灯
- 6、三角巾、携帯用の布 7、待避所（防空壕）木造住宅に設けるものは出易い床下の地下か、屋外の地下がよい。

- 8、防火、灯火管制について家族の任務を定めて置く。
- 9、家の周囲を片付け、なるべく隣家との通路をつくる。
- 10、押入れや戸棚等を整理し、屋根裏、床下等にある燃え易い物を片付けて置く。
- 11、不用の灯火を消して置く。
- 13、なるべく家を不在にしない。

空襲警報が発令されたら

- 1、防空用服装を完全にする。
- 2、門、倉庫、物置等の鍵を外す。
- 3、火元を始末し、ガスの栓を止める。
- 4、ホースを蛇口につける。
- 5、隣家に接した雨戸やガラスとは延焼防止のため全部閉める。
- 6、家の中の襖や障子を外して、邪魔にならないようにして置く。
- 7、防空活動の出来ない者を、待避所か安全な場所へ避難させる。
- 8、家財道具は持ち出さない。
- 9、夜は灯火管制をする。

防空必勝の誓

一、私達は御国を守る戦士です。命を投げ出して持ち場を守ります。

一、私達は必勝の信念を持って、最後まで戦い抜きます。

一、私達は準備を完全にし、自信のつくまで訓練を積みま

す。

一、私達は命令に服従し、勝手な行動を慎みます。

一、私達は互いに扶け合い、力を協せて防空に当ります。

そこで石内村に於ては防空訓練を日を定めて実施していたが、特に昭和十八年九月八日、石内小学校で行われた防空訓練には、警防団、婦人会、防衛隊等三八〇名が出動し、折からの雨を物ともせず実戦さながらに行われたという。

防空壕は第二次世界大戦が勃発し、日本本土に米軍機の空襲があるまでは、その必要性を痛切に感じていなかった。広島に始めて空襲警報が発令されたのは、昭和十七年四月十八日午後であったが、その後昭和十八年頃より次第に空襲が激しくなるにつれて、各家庭でも空襲に備えて、それぞれ防空壕を造り家族の避難場所とした。

そこで、自宅付近に山林や竹藪のある家では、そこに横穴を掘ったり、庭の広い家では庭に壕を掘り、畳や板や木材で

覆い、その上に土を置く等して、各自の家庭に適した防空壕を造った。

また部落や隣保班で共同で壕を造り、非常の場合は共同で食事や寝起きが出来るような立派な防空壕も造られていた。

そして一朝有事の際は、防空壕に早く機敏に避難できるように、避難訓練も実施したが、幸いにも実際に防空壕を実戦に使用することなく終戦を迎えた。

今日でも石内の山麓の、あちらこちらに当時の防空壕の残骸の横穴が現存している。

昭和二十年二月には、いよ／＼戦局はけわしく、当局から市町村長に対して「本土に対する敵の本格的空襲は、既に開始され今後倍々、熾烈を加うることは言を俟たざる所にして、本県下に対する空襲も亦必至と判断せられ、特に重要地区に対し、敵機侵入の偵察を敢行せる事実よりするも、事態極めて急迫せるを痛感するを以て、此の際万難を排し、防空態勢の強化に努められたし」とのことであった。

そこで焼夷弾投下による火災を想定して、各家庭や部落では常時、防火水槽、数個のバケツそれに、防火用の火たゝき等を備えつけ、日を定めて防火訓練を実施していた。

防火訓練は常会長の指揮により、警防団員の指導のもとに、主として主婦（婦人会）を中心に、防空頭巾を被り、もんぺ姿で甲斐々々しく、バケツリレーや手押しポンプ、ホースの

操作訓練もした。

また敵の本土上陸に備えて、一億総武装ということ、女性にも竹槍訓練をして、士気を鼓舞したが、女性は腰に力が入らずなか／＼上達しなかった。

各家の窓ガラスには、爆弾によりガラスの破片が周囲に、散乱しないように、日本紙で×字形に貼りつける家も多かった。

夜間は、灯火管制が厳重に実施され、市街地は暗黒の街と化し、人通りのない死の街となった。

警戒警報の時はそれ程でもないが、空襲警報が発令されると、蛍の光のような小さい明りでも、敵機の標的になるといわれ、見廻りの警防団員や警察官によって厳重に注意された。

各家では、電灯（当時は裸電球で広い丸い笠があった）に黒い布や紙で造った袋で覆い、さらに障子や襖等の建具にも黒幕を張り、少しの光も戸外に漏れないように注意した。

家の中が真暗になるので、子供の勉強や大人の夜なべも思うように出来ず、暗い不自由な生活であった。

敵機の投下する爆弾に、二種類あつて火災を起こす焼夷弾と、建物等を破壊する爆弾とであるが、一般国民にこれを周知させるため、金だらいを叩いたら焼夷弾、太鼓を叩いたら普通の爆弾と区別していたということである。

また農家の倉や納屋の白壁が、敵機の標的になり易いとい

うので、真黒に墨を塗った家も、あちらこちらに見受けられた。

興亜奉公日から大詔奉戴日

昭和十二年、日中戦争が始まると、政府は国民精神総動員運動を強力に推進して、挙国一致戦争に協力させる態勢を整えた。

そして毎月一日を興亜奉公日と定め、次のような趣旨の徹底を図るよう指示していた。

趣 旨

当日、全国民は挙って戦場の労苦を偲び、自粛自省之を實際生活の上に、具現すると共に興亜の大業を翼賛して、一億一心奉公の誠を効し、強力日本建設に向って邁進し、以て恒久実践の源泉たらしむる日となすものとす。

実践項目

一、早朝、神宮並に宮城に遥拝をなし、神社に参拝して、皇運隆昌の祈願を為すこと。

一、護国の英霊に感謝を捧ぐる為、黙禱、戦歿勇士の墓参、墓地の清掃等を行うこと。

一、前線に慰問文、慰問袋を送り、又傷病軍人を見舞い、出征遺族家族の慰問等を行うこと。

一、終日禁酒禁煙を為し、堅忍持久の精神を養うこと。

一、克己弁当の携行、一汁一菜の食事、繕いたる衣服の着用等簡素生活を為し、節約を図ること。

一、早起き、徒歩主義を励行し、健康増進に留意すること。

一、遊覧、観劇、宴会其の他遊興的行為を、一切慎み生活の緊張を図ること。

一、此の日に節約したる金は、必ず貯金すること。以上

こうした国民精神総動員運動は、戦局の進展によって、大政翼賛運動に改組され、政党も解散し、聖戦貫徹に国論を統一することになった。大政翼賛会は全国の各県に支部を置き、その下部組織として、市町村支部が結成された。

そうしてその末端組織として、部落常会（町内会）並びに隣組（隣保班）等の住民組織をつくった。これらの組織は銃後の援護、国民防空、貯蓄の増強、食糧物資の増産、配給、供出、消費の規制等の重要国策の遂行の単位として、大きな役割を果たした。

石内村では、従来からあった十二の部落を部落常会とし、その下部組織として、十戸内外の戸数を以て隣組を結成して、

上意下達の機関とした。

そして配給も供出も勤勞奉仕もすべて、この組織を通じて伝達運営され、特に回覧板は上意下達に大きな役割を果たした。

とんとんとかりと隣組 障子を開ければ顔なじみ
まわして下さい回覧板 知らせられたり知らせたり

第二次世界大戦が勃発してから、一層国力を結集して、難局を克服し、戦争の完遂を図るため、昭和十七年二月より、興亜奉公日を大詔奉戴日と改め、毎月八日宣戦の大詔を、各学校、職場で捧読して、士気の昂揚を図り、実践項目の徹底を期することとなった。

常会に於ける毎月の徹底事項

戦争完遂のため上意下達の機構として、常会（部落、町内会毎に）を置いたことは、前述の通りであるが、その常会へ毎月の徹底事項として、内閣情報局から示されたものは次の通りである。（抜すい）

昭和十九年一月 常会徹底事項

征戦第三年、総員戦斗配置へ―新たに迎える昭和十九年こそは、総反攻を企てている敵米英を、必ず撃破すべき年である。今こそ国家の要請に応えて一億総出陣の決意を固め、一人残らず戦斗配置につき戦力増強めざして突進しよう。

イ、平時的な仕事にある人々はこの際、飛行機、船舶その他の軍需工場等に進んで転出し、女子も挺身隊となつて生産戦場で戦い抜くこと。（決戦態勢確立）

ロ、米麦を増産するための土地改良をなし遂げ、また米や甘藷の供出割当量は必ず果すこと。（食糧増産と土地改良）

ハ、疎開を行う都市に住む必要のない人々は、この際地方に出ること。（都市疎開要項）

昭和十九年二月 常会徹底事項

その日その日が決戦です。あらゆる創意と工夫を凝らし、あるもので「間に合せ」を実行し、不自由や困難に打ち勝つて戦争生活に徹底し、その中から旺盛な戦力を生み出しましょう。

一、間に合せの戦争生活を実践しましょう。

イ、衣類、家具類の新調や新規購入は見合せ、ある物で間に合せましょう。

ロ、電気、ガスは割当量で間に合せましょう。

軍艦や戦車、飛行機は決戦下どしどし造らねばなりません。これを造るに必要な電気やガスは節約すること。

二、皆んなで玄米食を実行しましょう。

水洗いは一度だけとし、水加減は玄米一升に水二合程度で、とろ火で焚くこと。工夫して燃料や時間を無駄にしないこと。部落会、隣組で座談会や研究会をして早く実行に移すこと。

三、自給肥料を増産しよう。

本年は食糧自給の年です。金肥はます／＼窮屈です。自給肥料が絶対に必要です。

イ、枯草刈りを徹底すること。

冬のうちに枯れ立っている草を刈り取って肥料にすること。

ロ、落葉も稲わらも麦わらも無駄なく堆肥にすること。

山から落葉を拾い集め、わら類は焼かないで堆肥にすること。

ハ、緑肥を増産するため、栽培方法を工夫し、播種面積の拡大を図ること。

二、灰の蒐集

灰は貴重なカリ肥料です。捨てないよう生かして使うこと。

ホ、畜産、禽舎の汚物、池、沼、溝などの泥土を肥料にすること。これらを工夫して肥料不足を克服しましょう。

昭和十九年三月 常会徹底事項

一、二百七十億円の貯蓄は必ず突破すること。

イ、差当り用のない現金は、残らず預け入れること。

ロ、物を買うことは極力止めて、間に合せて励行し最低の生活を、実践すること。

ハ、毎月十日の勤儉貯金日には、一人残らず貯金すること。

二、防空陣をしっかりと固めること。

イ、指示されている通り必ず家庭待避所（防空壕）や公共待避所を造ること。

ロ、防火用水は基準以上に必ず準備し、消火に困難な場所にも置くこと。

ハ、空襲は夜間に多いから「くらやみ」でもあわてないよう、家財や非常袋等を整理し、家の周りを片付け何時でも防空活動ができるようにして置くこと。

昭和十九年四月 常会徹底事項

戦い抜く生活へ——私ども一億は今までの生活に一層の反省を加えて、戦い抜く生活を力強く打ち立て、生活の一切を挙げて戦力増強に邁進し、一丸となって仇敵米英撃摧に邁進せねばなりません。

イ、一人残らず増産に挺身すること。

ロ、空襲への不断の準備を整えること。

ハ、私事の旅行は一切やめること。

ニ、空地は一寸も残さず増産に役立てること。

ホ、生活を徹底的に簡素にすること。

昭和十九年九月 常会徹底事項

一億鉄石の肚がまえを決めること——戦局はいよ／＼急迫して来ました。この重大の難局に立った私どもは、皇国の伝統の忠誠心を更に振り起し、大和一致あくまで決勝に向って突き進む、肚がまえをしつかりと固めねばなりません。

今こそ思い上った鬼畜米英に一億の真の力を思い知らせる時です。

イ、空襲の備えに手落ちはないか。しつかり見極めること。

ロ、農村も都市も食糧の増産に一段と努めること。

ハ、お互いの創意と工夫で、物の不足を克服すること。

昭和十九年十月 常会徹底事項

前線に呼応、国民総武装で起ち上ろう——今こそ傲慢無礼の敵を、たたきつける時です。前線の血斗に応えて国民総武装で起ち上り、一億の総力を戦力増強に、国土防衛に集中しましょう。

イ、食糧の増産や飼料の確保に努めること。

ロ、軍人援護を強化すること。

昭和二十年一月 常会徹底事項

聖戦第四年、一億の総当りで突進しよう——日米血戦の真只中に聖戦第四年を迎えた。今こそ国土も戦場、一億が神風特攻の精神、あの精神、あの気魄を以て生産戦に防空に体当りして、この年こそ醜敵撃摧の年とせなければならぬ。

一、老幼者、妊婦などを疎開させ、重要都市を守り抜こう。

イ、防空活動に足手まといになる老幼者、妊婦などを寸刻も早く疎開させること。

ロ、家族を疎開させる家庭に対しては、隣組等でできるだけ家事の手伝いをする事。

ハ、受入側では疎開者に対して、温い戦友愛を以てお世話すること。

二、麦の手入れと薬工品の増産に敢闘しよう。

イ、麦ふみ、中耕、土入れを励行し麦の大増産をやりとげること。

ロ、縄、むしろ、かます等の薬工品を割当以上に必ず生産すること。

昭和二十年四月 常会徹底事項

一、軍需工場の防護の徹底—軍需工場（特に航空機関係）についでの情報等不用意に秘密を漏らさぬよう十分注意すること。

二、主要食糧配給の厳正—本年度は主要食糧の米の代りに藷類、満州雑穀が相当配給されるが、地域によってはこれらの配給がうまく按配されぬ所が生ずることが予想されるので厳正を期すること。

三、水稻の健苗育成

四、塩の節約と自給製塩の普及—戦を勝ち抜くため塩は絶対に必要欠くべからざるものなれば、海辺では自給製塩を普及し、一層節約に努め無駄に使用せぬこと。

五、六百億円貯蓄の必成

皇土血戦への五訓

昭和二十年四月、戦局はいよいよ急迫を告げた時、阿南陸軍大臣は全軍将兵に対し、次のような五箇條の決戦訓を布告した。

決 戦 訓

仇敵撃滅の神機に臨み、特に将兵に訓ふる所左の如し。

一、皇軍将兵は神勅を奉体し、愈々聖諭の遵守に邁進すべし。

聖戦の遵守は皇国軍人の生命なり。神州不滅の信念に徹し、日夜聖諭を奉体して、之が服行に精魂を尽くすべし。必勝の根幹茲に存す。

二、皇軍将兵は皇土を死守すべし。

皇土は天皇の在しまし神聖鎮まり給ふ地なり。誓って外夷の侵襲を撃攘し、斃るゝも留めて之を守護すべし。

三、皇軍将兵は待つあるを待むべし。

備えある者は必ず勝つ、必死の訓練を積み不拔の城壘を築き、斗魂勃勃以て滅敵必勝の備えを完うすべし。

四、皇軍将兵は体当り精神に徹すべし。

悠久の大義に生くるは皇軍武人の伝統なり。皇軍体当

り精神に徹し、必死敢斗、皇土を侵犯する者悉く之を殺戮し、一人残らず生還なからしむべし。

五、皇軍將兵は一億総戦友の先駆たるべし。

一億同胞は総べて是皇国護持の戦友なり。至敵なる軍紀の下、戦友の情誼に生き、皇軍の真姿を顕現して、率先護国の大任を完うすべし。

右の五訓、皇軍將兵は須く之を恪守し、速かに仇敵を撃滅して宸襟を安んじ奉るべし。

結婚改善必行事項

(昭和十七年頃佐伯郡大政翼賛会支部で制定されたもの)

一、式服 簡素ヲ旨トシ新調ヲ廃止ス。

男子ハ国民服、軍服、团服、通常服(和服ヲ含ム)ニ
儀礼章ヲ佩用ノコト。

女子ハ通常着ノ上ニ、大日本婦人会服ヲ着シ、儀礼章
ヲ佩用ノコト。

二、頭髮 女子ハ髮飾、パーマネントヲ廃止シ束髪トスルコト。

三、結納 極メテ簡素ニシ、国債々券ヲ以テスルコト。之ニ
対スル返シハ行ハズ。

四、調度品 鏡台、針箱、行李、支那鞆ノ程度トスルコト。

衣服其他ノ持参品ノ新調ハ極力節減シ、其ノ経費ハ国債々券又ハ貯金通帳トシテ携帯ノコト。

五、挙式 1 婿入りハ人数ヲ五人以内トスルコト。

2 結婚式ハ神仏前ニ於テ厳肅ニ行フコト。参列者ハ父母、兄弟、姉妹、伯叔父母及ビ媒酌人ニ止ムルコト。料理ハ五品以内トス。

3 近所其ノ他一般ニ対スル披露宴ハ行ハズ。近所ニ
対スル嫁披露ハ常会ノ際、挨拶ヲナスコト。

六、贈答品近親ニ限り其ノ他ハ廃止ノコト。里帰りニ於テ三ツ目餅又ハ赤飯等ノ配布ハ行ハズ。

七、実行保障 1 同一町村ノ場合ハ、町村長、町内会長、部落
会長、隣保班長、方面委員、国民学校長、青年学校長、
婦人会長並ビニ結婚委員ニ於テ、婿嫁両家ニ付キ大政
翼賛会佐伯支部決定ノ結婚改善必行事項ヲ伝エ、其ノ
実行ヲナサシムルコト。

2 郡内他町村間ノ場合ハ関係町村長ハ互ニ連絡シ、
右ト同様ノ方法ニ依リ、其ノ実行ヲナサシムルコト。

3 郡外郡市町村又ハ県外ノ場合ハ、町村長ヨリ大政
翼賛会佐伯支部決定ノ結婚改善必行事項ヲ、相手方町
村長ニ通知シ其ノ実行ニ協力ヲ求ムルコト。

大日本婦人会長モ相手方市町村婦人会長ト、連絡シ其
ノ実行ニ協力ヲ求ムルコト。

以上



戦時中の国債々券

各団体の活動

翼賛壮年団

翼賛壮年団は全国的組織として発足し、その末端組織として各市町村に支部が結成され、それ／＼の地区で最も有能な壮年が団員に任命された。

そして戦争完遂のため、総力を挙げて決戦態勢を整えるため、中核的な存在として活動をした。団長は概ね地区の小学校長（当時は国民学校校長）が任命されていたが（石内は谷川省三校長）終戦後、壮年団長は戦争に積極的に協力したという事で、昭和二十二年マッカーサー指令により公職から追放された。

婦人会

婦人（主婦）を構成員とする団体として、明治の頃から愛国婦人会が結成されていた。出征兵士の見送りや、傷病兵の慰問、軍人遺家族の援護等を、主な目的として活動していたが、その貴族的な性格にあきたらないとする軍部の力により、昭和年代に入り大日本国防婦人会が結成された。

その名称が示すように、軍に協力し戦争完遂のための活動

が主目的であり、戦局がきびしくなるにつれ、その活動も多忙を極めた。

石内地区での婦人会活動は、国防婦人会としての活動が殆んどで、大日本国防婦人会と染めぬいた白いたすきを肩に、甲斐々々しく立ち働いた。

日中戦争の頃は、出征兵士の見送り、傷病兵の慰問、戦没者家族の慰問援護、村葬への参列、慰問袋、千人針の製作等が主であったが、第二次世界大戦に突入してからは、男子が少なくなり、銃後を守る主体が、次第に婦人に移り、防空訓練、食糧増産、物資の配給、供出も婦人が先頭に立って、立ち働かねばならなくなった。

銃後と戦地の区別がなくなり、婦人も防空頭巾にもんぺ姿で、バケツリレー、米軍の本土上陸に備えての竹槍訓練、救急看護訓練、焚き出し訓練等血のにじむような訓練に、歯をくいしばって耐えたのであった。

また婦人会や小学校高学年の生徒が中心となって、彼岸花（曼珠沙華）の球根を採取して供出した。彼岸花の球根は漢方医によれば、麻醉剤がつくれるということであるが、当時は強力接着剤として軍需品になるということであった。

警 防 団

警防団は従来から存在していた消防団を、時局に即応して改組されたもので、召集や徴用に動員されないで、村に残っている四十五才位までの男子で組織されていた。

火災やその他の災害で出動することは勿論であるが、警察官の補助として、治安の維持にも協力した。

警防団と記された腕章をつけ、灯火管制の点検、見廻りや、防空訓練、消火訓練等を、在郷軍人とともに、婦人会を始め地区住民の実地指導等を行っていた。

団員は石内地区に二か所詰所を設け、毎晩交替で勤務し、地区内を巡回見廻りして、火災や災害予防、治安の維持に努めた。

また原爆投下後、石内へ避難した被災者の救護、石内地区民の広島市で被爆し、行方不明になった人々を、探したり、死体を運んだりする困難な役目を果たしたのも、警防団の主な作業であった。

在郷軍人会

元来は兵役に服し満期を迎えて、帰郷した退役軍人（軍人のOB）を中心に組織されたもので、地域で発言力の最も大

きい団体で、平素から心身を鍛錬し、一旦有事に備えていた。しかし戦争がきびしくなるにつれ、地区内の壮年男子は殆んど出征したので、これまで兵役に服さない第二国民兵役（丙種合格）までも在郷軍人会に加入することになり、国土防空の中核として、警防団と一体となって活動した。

国民義勇隊

戦局がいよ／＼急迫を告げた昭和二十年六月、一億総武装本土決戦に備えて結成されたのが、国民義勇隊である。

もう村には元氣な若者は僅かであったが、男子六十五才以下、女子四十五才以下を隊員として結成された。しかし実際の活動は広島市への建物疎開に従事することであった。

原爆が投下された昭和二十年八月六日、石内村国民義勇隊は、広島市の建物疎開に出動することになっていたが、何かの都合により延期となり、やむを得ず大竹の方々が代って、出動されて被爆されたということである。

そのため石内の義勇隊の人々は災難をまぬがれたのであるが、その反面大竹の方々の多くが、被爆され大変気の毒なことであった。

人の運命の不思議さをつく／＼感ずるものである。

広島市の建物疎開とは、当時の広島市は木造家屋が密集し

ているので、一旦敵機の空襲を受け焼夷弾が投下されると、火災を起こし家屋に延焼し、また／＼間に火の海となり、市民が避難するには道路は狭いし、避難場所（広場）がないので、密集した家屋を倒壊させ、適当な広場を造り、道路を広くする作業をいう。

その作業に、広島市近郊の国民義勇隊や、学徒、警防団等の団体が出動した。

国民学校（小学校）（当時の教育）

昭和十六年四月一日から、明治五年学制発布以来、長い間呼び馴れた小学校を、国民学校と称するよう改正された。

皇国の道に則り、初等普通教育を施し、国民の基礎的錬成を目的とし、心身の鍛錬を主とした、皇国史観に基づく教育である。

義務教育年限も六年から八年に延長され（初年科六年、高等科二年）になり、従来の高等科が義務制となった。

教科も新しい方式が採用され、国民科（修身・国語・国史・地理）理数科（算数・理科）体錬科（体操・武道）芸能科（音楽・習字・図画工作・裁縫・家事）実業科（農業・工業・商業・水産の中から地域の実体により選択）の五教科にまとめられた。

石内小学校（正確には石内尋常高等小学校）も、石内国民学校と改称し発足したのであるが、その年の十二月第二次世界大戦が勃発し、児童は落着いて勉強することが出来ず、学校教育へも戦時色が次第に濃くなって行った。

即ち出征兵士の見送りや、慰問は勿論勤労奉仕へも動員され、高等科の生徒は、学徒動員令により軍需工場に動員されるようになった。

戦局の進展に伴ない、児童は登校しても勉強は、殆んど出来なくなり、避難、防空訓練をしたり、運動場にさつまいもを植えたり、野草彼岸花の球根の採取に奉仕し、帰宅すれば食糧増進を手伝い、子供ながらも「欲しがりません、勝つまでは」の標語のように戦争遂行のため協力した。

また高学年の子供は、軍馬の飼料にするため、土手や畦畔の草を刈り乾草とし束ねて供出した。

当時の国民学校には、校門を入ると必ず御真影奉安殿があり、天皇皇后両陛下のお写真と、教育勅語が安置されていた。石内国民学校にも石の正門を入ると、右側に四角なご殿のような立派な奉安殿があり、児童も先生も一般の人々も、学校に入ってくる、先ず脱帽して奉安殿に最敬礼しなければならぬことになっていた。

また奉安殿と並んで二宮金次郎の銅像が、薪を背に本を読みながら立っていた。二宮金次郎は当時の子供にとって、何

よりの手本であり師表であった。

学校の儀式の中で、入学式や卒業式より外に、四大祝日といって、新年（一月一日）紀元節（二月十一日）天長節（四月二十九日）明治節（十一月三日）は最も厳肅な儀式を行なった。

当日は両陛下のお写真を講堂の正面に安置し、校長先生がモーニング姿で、白い手袋をはめ、み簪を挙げて一同最敬礼をした後、教育勅語を捧読されるのを頭を下げて聞くのであった。

「朕惟フニ我力皇祖皇宗、国ヲ肇ムルコト宏遠ニ、徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」という相当長い勅語なので、先生を始め生徒児童一同は最後まで頭を下げて、静かに聞くのが大変苦痛であった。

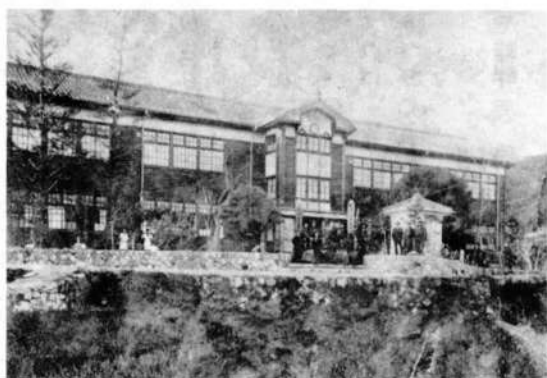
また当時の教育は、忠孝が中心で皇国史観に基づき、我々日本国民は天皇のために生まれ、天皇のために死ぬるのだと教えられ、大きくなったら軍人になるのが何よりの忠孝であり、名誉なことだと考えられていた。

学生、生徒の志望も当時は、海軍兵学校、陸軍士官学校に入学するのが最高でありまた難関でもあった。

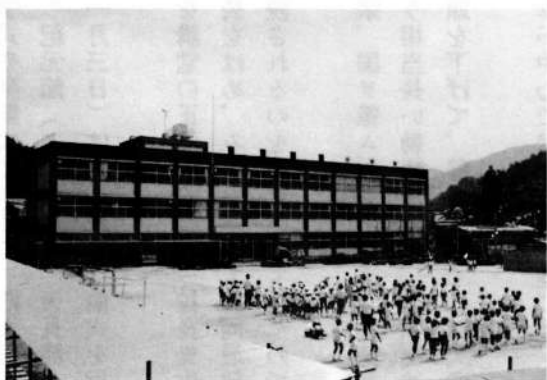
戦局がきびしくなると、満二十才の徴兵検査を待たず、満十五才位で兵役に志願する者が多くなり、中学校二年位から予科練に死を覚悟して入隊するようになった。



石内国民学校入学記念
(白山八幡神社)



御真影奉安殿建立記念



現在の石内小学校

若い血潮の予科練の 七つボタンは桜に錨
今日も飛ぶ／＼霞が浦にや でっかい希望の雲が湧く

昭和十九年八月には、学徒動員令が下り、これまで召集延期になっていた大学及び専門学校の学生諸氏に対して、国家存亡の重大時期に際会して、国難に殉ずべく学業とペンを捨て、銃を肩に戦地に動員されていた。

広島県に於ても昭和十九年五月、広島県勤労学徒動員本部を設置し中学校（国民学校高等科）以上の学徒、生徒は軍需工場に動員され、六月から実施されていた。
これら動員学徒は戦勝を信じ、懸命に働いていたが、残念ながら被爆し、現在わかっているだけでも県下で約六千人の若い生命が奪われている。

青年学校

従来行われていた実業補習学校と、青年訓練所の統一を図り、戦時下の青年教育を推進するため、青年学校が設立された。

青年学校の課程は、小学校を卒業した者が入学し、普通科（二年）高等科五年（女子は二年）で、主として男子は軍事訓練に力を入れ、演習や行軍、軍役作業を多く取り入れ、毎年陸軍将校による厳格な査閲があり、軍隊教育といってもよい内容であった。

石内にも青年学校が石内小学校に併設され、小学校長が校長を兼任し、溝手先生を始め有能な先生が就任しておられた。軍事訓練は石内出身の退役下士官が主として、指導に当たられた。（池之子盛登、土井秀司、倉本貞生、谷本貢、影本琢磨等の各氏）

空襲が激しくなるにつれて、青年学校の生徒は防空に救護に増産にと、総べての活動を警防団員とともに中核となって働いた。

特に原爆投下後に被災者の多くが、浄土寺に避難して来られた時、救護されたのは青年学校の女生徒が中心であった。



御真影奉安殿と青年学校生徒

敵機撃墜

上沖 久保田 晃

昭和二十年七月十四日午前十一時頃、私は学徒動員で日本製鋼所に動員されていたが、丁度休日なので在宅していた。

平素聴き馴れない飛行機の爆音がするので、不審に思つて道路に出て見ると、山田方面から低空で三機編成で、悠々と南西に向かつて、飛行するのが見えた。

すると突然編隊の後方から、高射砲の破裂する煙が浮かんで見える。やっぱり敵機であつたのである。しばらくすると後の一機の尾翼あたりがピカッと光つたのが見えた途端、その飛行機が編隊から遅れだした。

それも束の間、尾翼が分解し機体が頭部から急降下し始めた。命中したのだと一瞬どよめいた。

すると機体の破片とは違うものが、ふわり／＼と落ちて来るものが見えた。よく見ると落下傘である。それも二個位見えた。その一つは風に流されて降下した。

私は見に行こうか、どうしようかと思案した。見に行きたいが射ち殺されはしないかと、恐しさが半分ある。

少し考えていたが意を決して見に行くことにしたが、竹槍を作っていないのでなた鎌を腰に差して出かけた。

すると田中寺のあたりからだん／＼人の姿が見え始めたので、私も勢いづいて、山合いの谷間の道をたどり現場に行つ

た。

現場に着いてみると竹槍を持った人が群がっていた。機体は散乱しアメリカ兵の一人は焼死していた。竹槍で突く人もいたが、敵とはいえ死んだ人に対しては、残酷に思えた。

山の傾斜面には落下傘が樹木に引っかかり、米兵が引きずり降ろされ、両手を上げている姿も見えた。

別の個所に落ちた落下傘の所へは、行かなかったがそこにもたくさんの人が群がっていた。

しばらくして、米兵は日本軍に連れ去られたが、比較的冷静によそおっており、観念しているように見えた。

我々が想像している大和魂とか、軍人精神とかいう激しいものは見られなかった。

落着いて周りを見廻すと、散乱した計器機具、飛行機の破片が、ガソリン揮発油の異様な臭気の中に、無雑さに散らばっていた。

この米機はB24で、広島江波の高射砲基地から砲撃した中の一発が命中撃墜したのだという。

それにしても、空襲警報も発令されていないのに、悠々と敵機が侵入する事態が、聊か不安を覚えたものであった。

疎 開

東京を始め日本の主要都市が空襲を受け、被害が甚大になるにつれて、政府は被害を最少限度におさえるため、建物疎開をするともに昭和十九年一月、大都市住民に対し、疎開命令を出した。

特に日本の次代を荷う小学生（当時の国民学校児童）に対しては、半強制的に疎開させることとした。

そこで広島市及び呉市、福山市の国民学校では、先ず縁故疎開を勧奨し、それができない児童（初等三年以上）は、昭和二十年四月から農村の寺院や集会所に集団疎開させることにした。

当時己斐国民学校に奉職していた筆者（石田）は疎開児童を引率して世羅郡大見村に集団疎開した。

又隣村の沼田町（当時は伴村）には広島市の児童がたくさん集団疎開していた。

しかし石内村は広島市に隣接して危険なので、集団疎開の受入れはしなかったが、縁故疎開で石内へ疎開し、石内国民学校へ転校して来た児童は相当数にのぼった。

次の表に示すように、戦前は二二〇人余であった児童数が、縁故疎開で次第に殖え始め終戦後は二九三人に増加している。

石内小学校の児童数

(尋常科)	
明治33	211人
大正 4	246
14	249
昭和 5	207
10	202
15	215
16	225
17	233
18	245
19	↓ 269
20	◎ 293
21	280
22	255
24	267
27	282
現63	177
昭和22年までは高等科があったが省略す	

一般人の疎開については「戦争が長期にわたり疎開も、短日月で完了する見込みはないので、本事業の重要性に鑑み、疎開者の受入体制を整備し、疎開者の心情に衷心から同情し、親切に接遇するよう」当局から町村に対して、通牒が達していた。

空襲が激しくなると、都会では老人や子供や妊婦は、危険であり又足手まといになるので、出来得る限り安全な農村へ、疎開をするよう勧奨したのである。

石内村に於ても、親戚や縁故、知人を頼って疎開される人も次第に多くなり、納屋や離れ座敷のある家は勿論、物置や倉庫を改造して、住居としたり、家族の少ない家は間じ切りして、疎開者を受入れた。広い家では二世帯も三世帯も受け入れた家もあった。又疎開される人の中には他人の家を借るのではなく、一家を挙げて疎開し、新しく家を建築される人もあった。

石内への疎開者は、広島市に原爆が投下されて焼野が原に

なつてから急増し、被爆前の人口千四百人余りであったのが、昭和二十二年には二千二百人余りになり、約六〇%も激増している統計が如実に物語っている。

石内地区の人口	
寛文4年 (1664)	2,113人
明治22	2,281
大正9	1,785
" 14	1,654
昭和5	1,582
" 10	1,561
" 15	○1,490
" 18	↓ 不明
" 22	◎2,210
" 25	1,986
" 30	1,924
" 35	1,836
" 40	1,748
" 45	1,845
" 50	2,457
(五月が丘を含む)	
" 55	8,753
(五月が丘を含む)	
" 62	2,237
(五月が丘を除く)	

このように一般人の疎開もさることながら、石内地区が農村で安全なこととで、親戚、知人から依頼を受け、やむを得ず祖先伝来の重要な物資を預った家も多かった。

即ち家財道具のタンス、長持、食器、絵画、軸物、骨董品、衣類等が毎日のように続々と大八車で運ばれ、中にはタンスを十幾つも預った家もあった。

軍需物資の疎開については、昭和二十年三月、広島県より各関係町村長、各国民学校長、各寺院住職宛に「戦局はいよいよ緊急化し、醜敵の我都市頻襲に伴ひ、重要戦争資材の疎開を始め、学童の集団疎開、避難者並びに要救護者の收容等已むを得ざる事態が起った場合は、出来るだけ之等の事態に、即応し得る如く準備を完了し、戦争協力に遺憾なきを期せられ度し」との通牒が発せられていた。

この通牒により、石内村に於ても、軍需物資が国民学校を始め、各部落の集会所に疎開されていた。

即ち石内国民学校の講堂には、かんばん等の加工食糧品や、木綿の巻物を始め多数の被服品が疎開されていた。また組合の倉庫には内容はよく解らないが、多量の物資が箱で積まれていたし、各部落の集会所にも、それ／＼軍需物資が疎開されていた。

内容は、製図用の用紙・罫紙等の紙類、消毒用の綿、薬品、水筒、テント等であったが、元来秘密にされていたもので、終戦後になって判明したものが多かった。

また山田の峠には、ガソリン（ドラム罐入り）が多量に隠匿してあったのを、敗戦後発見し、各自が勝手に持ち帰った者が多かった。

皇后陛下の御歌（学童疎開に賜った御歌）

次の世を荷うべき身ぞたくましく
雄々しく伸びよ さとに移りて

戦時中の村の主なできごと

当時石内村書記 大西 勇

昭和十七年

一月二十五日 向山村有林の大火 延焼面積十町歩、消火に協力した人は東部は安村、伴村、西部は河内村、八幡村約一五〇〇人。神原で炊き出し米四斗。山師は福山市伯備木材(旧水内村出身)

一月三十一日 平野三雄氏の村葬 浄土寺で午後二時より執行

四月十八日 午後三時二十五分警戒警報発令 午後三時五十分空襲警報発令(大東亜戦争初めての警報)

東京、横浜、名古屋、神戸に襲来し四国方面へ逃走 午後六時四十分解除

五月五日 午後一時警戒警報発令 午後一時四十分解除

五月二十九日 加古川勇氏の英霊が帰還 村長は村境(八幡)に出迎え

六月二日 午前十時より加古川勇氏の村葬が小学校々庭で執行

県知事代理外多数参列 盛大に執行

六月六日 勤労奉仕に広島氷小売商業組合より麦刈作業約二

〇〇名

七月三日 午後六時三十分警戒警報発令

八月二十八日 昨夜の台風で廿日市から庚午新開までの堤防決潰

一戸当り一人の勤労奉仕に出動

九月七日 台風で被害の大野町国道復旧のため石内から二五

〇名出動

九月二十五日 松茸出荷協議会で松茸出荷は証明書を持参して、指定市場に出荷することに決定

十一月六日 広島高等師範学校附属中学校生徒一五〇名 勤労奉仕に来村

十一月九日 広島市商生徒一五〇名 稲刈作業に来村各家へ配属

十一月十日 中村英之氏の英霊帰還 村民多数八幡村境まで出迎え

十一月十二日 中村英之氏の村葬を小学校々庭で執行

十一月二十三日 新嘗祭で新穀感謝の行事で農家一戸に対し清酒一升、スルメ二枚キャラメル(子供)一箱特配

十二月八日 己斐峠道路開設工事の起工式地鎮祭 請負者中西登氏

当月迄の寄付額一六、二五五円

十二月十三日 午前二時警戒警報発令

十二月十四日 午前八時同前解除

十二月二十一日 石内村に国債債券割当三、九〇〇円 各部
落に配分（村民税を基準）

昭和十八年

一月六日 昭和十七年産米 供出七、〇〇〇俵（一俵四斗）

未曾有の数字

一月八日 石内村民で米穀を不法販売し、石内村駐在巡查摘

発 廿日市署に出頭

一月九日 石内村の供出米六、八〇〇俵に最終決定（平均一

戸二〇俵）

浄土寺の梵鐘供出に決定

一月十一日 金属回収 輪灯、火鉢、うすばた等二、〇〇〇

貫

一月十四日 午後二時 浄土寺、金剛院の梵鐘、小学校の二

宮金次郎の銅像供出、門徒、児童等多数見送る。

二月十日 牛肉の配給

三月十日 供出米の未完了の町村長廿日市警察署に出頭を命
ぜられる

村長断固励行完了を宣言

三月十一日 午前九時 石内供米協議会開催 廿日市警察署

長、地方事務所長、経済課長等多数の係官来村、激論の

結果三月十五日までに完了することに決定 石内の割当

二、七三〇石

三月十六日 廿日市警察署、地方事務所の係官、石内村駐在

巡查が未提出部落の実体調査、警察が介入したので仕方

なく供出完了

三月三十日 昭和十八年度の甘藷、馬鈴薯の割当量が決定

四月五日 未明警戒警報発令

四月九日 午後四時十二分 同前解除

四月二十日 本年度徴兵検査が五日市小学校で施行（明日と

二日間）

五月十二日 午前十時 警戒警報発令

五月十三日 午後四時十五分解除

五月二十五日 己斐峠道路開設寄付金三四、〇〇〇円余とな

る

六月十二日 酒卸商業組合より勤労奉仕に来村（麦刈）

七月十七日 石内が無医村のため水内村出身林諭喜夫医師が

開業

九月一日 警戒警報発令

九月三日 同前解除

九月八日 防空訓練の総合訓練が午前六時三十分より小学校

々庭で開催、警防団、婦人会、防衛隊等三八〇名出動、折からの雨の中を実施

九月十日 石内村草刈動員 午前六時より開始 乾草大增産

鳥取市の大地震

九月十七日 鳥取市へ震災救助金並衣料の募集の協議会開催

九月二十日 台風襲来 太田川流域大被害 放送局被害でラ

ジオ一時停止（緑井村、川内、原村方面被害甚大）

九月三十日 今夕より十月二日まで防空訓練実施 午後八時

十分警戒警報発令

十月四日 先月の台風で被害を受けた水内村へ、復旧作業に

石内村より出動（警防団員）

十月八日 折角開院した林医師応召 又無医村となる

十月二十七日 昭和七年徴兵の第二国民兵役（丙種合格）者

に初めて召集礼状が来る 国民皆兵となる

十一月十三日 広島県警察官講習所の講習生が薪供出の勤勞

奉仕に来村

十二月十四日 土地改良事業（暗渠排水）に市商生徒勤勞奉

仕に来村

十二月十六日 本年度産米 供出割当二、九二三石の通告あ

り

昭和十九年

二月七日 土地改良事業に実践女学校生徒来村奉仕

二月十日 昭和十八年産米供出割当、被害のため三二四石減

となる

二月十八日 土地改良事業に実践女学校生徒来校奉仕

三月九日 広島市牛田新町隣組より農村へ感謝状届く（石内

村へ）

四月二十一日 石内婦人会は産業戦士慰問のため、各戸より

糯米三合を集め、餅をつき広島軍需工場へ慰問

四月二十七日 石内村警防団保有の消防動力ポンプが応召

（広島市大芝自動学校へ出す）

五月十七日 昭和十九年度徴兵検査が五日市小学校で施行

本年度は満二十才と十九才と同時に実施

五月十八日 徴兵検査に於て本年より甲種・一乙・二乙・三

乙は現役徴集となる

五月二十一日 国民総決起大会が午後一時より開催

五月二十七日 廿日市小運送業者馬車が、神原地域の滞貨一

掃に動員 毎日一四、五台の馬車で滞貨一掃した

六月十七日 警戒警報発令

六月十八日 全前解除

七月八日 午前〇時空襲警報発令 北九州市方面来襲

七月十九日 己斐峠林道の見取検査

八月四日 午後七時二十分 西部軍管より警戒警報発令

八月五日 午後一時 同前解除

八月十日 午後十一時四十五分警戒警報発令

八月十一日 午前三時十二分 同前解除 北九州空襲

八月十四日 真言宗金剛院が全焼 警防団出動し後片付

(お大師)

八月二十日 午後四時三十分 警戒警報発令 次いで空襲警

報発令 九州及び西中国へ敵機八〇機来襲 被害ありと

八月二十四日 薪生産並びに米穀供出村民大会が午後二時よ

り小学校で開催 佐伯地方事務所の係官外出席 議論の

結果八月末までに薪約九万束供出することに決定、石内

に在住し諸配給を受けている者を対象とし、部落毎に共

同作業で供出すること

九月八日 四和村から吉和村へ通ずる県道改良のため石内村

から、警防団員三十名が二十日間勤労奉仕に出動し、吉

和村の寺院へ宿泊(航空機用材木搬出のため県道の緊急

工事)

十月十日 先日来、多数の村民に対し、勤労働員及女子勤労

挺身隊へ出動するよう令状が来たる

十月十七日 氏神祭用として半坂で、牛一頭を屠殺し村内へ

配給

十月三十一日 実践女学校生徒が勤労奉仕に来村

十一月六日 警戒警報が発令(午後九時) 北九州並びに呉

市にB 29来襲 偵察

十一月十一日 空襲警報発令 西北九州方面B 29空襲

十一月十七日 警戒警報発令 B 29一機飛来

十一月二十一日 午前九時 警戒警報発令 同九時三十分空

襲警報発令 B 29七〇〇八〇機西北九州へ空襲 四機広

島湾へも侵入

十二月八日 空襲警報発令 B 29広島に侵入 高射砲で砲撃

十二月九日 松根の割当来る四六、七〇〇貫

十二月十六日 久保田義之氏の英霊が帰還 村民多数八幡村

境へ出迎え

十二月十七日 久保田義之氏の村葬が午後二時 小学校々庭

で執行

十二月二十三日 沖野敏氏の英霊が帰還

十二月二十五日 沖野敏氏の村葬が午後二時より小学校々庭

で執行

十二月三十日 正月用として牛一頭を屠殺し各戸へ配給(百

匁ずつ)

昭和二十年

一月七日 村役場、農業会、小学校共同で神原郷路山で炭焼きをする（木炭が不自由なので）生徒も原木を運ぶ等勤

労奉仕

一月九日 午後警戒警報発令

一月二十一日 旱害により供出米四二石減免となる

一月三十一日 広島被服支廠の物資を分散するため、観音村

佐方に坑道を建設することになり、佐伯東部十一町村が

勤労奉仕することに決定

二月六日 午前四時 警戒警報発令

二月七日～八月 警戒警報発令 B 29 広島に侵入

三月十一日 岡島久詞氏の英霊が帰還 村境まで村民多数出

迎え

三月十二日 岡島久詞氏の村葬が小学校々庭で、午後二時よ

り執行

三月十四日 松根油工場が平岩へ造ることになり柱立て

三月十五日 午前〇時 警戒警報発令 連日B 29の来襲あり

三月十七日 物資の疎開で学校の講堂等を軍の経理部の軍用

倉庫に使用することになる

三月十九日 午前七時警戒警報発令 同七時三十分空襲警報

発令 艦載機約一〇〇機広島へ侵入、高射砲の物凄い砲撃あり。大野町付近で空中戦あり。前後三回波状攻撃あった由。

三月二十二日 広島市は激しい空襲に備えて、疎開を強制的に実行することになった。

三月二十六日 疎開物資が毎日、長蛇の如く続く。本土決戦へ備えてか石内へも人間や物資の疎開が多くなる。

三月二十七日 空襲警報発令 北九州方面空襲 沖縄決戦が始まる。

三月二十八日 朝B 29が飛行機雲を作って来襲

四月一日 五日市町楽々園に駐屯していた暁部隊が、村内各部落の集会所を軍用倉庫に指定したいと調査に来村。使用することに決定する。

四月二日 本日も警戒警報が二回発令

以上で大西氏の日誌は、用紙不足のため中止になっている。これから後戦局は急激に險しく、空襲も多くなり、軍部を中心に国民を戦争遂行にかりたてゝ行ったのであるが、その状況を役場職員として終戦の日まで、書き留めて置いて頂きたかったが止むを得ない。

しかしよくも克明に当時の状況を記録して、貴重な資料を残して頂いたことに対し、敬意と感謝の念を捧げるものである。

週報にみる戦時論調

戦時中、国政や戦局の概要を国民に知らせ、戦争遂行に協力させるため、内閣情報局が毎週「週報」という冊子を発行していた。

この週報の表紙の裏に現在の新聞紙でいえば、論説に当る文章が載せてある。今日の社会情勢からみると隔世の感があるが参考に掲げて当時をしのんでみよう。

昭和十八年七月七日発行

(第三五一号)

決戦下、学徒の教室もまた戦場であり、それは直ちに前線に通じている。今や青年学徒の烈々たる殉忠報国の赤誠は報いられ、ここに学徒動員体制は確立され、勤労体制は一段と強化された。

戦局の現段階は、青年学徒は勿論、一億国民の勤労への総決起を促して止まない。

男も女も、老いも若きも、ただ一筋に戦力増強の生産陣に挺身し、勤労を挙げて国家に捧げねばならない。

昭和十八年十二月一日発行

(第三七二号)

赤紙と白紙と、色は異なれど醜の御楯となる身は一つ、いま銃後に徴用の総進軍命令下る。

ブーゲンビルからギルバートへ、あの熾烈な敵の反攻、あの前線の必殺の敢闘に思いを馳せる時、赤心は一つ前線も銃後も、ただ撃敵の斗魂に燃ゆるのみ。

も早や前線、銃後の区別はない。否むしろ銃後の工場が戦場であり、前線とさえなつた。応徴士諸君こそ、この銃後の前線に配置された兵隊である。今こそ諸君の力が、そして腕が直接お国の為に、そして戦力増強の為に捧げられる日が来たのだ。

新しいこの勤労の喜び、ここに応徴士の輝しい首途がある。前線兵士の信倚、我等が双肩に大東亜十億の衆望また、我等の双肩にあり。

征け新しい戦場へ、而して銃後の生産に前線の必勝魂を發揮せよ。

昭和十九年七月十九日発行

(第四〇三 第四〇四) 合併号

敵は本土に迫り来たった。敵を前にしてお互いがあれば誰の責任だ、これは誰の責任だと言っているは何にもならぬ。皆が責任を持つことだ。皆で力を合せて、迫り来る敵をやっつけるあるのみだ。

日本人は一つの家族だ。一億悉く血縁につながれている。困難な事態になると、家族的つながりは大きな力を発揮する。楽な時には心の離れていた者も、苦しい時には心を協せ力を出し合って難局を乗り切る。これは血縁の偉力である。

今や「我々一億は悉く血を分けた兄弟である。」との自覚を喚び起し、困難が加れば加わる程一層親しみ睦び、助け合い、鉄石の団結をなして敵にぶっつき、これを打ち砕くの覚悟を固めねばならぬ。

(注 この年七月十八日東條内閣総辞職し小磯内閣成立)

昭和十九年九月六日発行

(第四一七号)

今や、神機を捉えて敵に一大打撃を喰わす時は近づきつつある。敵はいやでも応でも、こちらに迫って来るのだから、機会は必ず到来する。問題はこちらの戦力である。

これが小さくては好機到来しても何にもならぬ。大きな力で敵の足腰の立たぬくらい、ひどくやつつけねばならぬ。人力、物力を大至急に結集し、夜に日をついで生産増強に励んでいるのはこれが為である。しかして今や、準備は着々と進みつつあるが、まだ／＼我々の努力は十分ではない。ここが一番大切な時だ。戦争は他人事ではない。大きな戦力をつくり出すために、我々一人一人が必ず全力を出すならば、一億の力は集って東亜の大資源を速かに戦力化することは難事ではない。

昭和十九年十月十八日発行

(第四一七号)

一の矢は放たれた。満を持していた皇軍は沖縄、台湾を襲った敵の機動部隊に対して痛撃を加えた。

敵は大きな計画のもとに、執拗にやって来るに違いない。二の矢、三の矢を相次いで放ち、敵の兜を貫き胸板を射抜かねばならぬ。矢の用意をする者は誰か。銃後一億である。矢頃は近い。射手は精鋭である。さあ、みなで強い矢をうんと作って、射手に手渡そう。敵に息をつかせぬうちに、二の矢、三の矢を、放たば、敵の巨体は虚空をつかんでどうと倒れることは必定である。

待ちに待った決戦は近づいた。鉢巻きを締め直そう。

昭和二十年一月十日発行

(第四二八号)

敵機の来襲に際し、夜の寒空に壕に入っていると、これが戦争だということがしみじみ分かる。前線兵士の苦勞がしのばれる。

敵空襲に際し、壕に入っている我々はまた敵と対峙し、敵攻撃の機を狙っているのである。軍人に非ざる我々は、敵機を直接攻撃することは出来ぬ。しかし落下する爆弾はこれ敵である。

我々はこれと戦いこれを攻撃し以てその効果を少からしめ、或いは無にせねばならぬ。これ我々の敵に対する攻撃である。

壕の中に在って前線兵士のことを思え。しからばおよそ働きて得る者は悉く防空の尖兵となり、妙機を捉えて敵を攻撃し、敵の爆撃をして屑鉄運搬作業たらしむるを得るであろう。

被爆時の状況

原爆投下

広島市は古くから軍都といわれ、日清戦争の時は大本營の置かれた所で、第五師団司令部、兵器廠、被服廠さらに出征兵士を輸送する宇品港等の軍事施設も多く、当時は中国地方総監府（総監大塚維精氏）が設置され、続いて本土決戦に備えて、第二総軍司令部が新設され、その司令官には前陸軍大臣畑俊六大将が任命され既に四月着任していた。軍都広島はドタン場に於いても、日本有数の軍事基地の役割を担わされたのである。

このように軍事上、重要な都市でありながら、これまでわずかな空襲があっただけで、東京を始め我が国の主要都市が甚大な被害を受けており県下に於ても、呉市や福山市があれ程大きな被害があったのに、何故広島市が今日まで本格的な空襲を受けないのだろうか、一抹の不安を抱いていた人も

多かった。

いやこのまゝ放っておくわけがない。今に激しい空襲があるかも知れない等との噂も流れていた。

ところが遂に、運命の日がやって来た。

昭和二十年八月六日 午前八時十五分―

この日は、朝から雲一つないよく晴れた日で、太陽がジリジリと肌に焦げつくように照りつけていた。

学徒は学校へ、徴用者は軍需工場へ、公務員は役所へと、それ／＼の職場へ急ぐ者、或は職場に着いて仕事に取りかゝろうとする人等いろ／＼あったが、何れも必勝を期して、与えられた仕事に精出そうとする時間帯である。

これより先刻、広島市一帯に空襲警報が発令され、上空をB 29がゆっくりと旋回し、しばらくして東の方に飛び去った。そこで警報が解除されたので、各自は一応安堵して、それ／＼職場や家庭に復帰し、仕事に取りかゝろうとした、午前八時十五分「ピカッ」と青白い閃光が目前を走った。おやつと思った瞬間、空一面が明るくなった。

しばらくすると「ドーン」と天地を震わす大爆音と、震動が起こりなま暖いような激しい風圧が体を吹き飛ばした。

こうした閃光と、爆発音衝撃音、爆風の後、広島の上空に異様な雲が、かたまりのようにむく／＼と盛り上がる。雲の中央部から外側へと次第に広がり、やがてきのこ状の雲とな

った。

色は始めは赤紫色であったが、次第に石竹色になり、きのこ雲はさらに広がり大きくなり、色も白色に変化して行った。人類が始まって以来、世界で最初の原子爆弾が広島に投下されたのだ。この一発の爆弾で、広島は一瞬にして廃虚と化し、十数万人の貴い人命を奪った。

火の手が方々からあがり、炎は天を焦がし、数日間も燃え続け、この世の地獄絵を現出し、見渡す限りの焼け野が原と化した。人々は今後七十年は人間は勿論、生物は生存できないといわれた。

さて原爆の投下地点の相生橋付近から、僅か六―七軒の直線距離にある石内地区の当日の状況は如何だったろうか。

農家の朝は早い。みんな朝食をすませ、家の中で家事に専念していた人、松根掘りに山に行っていた人、田んぼに出て草取りしていた人、畑で野菜の手入れをしていた人、丁度当日は麦の供出日だったので組合に行っていた人、また麦を大八車で運んでいた人、国民学校は夏休みもないので、朝会をすませ第一時間目の授業に入っていた。

このように、各人各自それ／＼の仕事に取りかゝって間もない時間なので、それ／＼異なった所で、原爆投下の瞬間を捉えている。

しかし、石内地区の東側広島市に接する所は、三―四百米

の山々が連なっているので、閃光も爆風も直撃することなく被害の状況も、間接的な突風、衝撃によるものが主で、家の向きや様式或は位置によって、多少の差はあるが、家の倒壊はなく、天井がはね上がり、壁が落ち、襖、障子が飛散し、硝子が粉々に散乱した。

手記

下沖 増田 房江

八月六日、何時ものように朝食をすませ、節子は自転車通勤に、長女は国民学校へ行く。私は鎌をとぎめご（籠）を背負って、長男の手を引いて、四、五軒先の中山さん宅の前で、「よい子をして遊ぶんだよ」との声を残して、県道を横切り田んぼに向かう。

畦道を一、二歩歩いたその瞬間、ピカッと目がくらんだ。アッどうしたんだろうと、辺りを見廻わすと、田んぼにいた人々も皆立上って、きょろ／＼回りを見ておられる。

間もなく地から吠えるような、ドーンという大きな音がする。空を見上げるとはるか上空を、飛行機雲を作りながらB29が、ケシ粒のように小さく消えて行く。

山の向うの広島方面から、モク／＼と黒い煙があがる。「こ

りゃあ、新兵器だぞう」と話している中に、新宅、岡本、中山さんの宅から「大事じゃあー天井が飛んだ。障子がこなごになかった」と大声がする。

私も大急ぎで長男の手を引いて家に帰る。次男を背負った姉が「まあいびせいことじゃ、家の中に入られんでえ」という。

天井は吹き飛んで、障子の骨はバラ／＼となり、辺り一面すすだらけで、足の踏み場もない。

おばあさんとは家の中をたずねると、座敷の隅にすゝを被って、うつ伏せになっておられた。

壊れた障子や天井、ふすま等を片付けるのがそれこそ大変であった。

原田 常本シズエ

丁度、その朝は麦の供出日であった。私は平岩の組合倉庫前へ麦俵を積んで、検査を待っていた。

その時一瞬するどい閃光と共に、耳を裂くような大音響に、皆んな一斉に山積の麦俵の間に身を伏せた。間近い所に爆弾が落ちたのだと思った。

同時に大爆風とともに、大原酒店の二階のガラス窓が落下し、浄土寺の屋根が吹き飛ぶかと思われる程ゆれ動いた。

一時は皆んな放心したようになっていたが、気をとりなおしてそれぞれ、麦の検査はそちのけで何れへか散って行った。私も気がつくこと子供のが気にかゝるので、大急ぎで学校へ走った。校庭に立って見ると、窓ガラスは一枚もない。子供も居ない。一人の先生が子供は、裏山に避難していると言われたので、大急ぎで裏山へ行ってみると、子供は血みどろになって泣き叫んでいる。

生きながらのこの世の地獄だと思う。二年と四年の我が子の手を引いて、無事を喜んで家路を急ぐ。

雨が降り出した。シャツが黒くなるのでどうしたのかと思う。家に帰ってみると大変。家には入れない。壁が落ちて畳と建具と、天井がごしゃ／＼になり爆風の恐しさを物語っている。

近所の人はと外に出てみると、皆んな放心したように集っている。

その頃から原田の三叉路あたりから、被爆者が己斐峠を越えて、裸同然の姿で避難して来られる姿が見え出した。

上沖 森京 昌江

昭和二十年八月六日、その日は私たち石内地区民は、広島市内の建物疎開作業に出動する予定であったが、何かの都合

で延期となり、私は田んぼに出て、三番草の草取りに精出していました。

その日は朝から雲一つないからりと晴れ渡ったよい天気でした。突然、眼もくらむ一瞬の閃光が走り、アッと思う間もなく気がついてみると、私は近くの水路に頭を突込んでいました。

頭をあげた途端、ドカンという大地を震わす大爆音とともに、強い熱風にさらされました。

東の方広島の上空には、もく／＼と不気味なキノコ雲が、盛り上がって、次第／＼に大きくなって行きます。

しばらく眺めていますと、空は薄暗くなり、爆風に乗って、木片、そぎ板、書類らしき紙片、新聞紙等が多量に、上空を舞い飛んで来るのを、ただ呆然と眺めていると「森京さん、早く帰らないと家の中は大変ですよ、戸も障子も唐紙も、きり／＼舞いして倒れ、天井板もはね上っていますよ」の声にびっくりして、大急ぎで家に帰りました。

途中急に暗くなり、大粒の黒い雨が降り出したので、父母と三人ぬれねずみになって帰りました。

家に帰ってみると、近所の人の言われた通りの状態で、その後片付けに大変でした。

原田 今沢 忠夫

食糧増産で甘藷作りのため、東向こうの山畑に下肥をかついで行きようやく諸に肥料をかけ終えて、帰ろうと思った時、飛行機の爆音が急に大きくなったので、おかしいな空襲警報は出ておらないのに、どうしたのだろうと思っていたら、太陽がさしているのにも凄い青光りがした。(マグネシウムをたくような)

東の空に向かっていたので、その光りをまともに受けたので、私はそれから三日位咽喉が痛かった。

また石内の人で、この光を正面から受け、鼻の頭の皮がはげたり、軽く火傷をした人もあった。

ピカッと光ってからドーンという爆音がしたかと思うと、現在のテレビ塔の北側に火柱が上がり、それが高くなるにつれて色も変り、黒雲になって行った。

それから三、四十分経った頃から、空からビラを飛行機から撒くようにひら／＼と無数の物が落ちて来た。

急いで家に帰ってみると、建具は殆んど倒れ屋根の一部は落ち、その上黒い雨が降るのでたゞおろ／＼していた。

下沖 久保田 恵美子

原爆投下の朝、私は家の中の掃除をすませ、家の前の広庭を竹箒ではいていた。

すると一瞬、ピカリと光るものを感じた。何事だろうとあたりを見廻すと、東の空あたりからむく／＼と、きのこ雲が湧き上ってゆくのが見えた。

間もなく大爆音が轟き、天地を震わせた。私はとっさに納戸に寝ていた嬰の耳をふさぎに家の中に駆け込んだ。

松根を採りに山に行っていた父が、異変に驚き急いで帰って来た。山でも爆風に樹木が靡き倒れたり、爆発音と共に空から多くの紙片が飛んで来たということである。

私は国民学校に行っている子供が心配になったので、自転車に乗って迎えに行った。

学校に着いてみると、ガラス窓は吹っ飛び子供の多くがガラスの破片だけがをしていた。窓辺に近い者程けががひどかったようだ。私の子供も顔や足に負傷していた。

私の家は、戸や障子を開け放していたが、天井の隅がはね上り、閉ざしていた玄関の厚いガラス戸が粉ごなに壊れ散乱した。また庭の松の木が大きく傾いた。

上中 宮下 アキエ

八月六日、朝七時半頃、上中部落の共同作業の松脂集めに廻るため上中組の倉本剛氏宅の左手の山林に行く予定でした。

全員の集合するのを待って、作業に取りかゝろうとした時でした。広島の方から米軍の戦闘機が三機、爆音をたてゝ頭の上に来て来ました。

「それ退避」の声と共に皆んな家の木陰に小さくなって、身体をすくめていました。一息つくともまた先程の戦闘機が旋回して、頭上を通り去りました。

「もう大丈夫でしょう」と、山道を五十米くらい登った時でした。目の前でピカッと強烈な光線が顔面に当たりました。あつと思つたら今度はパッと大きな音と、強い風が一度に体当たりして、かぶっていた帽子が飛びました。

その途端私はびっくりして、思わず大地に伏せていました。何所か近くに爆弾が落ちたのだらう。私は助かったのだと震える心で喜びました。

それからふと広島の上を見ると、夕焼色の大きなこの雲がふわふわと浮き上がって来ました。

国民学校の子供が、がや／＼騒いで裏山に避難して行くの

が見える。もう作業どころではない。みんなそれ／＼家が心配なので、ちりぢりに帰って行つた。

家に帰ってみると、表の障子は吹き飛び、中の子はメチャ／＼になり、天井は吹き上げられ、台所の格子棚の月要の板は吹き外れ、ガラス窓はメチャ／＼になり破片が散乱していました。

湯戸 本田 文子

あの朝長女は山陽女学校に、次女と長男は石内国民学校に行き、生後七か月の三女を家の中に寝かせて、私は家の前の田の草取りに出ました。

間もなく東の空を見ると、鈴が峯の上空を飛行機がこちらに向かってやって来ます。あゝまた空襲だと思つて家の近くで、草を取ろうと思つて小屋の近くに来た時、ピカッと光り、間もなく大きな音がしました。

あゝ爆弾が落ちたのだと思い、すぐ近くの小屋の中へ入りました。入つたと思つた途端、ざあーと物すごい爆風が来しました。アッ大変だと思わずそこにうつ伏せしました。

しばらくして頭を上げてみれば、広島の上空には入道雲のような雲が、下から／＼湧き上がってきたのこのようになり、遂には黒い雲が高く盛り上がりました。

子供を寝かせているのが心配になって、子供の寝かせていた部屋に急いで行ってみれば、子供は上敷の下になっていました。子供の寝ていた部屋は開放していたのですが、閉めていた所は全部壊れて、ガラスが散乱し足の踏み場もない状態でした。

(当時国民学校一年生) 半坂 上土井 博司

昭和二十年八月六日、私は小学校(国民学校)一年生、天気は晴、朝礼をすませて一時間の授業、しかし私たちは体重測定していた。体重測定をすませて、教室に帰って各自服を着ていた時、誰かが「アッお日さんが傘をかぶっている」と叫んだので、みんな窓際の方へ寄って行った。

その時、突然ドーンと大きな音がした。そして強い爆風の衝撃を受けた。思わずみんなは教室にひっくり返った。

気がついてあたりをみると、大半の友だちがガラスの破片で傷を受け血を流していた。窓ガラスが全部吹っ飛び、天井が垂れ下がり、教室の中はごったがえしていた。

みんな先生と共に学校の裏山へ、大急ぎで避難して、上級生に連れられて山伝いに帰路についた。

途中北東の方から雨が降ってきた。黒い雨であった。

(当時国民学校四年生) 湯戸 沖村 貞夫

昭和二十年八月六日、原爆が広島に投下された時、私は石内国民学校の四年生だった。

丁度その時は音楽の時間で、M先生に授業を受けていたが、一瞬広島方面から強烈な熱く、明るい光をピカッと受けたので、みんなびっくりして騒ぎ出した。

先生は「みんな静かにしなさい。何が起ったのかよく見なさい」と言われたので、全員窓際に近づいて、広島の方を見ようとしたとたん「ドーン」という強い爆風をまともに受け、窓ガラスがこっばみじんに壊れ飛び散り、先生を始め殆んどの者が怪我をした。

血もぐれになり、先生の命令によりて全員裏山に逃げた。学校中で四年生が一番怪我をした生徒が多かった。

私も足首にガラスの破片がささり、血がたくさん出た。

(当時国民学校高等科二年生) 上沖 坂本 誠治

広島に原爆が投下された時、私は石内国民学校高等科二年生であった。朝八時の朝礼をすませ、警戒警報解除のサイレンが鳴ったので、先生の命令により作業を開始した。

私達高等科一・二年生は、麦の俵を車に積み二名が一组となって、組合まで（約六〇〇米）供出する作業である。

平岩（元横山医院の所）まで来た時、ピカッと瞬間の光線を感じた。東の山の方を見ると、虹に似た何ともいえない電光石火のような光線が、瞬間的に一面に襲って来たかと思うと、熱さを感じると同時に大音響とともに爆発音が起ったので、何もとどろきずその場に、耳と目を手でふさぎその場に伏せたものである。

しばらくして起きてあたりを見ると、爆風で砂塵が舞い一〇〇米向うは何も見えない。また私がかぶっていた戦斗帽は、畑の向こう一〇米くらい飛ばされていた。

避病院の方に爆弾が落ちたという声もあり、その中に小学校の事が心配になり、学校に帰ってみると、窓ガラスは全部こわれ、天井も全部ぶら下がっていた。

丁度一年生は身体検査を行っており、裸かだったのでガラスの破片が身体中に、さうり大騒動であった。

高等科の生徒は、怪我人を一人ずつ背中に負って、約七〇〇米離れた土本医院まで連れて行った。ひどい子供は二十針も縫った者もあった。

生徒を背負って行く途中、広島のをみると、きのこ雲がぐんぐんと広がって行き、雲の間から太陽が真赤な朱色の稲光りのように見え、急に晴天から様相が変わり、まるで地獄の

ようになって来た。

それから三十分くらい経ってから黒い雨が降って来た。白いシャツも油まじりの黒い雨で真黒になり、また空からは紙片、広告、看板等がたくさん落下する中を、怪我の子供を土本病院へ運んだ。

黒い雨

広島に原子爆弾が投下されてから、間もなく黒い雨がはげしく石内全域に降りだした。

石内地区も東西五軒、南北四・八軒と相当広いので、住んでいる場所により、降りだした時刻や、降り続いた時間、雨量等に多少の違いがあるようである。

降り始めたのは、午前九時頃とする者、九時半頃とする者、いや十時半頃だと言う者、いろ／＼あるが結論として、黒い雨は石内の北東部原田、半坂方面から午前九時頃から十時頃までに降り始めたものと思われる。

降り続いた時間も二、三十分と言う者、一時間位という者、長いのは三時間という者、様々であるが、石内全域として考えれば、午前九時頃から午後二時頃まで、夕立のように雨が移動して、降ったものと思われる。

雨量も始めは大粒の雨が夕立のように、ポツリ／＼降り始

めたが、次第に本格的の大雨となり、三〇耗、五〇耗いや一〇〇耗以上は降ったという人もいる。

正式に雨量計で測った者はなく、各自の勘なのであるが、何れにしても道路の水は側溝に溢れ、田んぼは雨水で一杯となり、石内川の水は増水して勢よく流れたので相当量降ったと思われる。

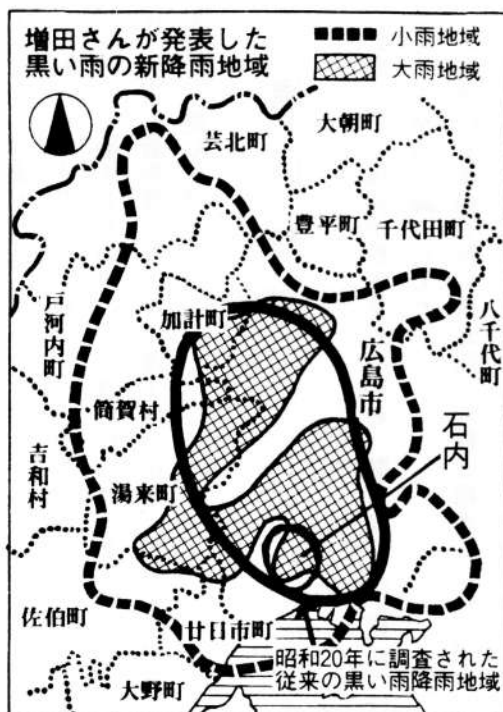
雨の色は真黒で廃油のようで、気持悪くシャツ等白い衣類は真黒になり、洗ってもなか／＼落ちなかった。バケツに溜った水も底が見えない程黒かった。

石内川の魚はみんな死に腹の上に、川面に浮いて流れていた。苗代田や池で飼っていた鯉は、全部死に雨にあった雀や猫も死んだ。

原爆投下の直後に降った黒い雨は、死の灰を含み人体に及ぼす影響も大きいので、原爆医療法健康診断の特定区域に指定されており、その後、度々再調査が行われている。

その結果、黒い雨の地域は意外に広く、定説の四倍にも達するという。

昭和六十三年三月九日の中国新聞によれば、元気象研究室長増田長信氏は度々の現地調査に基づいた調査により、降雨地域は昭和二十年調査の約四倍島根県界の近くまでに及ぶ広範囲で東西の巾は二十八軒、面積は広島市の約一・七倍の千二百五十平方軒に広がっているという。



このうちで、降雨時間一時間以上の大雨地域は、複雑に入り組んでいるが、最も激しく降ったのは、西区己斐地区から安佐南区沼田町へかけての地域で、一〇〇耗―一三〇耗の集中豪雨がいったということである。

このことから推察すれば、石内地区の殆んどがこの豪雨地域に含まれて、一〇〇耗以上の雨が降った所が、多かったのだと思われる。

そして特に己斐、沼田に近い半坂、原田部落の方面に、多くの雨が降り、そのため石内川が急に増水したのだと考えられる。

手記

原田 山崎 サトヨ

黒い雨が降りだしたのは、午前九時前後ではなかったかと思う。四十年も前のことだからはっきりと憶えていないが、始めのうちは大粒の雨が、ポツリポツリと降りだしたが、だん／＼大雨となり、午後も降ったと思う。

苗代田へ鯉を八百匹入れてあったが、全部死んだ。また黒い雨がかかった草を牛に食べさせたら下痢をした。川魚、雀、猫等も雨をかぶったものは皆んな死んだ。

昨日まで毎日産卵していた鶏も、さっぱり卵を産まなくなった。

原田 今沢 忠夫

黒い雨が降り始めたのは、午前九時三十分頃だったと思う。降りだしてから止むまで二十分か三十分、川に出た水の量が多かったので、百五十耗位短かい時間ではあったが降ったのではないか。

もちろん水田は雨水で満水になるので、全部のむなくたを

落しに行った。廃油のような雨なので水稻は駄目になるだろうと心配した。

濃度は薄口の醤油のようで、流水の水面は全部泡であった。

半坂 上土井 博司

当時石内国民学校の一年生であった私は、学校で被爆し上級生に連れられて、山道伝いに家に帰る途中、北東より雨が降って来た。

時間ははっきり覚えていないが、午前十時〜十一時頃ではなかったかと思う。雨に濡れた所は黒くしみになって残り、後に何度洗っても落ちなかった。夕立のような強い大粒の雨だったと思う。

その後石内川に行ってみたら、たくさん魚が死んで流れていた。それから後は石内川からハヤや鯉等の川魚は姿を消した。

原田 吉田 一美

原爆が投下された時、私は田んぼに出ていましたが、仕事ですんで家に帰る途中、黒い雨が降り出しました。シャツも着物も真黒になりました。後で何度洗濯しても落ちませんでした。

した。

その後昭和二十年十月十日、黒い雨にあった姉は遂に死亡しました。あの黒い雨のためか、原爆の放射線のためかと思っています。

当時では稀な大雨で、川の魚はみんな死んでしまいました。田んぼの水を止めに行った時、石内川をのぞいてみましたが、腹を返した魚がたくさん流れていました。

原田 中野 与四郎

原爆が爆発してから約三十分くらいして、黒い雨が降り始め、降雨時間は約四十分から一時間くらいで、家のススを溶いたような黒い色で、一時的な夕立に似た大雨であったが、道が川になる程の降雨量であった。

半坂 西尾 清人

私は学校で被爆し、上級生といっしょに帰る時黒い雨にあり、白いシャツが真黒になりました。家に帰ってみると裏の水路に入れたあった二十四位の鯉が全部死んでいました。

雨が降った時間は、午前十時頃から十一時位ではないかと思えます。

平岩 淋蒔 敏子

原爆が投下されて間もなく大粒の雨が降った。真黒の雨で一度にたくさん降った。石内川の水も相当増して勢よく流れた。魚が多く死んで白い腹を上にして流れていました。

空からの飛来物

石内地区の東側（広島市と接する所）は、釈迦が嶽を始め約三百米の山々が屏風のように連なっており、障壁となり盆地のような、地形を造っている。

そこで、原子爆弾の閃光も爆風の衝撃もこの山々にさえぎられて、直撃することなく、被害も少なかったのだと考えられる。

しかし原爆の強烈な爆風が、この山々に突き当たり、上昇気流となって、空高く舞い上がりこれらの山々を越えて、石内へ流れ込み、紙屑や、トタン板、ベニヤ板、そぎ板等が、この爆風に乗ってひら／＼と木の葉のように飛んで来たのである。

爆風は爆心直下から三軒一〇軒の間は、秒速六〇〇米八〇〇米でこれは爆風というより、衝撃波といって空気が弾

性体のようになり、二軒離れた所でも、大人を吹き飛ばす力があるということである。

だから三尺×六尺もある大きな重いベニヤ板や鉛板が、三、四百米の山を越えて、石内へ飛んで来たので、如何に爆風のエネルギーの大きいか分かる。広島市の中心部大手町方面の銀行の伝票や、電報局の電報用紙、軍関係の野紙、中には稀なことであるが、拾円紙幣や五円紙幣が飛んで来たのを拾った人もいた。

手記

原田 今沢 忠夫

爆発音がしてから、三十分か四十分経った頃、広島の中から丁度飛行機からビラを撒くように、紙屑など無数の物がひら／＼と、風に乗って飛んで来るのが見えだした。

大きいものは畳の上敷八畳分もあった。襖も障子も飛んで来た。郵便配達さんが路上で、百円紙幣の半分焼けたのを拾ったという。

半坂 田上 健吾

半坂部落の西側の山には、広島市内から飛んで来た看板やトタン等が幾つも／＼松の木に引っかかり、田の中に落ちていた。また半坂字横岩の田の中には、板切れ、紙屑、衣類等がたくさん落ちていた。

上中 杉田 達美

私の家では丁度紙切れが紙吹雪のように飛来し、中には商店の領収書やまたお金の札まで飛んで来たらしいです。

それから私の山には、三尺×六尺もある大きなベニヤ板や鉛板が二三枚飛来していました。

平岩 丑田 テイ

東の空は黒煙でもう／＼。その中を紙屑やボロ切れが数えきれない程たくさん飛んで来た。

秋になって百米以上も離れた山に、松茸を取りに行つてみると、松の木に焼けくさりのボロ切れが、たくさんひっかゝっていた。

湯戸 本田 トシエ

その秋、私は山に松茸狩りに行きましたら、燃えくさりの黒い布切れがたくさん落ちていた。その付近で私は拾円札を二枚拾いました。

神原 黙 雷

数十日経過して秋の取入れの準備のため、山林に行った時、使用人のK氏は、紙幣二枚（五円札と百円札）が落ちているのを拾得した。

上中 大下 アキ子

原爆投下後、爆風によって広島市方面から北西に向かって、たくさん紙片や封筒等の焼け焦げた物が飛んで来た。

被爆後の状況（救護活動）

被爆者が続々と石内へ

原爆が投下されてビカ、ドンの衝撃を受け、爆風による被害の処理に右往左往している中に、黒い雨が降り始め、広島空からは紙屑やトタンが飛んで来るので、みんな「何事が起ったのだろう、これはただごとでない」と話し合っていた。

その頃から（原爆投下後約一時間半くらい経って）己斐峠を越えて、石内へ／＼と被爆者が命から／＼、避難して来られた。始めは、三人五人と着物は焼けちぎれ、裸同然の姿で頭髪は焼けちぎれ男女の区別もつかない。中には体全体が火傷ではれ上がって、顔の皮がぐるりとむげ目だけが光っている人。

両手を前にぶらさげて放心したように、よろ／＼と歩いている人、やつのことで己斐峠を越えて、人家に立ち寄り「水、水」と水を求めている人、もう歩けないと力尽きて、道端で休んでいる人。

この世の地獄とはまさにこのことかと、思われる程の悲惨な状況である。

聞けば「広島は一面の火の海で、全滅である。大竹へ帰る

のであるが、己斐から古江高須方面は火災で、国道二号線は不通である。そこで安全な石内へ逃げて来た」という。

そのため石内へ避難して来られた人は、遠廻りだが、建物疎開に行っておられた大野、大竹方面の人が多く、それに帰る道中になる湯来（砂谷、水内）方面の人が多かった。

罹災しても割合元気な人は、何とか予定地へ帰って行かれたが、重傷で歩けない人や、避難先のない人は、平岩の浄土寺（予め避難場所に指定）に到着された。また原田の金剛院（お大師）や村役場の議事堂へも大分避難されていた。

その日（八月六日）の午後から夜にかけて、己斐峠は石内から被爆した家族を探しに広島へ行く人。親戚知人の安否を尋ねに行く人。

それに炎の広島から石内へ田舎へと避難される人々で、ごったがえした。

命からがら己斐峠を越え石内へ来られた方は、県道原田五日線で八幡へ出て、そこから五日市か湯来方面へと避難されるのであるが、その道々、道路沿いの農家に立ち寄り、水を求めたり、軽傷の人は食を求めたりして、休憩される人も多かった。

中には赤チンや油を塗って治療して貰ったり、親切で情け深い家では他人でありながら二人三人、多い家では八人の方を数日間、長いのは一か月も泊めて、看病された奇篤な家も

あった。

親戚や知人が縁故を頼って、被爆者が石内に疎開された数は、実に多数にのぼり数百人を越えた。

救護所（浄土寺）の状況

浄土寺へ避難して来られた被爆者の数は、五、六十人という人、百人を越えたと言う人もあり定かでない。

避難して来られても一時休息される人も多かったので、始めの中は固定していないので、多い時は百人をはるかに越え、本堂に入れきれない程であった。

しかし歩く気力もなく避難先もなく、浄土寺に到着して寝泊りされるようになった人は、五、六十人位ではなかったかと思われる。

避難者の中で症状の重い方は、うめき苦しみながら多くの人が、次々と亡くなられ毎日のように、平岩部落や中組部落の火葬場で死体を焼いた。

罹災者が多く浄土寺に避難されたので、村当局は青年学校の女生徒や婦人会役員それに近所の方々に対して、救護のため動員命令が出された。

そこでこれらの人々は浄土寺に馳せ参じ、昼夜を分たず懸命に看護に従事した。しかし日数が経つにつれて、相当長期

に亘ることが分つたので、部落毎に当番を決め交替で救護することにした。

被爆者は放射能の影響で熱が高く、多量の水を欲しがり、皮膚はみにくくはれ上がり、頭髮は抜けそれにガラスの破片が突きさゝった人が多く、遂には傷口や腐った所から、ウジ虫がうじょ／＼とわく等、目をそむけるような状態であった。

その上堂内には何ともいぬ独特の悪臭が漂い、吐き気をもよおすほどであったが、皆んなそんなことを少しも嫌がらず、一生懸命に看護に当った。

多人数のため炊き出しして、むすびを作り一人々々食べさせたり、傷口の手当それに暑い季節なので、団扇であおいだりして、夜も昼も大変であった。

また被爆者の中に、高熱が続き下痢をするので、赤痢でないかと診断され、避病院へ隔離された人も大分いた。

浄土寺へ収容していた被爆者も、重症の人が次々と亡くなられたり親戚や知人が迎えに来られたりして、次第に人数が減少していったが、一か月以上救護所となっていた。

当時石内には広島から疎開して開業しておられた、土本医院（夫婦とも医師）があったので、被爆者もガラスの破片で怪我をした児童も、土本先生の献身的な治療のお蔭で、大変幸せであった。

その他の救護活動

八月六日の午前十時過ぎより被爆者が、己斐峠を越え石内を経て、八幡方面へとひっきりなしに避難して行かれるので、その方々へ食を与えるため、地区民は婦人会を中心に炊き出しに動員された。

県道沿いに数か所場所を設定して、炊き出しをしてむすびを作り、お茶も準備して、避難者や通行人をもてなした。

梶毛神原の道路も、奥畑、戸山、吉山に通じており、この方面に避難する人も多かったので、神原部落でも炊き出しをした。

こうした炊き出しは数日間続けたが、次第にその必要がなくなりその代りに灰燼に帰した広島市の復旧に、奉仕している方々へ食糧の補給のため協力した。

即ち部落毎に日を定めて、炊き出しをしてむすびを作り、村として取りまとめ廿日市警察署の指示により、指定された場所へトラックで運んだ。

また本土決戦に備えて結成された、国民義勇隊や警防団員は広島市の道路の復旧や焼死体の処理等に出動した。己斐小学校にはおびたゞしい被爆者が収容され、毎日多数の方々が死亡されるので、運動場に数條の長い壕を掘って、火葬に付されるのを手伝いに出動した団員も多かった。

原爆投下後の私の二日間（救護活動）

当時の石内村書記　大西　勇

私は当時、石内村書記と石内在郷軍人会の書記を兼ねていました。丁度その日は午前八時三十分から、在郷軍人会の監査が行われるので、会場の廿日市小学校講堂に行き、椅子に腰をかけ友達と話をしていました。

すると突然、西側の硝子窓に太陽の光のような閃光と共に、ドスンという腹の底に響くような音と同時に、硝子窓が大きく振動しましたので、各人は思わず机の下に隠れました。

廿日市の退役軍人の人が「これは海田の変電所が爆発したらしい」といったので、予定通り監査を始めようとした時、五日市町の木原氏が「大変だ、石内小学校の子供が先程の爆発で大怪我をしたので、五日市役場に医薬品の要請があったので、すぐ帰庁せられたい」との連絡があったという。

私も石内で起きた事件なので、石内村役場へ帰ろうと思って、学校の玄関に出てみると、門前には既に被爆者の第一陣がトラックで、運ばれて来ていました。

五日市町役場まで帰ってみると、観光道路（国道二号線）に三々五々被爆者が長蛇の列をなして、廿日市方面へ避難し

て行く姿を見て、これはたゞ事でない。大変なことが発生したのだと思いながら、石内村役場へと急ぎました。

役場に帰ってみると役場内は大変でした。役場の議事堂には被爆者が二十人余り避難していました。広島市の建物疎開に出動しておられた大野町、小方町、大竹市の人が殆んど、上半身を火傷した人が多かったようでした。

聞けば己斐駅へ降りて己斐橋を渡り、太田川放水路（工事中）を歩いて行く途中被爆され、ワンピースは焼け、体は赤くはれ上がり見るも無残な姿で、痛い／＼と苦しんでおられました。

外を見ると東の空から、紙屑やソギ板等がひら／＼と飛来し、何ともいえない異様な光景でした。

私は浄土寺に多くの被爆者が収容されているのを、整理するため行くことになり、浄土寺へ行き受付等をしました。が、続々と被爆者が来られるので大混雑でした。

それから又すぐ役場に帰るよう指示があったので、役場に帰り事務をしていましたら、河内村の女学生が私の義兄が被爆し、「廿日市小学校に収容されているので、着物を持参してくれるよう」伝言があったと聞いたので丑田村長の許可を得て、着物を持って廿日市小学校へ急ぎました。

廿日市小学校に着いてみると、数時間前の静けさは何所へ行ったのか、それこそ大混雑で正に地獄絵でした。

講堂を始め各教室へはむしろが敷かれ、被爆者が丸太を並べたように寝て、うめき声と公憤の声が入り交り、何ともいえない悲惨な光景が今でも脳裡から離れません。

特にその中で仲仕人と思われる大きな体格の方が、全身丸焼けで赤くはれ上がり、赤い仁王さんのようになり一歩々々収容所の方へ歩いて行かれた姿は忘れられません。

それから私はやっとの思いで義兄の所へ訪れましたが、長女の額に大きな穴があき、意識不明でしたが私はどうすることも出来ず、又公務があるので、急いで石内へ帰りました。

役場に帰ってみると、既に警防団や防衛隊の召集が指示されており、各部落に対して炊き出しをし、部落会と婦人会が共同で、にぎりめしを作り役場へ集めるよう、警察署からの命令でした。

このにぎりめしは、広島市の被爆者及び市民の救護用の食糧にするためでした。丁度警防団長の白井正氏が役場におられましたので、各部落から集めたにぎり飯を、トラックに積んで私と一しょに、廿日市警察署に持参しました。

しばらく経って午後七時頃、私達は署の命令により広島市の被災者救護の食糧としてむすびを持参することになりました。

トラックが市内に近づくとつれて、明るくなり市内一面は火の海でした。己斐の別れの茶屋から市内を見れば、炎々と

焰が天を焦がし、吉島刑務所の壁が見えるだけで、所々の高いビルが火の海中に、ポツリ／＼と立っていました。

己斐橋を渡り太田川放水路工事用の道を通り、福島町の巡査派出所までは来ましたが、福島橋が延焼中で通れないので、警察の命令で舟入町方面に行くことになりました。

太田川放水路の両側のきび畑やヒマ畑には、被爆者の死体が壘々と並んでおり、車を廻すのに大変苦労しました。

折角、舟入方面へ行こうとしたのですが、舟入方面へも行かないので仕方なく、道を引き返し今度は旭橋を渡り、鷹野橋に行く南観音町へと行きましたが、こゝは一面燃え尽した家屋の残火が熱くて危険でしたが、運転手がフルスピードで通過し、庚午橋を通りやっと思的地の舟入町に着くことが出来ました。

当時この附近は一面の野菜畑でしたが、車を止めて大声で救護のむすびを持参したと叫ぶと、あちらこちらと人々が集まられたので、町内会役員にむすびを渡し、やっと思大任を果して帰途に着きました。

一晩中焦熱地獄の広島を走り廻り、無事廿日市警察署に帰ったのは午前三時頃でした。

少し休憩し一睡したかと思うと、午前五時頃起こされて朝食をすませ又命により、むすび弁当をトラックに積んで広島へ向かいました。

今日は己斐の別れの茶屋から鷹野橋に向かって行きました
が、道路は江波山、比治山等へ避難していた人達でごった返
していました。昨夜は通れなかった道路が、徹夜で防衛隊や
警防団の方々の努力で、今朝は通れるようになっていました。
橋のたもとは、古畳で囲った仮収容所が造られ、丸裸の
被爆者が水、水と兵隊さんに叫んでいました。又川の中には
馬が大きな腹を上にして浮いている等実に悲惨な状態でし
た。

鷹野橋から紙屋町方面にさしかると、線路から外れた電
車が丸焼けになり中には、半分白骨化した死体を見ました。

白神社社附近からは、電車の架線が垂れ下がり、通行不能
になっており、浅野図書館通りには、熱風にやられた十数人
が一行に、並んで倒れ死んでいる姿も見ました。

私達は鷹野橋から広大前を通り、霞町方面まで救護活動に
行きましたが、結局市の中心部へは危険なので、入ることは
出来ませんでした。

途中、空襲警報が発令されましたので、急いで低地に避難
しましたが、これは（終戦後聞いたことですが）米機が被害
調査のため低空飛行したのだということでした。

このように私は二日間、救護活動の重任を果し、一応廿日
市警察署に帰り、許可を受けて石内役場に帰って来ましたが、
この時見た生々しい光景は今も私の脳裡に強くきざみ込ま

れ、終生忘れることはできません。

手記

上沖 森京 昌江

私は当時、国防婦人会の役員でしたので、責任もあり又国
のためと思って何もかも忘れて、一生懸命お世話しました。

毎晩十二時、朝は四時半家事もそこ／＼に済ませ、炊き出
しに又浄土寺へ炊き出しや看病にと、疲れも忘れ毎日々々走
り廻り、多忙の明け暮れでした。

その中で今日でも脳裏に、強く印象づけられて忘れられな
いのは、浄土寺での被爆者の看護のことです。

原爆で頭髮は焼けちぢれ、火傷で赤くはれた皮膚、苦しい
／＼とのうめき声、夏の暑い時なので患者さんの口や、火傷
をされた部分に、ウジがわきうじ／＼と動いているのを、
ピンセットで取り除いてあげるのが、余りにむごたらしいの
で、手が震えなか／＼捉みにくく堪えられませんでした。

食前には口の中のウジをきれいに取り除いて、口をすゝぎ
食べさせてあげるのですが、口唇がふくれ上がり、目玉が飛
び出し、形相も変り果てゝおられるのが、とても人間とは思
われない悲惨な姿でした。

それでも食べさせてあげねばならないので、無理に口の中へ押し込んであげましたが、本当に気の毒でこの世の地獄さながらの状況でした。

平岩（当時）前田 ミツギ

農家の朝は早い。子供を学校へ送り出し、私は家の前の田へ肥料をやるため、小さい子の手を引いて田の傍に坐らせ、仕事に取りかゝろうとした途端、東の方山田に通ずる山頂の方向に、嫌やB29の爆音がする。又今日もかと思っていると、黄金のような激しい光りがピカッと目前を走った。しばらくして突然ドーンと地を震わす音がする。何だろうと見上げると、東の空からむく／＼と雲があがる。そしてきのこの形にひろがる。これは大変だと子供を連れて家の中に入る。

家の中に入るや否や、凄い爆風である。生まれて始めての強い風、戸障子を吹き飛ばし、壁を落し、硝子窓の硝子は散乱し、家の中は踏み場もない状態である。

丁度その頃、私は五班の班長をしていたので、班内の皆さんに避難するよう叫びながら、政田さん宅の裏山にある防空壕に逃げる。しばらくして静かになったので、外に出てみると広島の方は真赤な空、焼夷弾が落ちたのだらうと、みんな話している中、ふと気がついて空をみると、燃え屑の木片

や紙片が木の葉のように飛んで来る。中には大きなトタンや戸板まで飛んで来た。

家の中に入りとりあえず硝子の破片を片付けたが、台所にあった漬物桶（四斗桶）も味噌桶も、みんなひっくり返っていた。

そのうちふと学校に行っている子供のことが、気にかゝったので、急いで学校に行ってみると、子供たちはみんな裏山に避難していた。怪我をした人も多く、土本医院へ連れて行かれていた。

この頃から雨が降り始めなか／＼止まない。雨の中私は子供を連れて家に帰る。午前十一時半頃だったと思う。「おばちゃん、これ位の雨で川の水かさが増している。不思議なくらいだ」との声につられて、石内川に行った。

見ると増水しているのは不思議でないが、たくさん魚が浮いて流れているではないか。

石内では昔から仏教の教えで、魚を取ることは禁じられていたが、この時ばかりはと喜んで、魚を拾って持ち帰り焼いて食べた。すると翌日みんな不思議にも下痢をして困った。

さて朝から異変続きであったが、ともかく中食をと中食をすませて、道路に出てみると、これは大変思わず足が立ちすくんだ。何と異様な姿の人達が「ふぬけ」のように、ぞろ／＼と後の足を前へやり行く程度、ゆら／＼と着物は焼け破

れ、髪は焼けて乱れ生まれて始めてみる地獄絵である。

思わず「どうしたんですか。何かあったんですか。どこへ帰られるんですか」と聞いても返事はない程、命からがらの状態。やっと小さい声で「大竹へ」という人もいた。

そのように避難者が次々と数を増す中で、子供をおんぶした女の人がおられた。よく見るとその背中の子はもう死んでおられるではないか、でも私達は「あなたの背中の子は死んでいますよ」とはとても言えない。

「たゞこゝは寺です。休んで行って下さい」と浄土寺へ案内してあげた。避難者は次第に増加して行き「私は大竹へ帰るんです。水内へ帰るんです。今こゝはどの辺ですか」と息も絶え／＼に聞かれる。

私は人間は矢張り故郷は恋しく、死ぬ間際まで忘れられないのだろうと思った。そのうち避難者は本堂に一ぱいになった。

土本病院で貰った赤チンもなくなり、つける薬もなくなり、私達はどうしたらよいか処置に困り果てる。そのうちに夜になる。近所の人達で炊き出しが始まる。

蚊が多いので青草を刈って蚊ふすべをする。いよ／＼夜となる。だん／＼収容者を探しに見える人もある。よい具合に見つかって連れて帰られる人もある。連れて帰るといっても重傷者は雨戸に載せて帰られるのだ。ほんとに悲惨な戦場だ。

このような状況をまる二日間繰り返し、三日目位してからは特に治療も難しく、火傷した所にウジがわき出し、それを取り除くのが大変である。

始めはビンセットで取り除いていたが、なか／＼能率があがらないので終りには、直接に手でつかむ。その手で避難者の額の汗を拭く。終りには私のほゝや顔までがかゆくなる。

黒い雨で川水ではおむつの洗濯が出来ないので、手押しポンプで水を出し洗濯をするので、手に豆が出来て痛くなる。

五日目頃から手順も何とか解り、少しは楽になって来た。

婦人会が中心となり、部落毎に炊き出しや介護することに話が進み、五日市役場より物資も届くようになり、みんなほっとした。

それから何日か経ってからか、Sさんが血便が出ると言う。早速診断して貰うと赤痢か腸チフスだということになり、早速避難院に隔離することになる。

その後同じような症状を訴える人が多くなり、たくさんの方が隔離され、最終的には私と新宅さん、中島さんの三人になった。

それから日が経つにつれて、収容者の数も次第に減少し、一か月ぐらい経ってから残っていた人は五日市町役場へ引き取って頂き、多難であった浄土寺の救護所の幕を閉じた。

原田 中野 与四郎

昭和二十年八月六日午前六時、私は我が家を出発して、妻と共に己斐と石内の境の越嶮（こえとろ）にある畑の除草作業に行った。除草機が故障したので家に帰り、今度は近道の山道を行く。馬置の峠にさしかゝった時、ピカッ、ビュー、ドガンと大音響と共に爆発音。

私はびっくりして大急ぎで、妻のいる畑へ行ってみると、妻は畑の隅にしゃがんでいた。

小屋の屋根は吹き飛ばされ、荷籠（おしこ）は三間向うの田の中に飛んでいた。広島方面に黒い雲がむく／＼とふくれ上がる。これはたゞごとくないと山の上に駆け登り、東の方を見ると真っ暗、しばらくして紙屑、そぎ、とたん板等が空中からたくさん飛んで来る。

己斐小学校付近から火の手があがった。これは妻の実家の方だ。もしや妻の実家ではないかと、急いで家に帰る。

そのうちポツ／＼と黒い雨が降り始め、家に帰りついた頃には大雨となる。大急ぎで着替して、みのかさ姿で己斐峠を越え己斐へ急ぐ。途中被爆者が続々と石内へ避難されるのと出会う。気の毒で全く見られない。

顔の皮がぐるとむげて、眼ばかりギョロ／＼光り、衣類

はぼろぼろに焼けちぎれ命からがら、ざらり／＼と歩いて行かれる。まともにはとても見られない。

己斐峠を越えて己斐の部落に出る。己斐小学校の近くで中学生三人と出会う。「おじさん、僕たちはどこへ行けばよいの。水を下さい」という。私も勿論どうしたらよいかわからないが、とっさに己斐小学校が救護所になっているので「己斐小学校へ行きなさい」と言つて、三人を小学校に連れて行く。私は三人を小学校の救護班に渡して、義父母の家へ急いだ。幸いに両親とも無事だったので安堵の胸をなでおろした。

しかし屋根はがた／＼壁は落ち、足の踏み場のない状況であつた。

さて黒い雨は、石内から己斐峠までは大雨で登り尾の川は溢れる程水が流れていたが、己斐峠を越えて己斐側に出ると小雨となり、己斐の町に近づくに従つて止んで来た。

上沖 森京 昌江

姉の長女の清子さんが、学徒動員中被爆し、行方が分らず心配していましたが、漸く見つかり家につれて帰りました。

背中全体が火傷して、夜昼となく苦しむので見ておられませんでした。言いようのない臭気にも馴れ、少しでも痛みを忘れさせ、気をまぎらせようと思つて、団扇であおぎながら

汗だくの看病でした。

ひっきりなしに痛いよう／＼と泣き叫ぶので、食用油や赤チンを塗っていましたが、それも無くなり、きうりや野菜の汁をつけてやったりしました。

骨粉がよいというので、患部につけてやると大変痛がりましたが、早く癒るからといって涙ながらにつけてやりました。「痛いよう」「苦しいよう」「水が呑みたい」と悲痛な叫び声、遂にアメリカ兵が憎いと言う。

本当に看病する私達もつらい。見るにしのびない毎日でした。

「清子さん、おじさんも戦地で命がけで戦っているのよ。勝たねばならない戦争だから、苦しいけれども我慢して、気分をしっかりと持って早く癒ろうね」と慰めたりはげましたりするのです。

苦しい。難儀だから死んだ方がよいと言う清子さんの心情、察するに余りあるものがあり、慰める言葉もなく涙ぐむのでした。

人間の体は三分の一火傷^{やけど}、命が危いと聞いて居ましたし、清子さんは体の半分も火傷しており、その上つける薬もないので、大変心配していました。

私どもが心配していた通り清子さんは、被爆後九日目十分な治療も受けられず、遂に可哀そうにも息を引きとりました。

苦しみのなくなった清子さん。どうぞ安らかに眠り下さいと祈るばかりです。悲痛な清子さんの声、何かを訴えるようなまなざしが今も耳に目に走馬灯のようにかすめ、心底の傷は癒すことができません。

そしてこの惨状を二度と地球上に繰り返してはなりません。核なき世界の実現のため、核廃絶への熱意、原爆の悲惨さを後世に語り伝え、平和な世界こそ私達の使命ではないかと考えています。

下沖 増田 房江

原爆が投下されてから二、三時間経ってから、避難者が県道をボツボツ八幡方面へ逃げて来られた。

皆焼けたボロボロの着物をつけて、血走った眼をギョロ／＼させて足許もおぼつかなく歩いて行かれる。聞けば広島は殆んど火の海だということである。

広島島の空から紙片やボロ切れや襖なども飛んで来る。時間が経つに従って避難者も多くなる。怪我をして血を流しながら、放心したように歩いて来られる人もある。

私達は常会長の指示により、中山さんの宅で炊き出しをして、むすびを作り通られる人々に配る。

中には此処までは二人連れで歩いて来られたが、一人の人

が歩けなくなり中山さん宅の大八車を借りて、元気な方が引いて帰られた。大竹まで帰ると言っておられたが、果して無事で帰られたか案じられた。

また若い婦人が子供を背負って、よろ／＼と歩いておられるのが、とても変なので、傍によってなおしてあげようと思つて、子供に手をかけて私はハッと息をのんだ。子供は死んでいるのだ。

お母さんは「この子は死にました。死んでいます。」とたゞ無表情でつぶやかれた。廿日市まで帰るんだと言っておられたが、私は合掌の気持で無言で見送った。

昼過ぎ姉の長男が背中一面火傷して帰って来た。高須で被爆したという。玉ねぎをすってつけてやる。

夜になつても広島は空は炎で明るい。時々何物かが破裂するような大きな音がして、黒煙がもう／＼と空高くあがる。

長女の節子が帰らないと心配そうに姉が言う。昼過ぎから何べん聞く言葉だろうか。子を思う親心。子の帰りを待つ親の心情が痛い程、察しられるが私にはどうしてよいか、なすすべもない。

六日の夜は一晚中一睡もせずに、節子の帰りを待ったが遂に帰って来なかった。

翌朝、姉は節子を探しに行くという。まだ広島は燃えている。広島は何処をどのように探ねに行くのか、広い広島で果

して節子が見つかるであらうか、千に一つが難しい。しかし姉の気持が解るので止められない。結局姉は節子を探しに広島に出て行った。

私は実さんをリヤカーに乗せて、救護所になっている浄土寺に治療に行く。本堂から廊下にかけて、いもの子を並べたように被爆者が転がってうめいておられる。

婦人会の方々が患者の間を、またげながら一生懸命に看護しておられる。殆んどの方が丸裸のようにはれ上がり、息も絶え／＼の方が多い。私は地獄とはこのことかと、何時か見た往生要集の地獄絵を思い出した。

夕方遅く姉が帰って来た。一日中広島を探し廻ったが節子は見つからない。「節子は死にました／＼」と、泣きながら私にすがりつく。「あの炎が節子を焼いている」と気狂いのように口走る。

私は節子さんは、何処かへ逃げているかも知らない。諦めるのはまだ早いと慰める。しかし私には確証はない。

その夜も寝ずに泣き悲しんだ姉は、翌朝も又広島に節子を探しに行くという。姉の体が心配であつたが止めることは出来ない。今日もまた一日中、足を棒にして広島を東から西へ、北から南へと、我が子を懸命に探し歩いたが、矢張り見つからない。

重い足をひこずりながら、夜遅く帰って来た姉は、やっと

のこと上がりがまちに倒れ込み「矢張り節子は死んだ／＼」
とわめく。

翌朝は姉に代って私が探しに広島へ行くことにする。己斐
峠に登って広島を眺めると、一面の焼野が原でびっくりし、
広島がこんなだだ広かったのかと驚く。

市内の所々から煙が上がっている。途中石内の警防団の人
達に追い越される。聞けば己斐小学校では毎日被爆者が、百
人くらい亡くなれるので、その死体処理し火葬の手伝い
に行くのだといわれる。

そう思うとこの峠道でも、人を焼く悪臭が漂って来るよう
な気がする。広島に出て人の噂を頼りに、鉄道病院を目当て
に東へ歩く。産業奨励館の鉄骨だけが、悲惨な姿で残ってい
るのを見ながら相生橋を渡る。

兵隊さんが、此処彼処の瓦礫の中から死体を掘り出したり、
川の中から死んだ人を引き揚げ、トラックに積んでおられる。
やっとのことで鉄道病院にたどりつき、中を見てびっくり
した。土間にむしろが敷いてあり、被爆者がたくさん苦しそ
うにざこ寝をしておられる。

一人々々を丁寧^{ていねい}に節子ではないかと見て廻る。ウーン／＼
とうなる人、ヒー／＼と泣く子、その間を、我が子を、我が
夫を、我が親をと探し求める方々が、鋭い眼つきで検分され
る。

矢張り駄目だったのかと残念そうに、病院を出て行かれる。
私も結局節子を見つけることが出来ず、瓦礫の中を引き返し
て、中島方面へ行くことにする。

こうして広島を終日あちらこちらと歩き廻ったが、雲をつ
かむようなもので全く見当がつかない。

「とても生きてはいないだろう」と半ば諦めて、後髪を引
かれる思いで帰途についた。

半病人半狂人の姉を独り家に置いておけず、私も疲れたの
で翌日は二人とも休憩し、その翌日私一人で節子を探しに出
広する。

今日も又広島中をあちらこちらと尋ね歩き、特に広島駅方
面を綿密に探す。しかし矢張り見つからない。広い広島の何
処をどうして探したら見つかるであらうかと、考えてもなか
／＼よい思案が浮ばない。せめて希望を明日にと、重い足を
とぼ／＼と帰途に着く。

やっとな己斐峠の頂までたどりつき、広島^{ひろしま}の空をふり返れば、
あれ程明るく美しかった夜景も、薄暗く灯一つなく、所々に
煙が上がって見る影もなく哀れである。

あのたくさん^{たくさん}の市民は、今何処に行つてどうしておられる
だろうか等、いろ／＼な思いが胸に去来した。

「節子はとても助つてはいまい」と思わず合掌した。昔釈
尊が末法の世になると、天から火の雨が降って人類が滅亡す

ると聞いていたが、全くその通りだとつくづく思った。

もうこうなつては、姉も私も節子の行方を探ると共に、たゞ生きていることを神仏に念じ、不安の毎日を過ごしていた。こうした一念が神仏に通じたのか、死んだと思ひこんでいた節子が、八月十四日、八日振りに突然帰つて来た。

幽霊ではなくまぎれもない節子である。聞けば被爆した時丁度便所の中にいたので、直接光線を受けなかったので放射能の影響も少なく、友達と共に二葉の里の山中に命からくす避難していたという。しかし全身にガラスの破片が突きさまつていたので、取り除いてやるのが大変であり、水入病院へも通つた。

平岩 倉本 恵美子

昭和二十年八月六日、私には生涯忘れることの出来ない日です。妹敏枝は、広島女学院専門部一年に在学中でした。四月に入學したのですが、勉強はしないで学徒動員で毎日作業ばかりでした。

当日も朝早く紺のモンペに、日の丸の鉢巻姿で元氣よく、自転車で家を出て行きました。

私は家にいましたが午前八時十五分、閃光と共に物凄い爆風で一瞬にして、天井板が跳ね上がり、戸障子、ガラスは飛

散し、惨憺たる状態でした。私はびっくりして、たゞうろたえるばかりでした。

山畑に行つていた父は「さつまいもを貯蔵する横穴に、避難していましたが、広島空に茸状の雲がむく／＼と上がるので「これはたゞごとでない」と思ひ急いで家に帰つて来ました。

しばらくすると、ボロボロの服を着て火傷をした被爆者が、己斐峠を越えて県道を続々と避難して来られました。

父は「敏枝はどうしているだろうか」と心配して、直ちに身支度して妹を捜しに広島に出て行きました。

私は足の踏み場もない家の中を整理していましたが、恐いので家の外へは一步も出ませんでした。その中に夜になりましたが電灯は勿論つきません。

ただ／＼妹の安全を祈るばかりでした。大変長い時間でしたが暗くなつて父はやつと帰つて来ました。一人でした。ぐつたりとして家に帰ると、洋傘を放り出し「敏枝は駄目だ、学校の方は火の海で、ぜんぜん近寄れない。己斐の山手を鉄道線路に沿つて、横川の辺りまで行くのが精一杯でどうすることも出来ない」とその場に泣き伏した。

捜しに出る道中、火傷で手足の皮がぶら下がり、中学生は帽子の際から焼けて腫れあがり、又女の人の服はボロボロになり、裸同然で男女の区別もつかず目を覆う状況で、全くこ

の世の地獄でした。

その夜は父も私も食事は、咽喉^{のど}を通らずたゞ泣くばかりでした。それから毎日妹を捜しに出ました。何処かの収容所に避難しているのではないかと、かすかな望みを抱いて、妹のモンペを持って、あちらこちらの収容所を捜しましたが手掛りはありません。

夜は妹が何時帰っても家の中に入られるようにと、鍵はかけずに待っていました駄目でした。

縮景園に行ってみると、沢山の被爆者が命絶え^くに横たわり、水々と言われるので、弁当箱で水をあげていたが、次々と望まれるのでその場を逃げられなくなり、困ってしまつたとのことでした。

敏枝の同級生で助かった人が、吉見園に住んでおられると聞いて、訪ねた所「私は当日遅刻して、朝会のある講堂の後の方にいたので、早く避難でき助かったのですが、中にいた人は出られなくなり、みんな焼死したらしい」とのこと、父は後日学校に行き焼けた所の、土を持ち帰って墓に収めました。

平岩部落では、浄土寺の若院と私の妹の二人が行方不明となつたので、部落の方々が手分けして、捜しに出て下さいましたので、私も一しょに捜しに広島に出ました。

あちらこちらの収容所を廻り、一人々々を検分して確かめ

るのですが、本川小学校に立寄った時、床の抜けた校舎で沢山の被爆者が、火傷が痛くて泣きわめく声、腫れ上がった顔、体中が火傷で男女の区別がつかない姿、何ともいへぬ悪臭、ほんに筆舌には表現できない状態でした。

東練兵場では、各自で自家の死体をトタン板に乗せて来て、方々で思い／＼に火葬していましたが、まともには見られませんでした。

私の知人も主人を自分で運び、火葬したので、今でも焼魚は当時を思い出して食べられないと言います。

それから私の家では、親戚の人が数名避難して来られました。その中の一人が行方不明でしたが、数日後運よく無事に帰って来られ、皆んな抱き合つて喜ばれるのを見て、羨しくもあり淋しく悲しい複雑な思いをしました。

その頃は殆んどの家に、罹災者が疎開しておられるし、親戚知人の安否を尋ねたり、捜しに出たり浄土寺の被爆者数十名の看護の当番等大変でした。

時には敵の艦載機が石内の空を飛んだりするので、この上何が起こるのかと恐しい思いをしていました。

そのうち八月十五日の終戦の日を迎えました。今まではどんなに苦しくても、最期には神風が吹いて日本が勝つと信じていたものが崩れ、何も信じられなくなり、又一方では戦争が終りホットもしました。心をとりのおして妹の葬式をすま

せ、食糧不足の折柄父と一生懸命に働き、供出米も厳しく翌日食べる米だけ残す状態でしたが、供出を完納し責任を果して来ました。

今は豊かな時代となり、当時の事を話してもなか／＼通じないようです。父も長生きして、昭和五十五年八十六才で亡くなりました。

妹も生きておれば六十才に近く、孫の二、三人も居るだろうと思うこの頃です。

上沖 久保田 晃

昭和二十年にもなると戦局はいよいよ熾烈しれつを加え、空襲も度々発令されるようになっていました。私は当時県工に在学していましたが、学徒動員が発令され、日本精鋼所に出動していました。

向洋の精鋼所が万一空襲を受けると、被害が甚大なので工場を分散し被害を少なくするため、西蟹屋町の紡績工場を軍需工場に切換え、そこで高射砲の砲丸を製作していました。

市女の生徒もいっしょでしたが、その頃日本は戦局もはかばかしくなく、私達中学生にも兵役に服するよう、強い要請があったので私も意を決して志願することにしました。

兄が航空隊で戦死しましたので、私は洋上軍艦に乗る海軍

に志願し合格したので、昭和二十年九月入隊することになっておりました。当時は二十才で徴兵検査を受けるのが普通でしたが、私はその時十五才でした。

さて私の動員されていた軍需工場は毎週、月曜日が電休日でその日は休日になっていました。

昭和二十年八月六日、その日は月曜日だったので、私は縁側に出て戦斗機の模型を作っていました。

すると一瞬するどい光線が目前を走ったかと思うと、大気から伝ってくる圧迫感と騒音が入り混り、全身が吹き飛ばされそうな感触を受けたので思わず地面に伏せました。

家の前の樹木が幹ごと揺れ、木の葉が裏返りざわ／＼大きな音をたてました。田んぼで草刈りをしていた母が急いで帰り、「今のは何じゃろうか」と声をかけられる。母もいきなり畦道に伏さったという。

それにしても何かが起ったのだらうと思って、前の道路に出てみると、東の山の方に黒い煙がもう／＼と上がるのが見えた。

「石内小学校がやられたのかも知れない」一寸見に行つて来るといつて自転車に乗り出かける。県道まで行かぬうちに沖の山広島の空からの煙である。油タンクが燃えるように盛んに黒煙が上昇する。相当大きな規模の火災であるらしいと思ひ、一応家に帰つて母に話す。

すると母が「今日は愛子（姉）も勤めに出ているし、お父さんはどうかのう」と言うのである。

父は天満町の某薬品会社に、姉は革屋町の某銀行にそれぞれ勤務していた。「じゃあ私が見に行ってくる」と自転車に乗って、落合橋を渡り八幡川に添って国道二号線に出て、井の口あたりで市内の様子を見るに、全市の上空は黒い雲に包まれて透視が悪くなり、荒手の方まで行った頃から、ポツリ／＼と黒い雨が降り始めた。

そして上空に飛行機の爆音がし、あたりは煙でもなく、埃りでもない暗いペールに包まれ、不快な感じである。二次の空襲があるかも知れず、黒い雨もしげくなったので、仕方なく諦めて引返すことにした。

自宅に帰ったのは午前十時半頃だったと思う。母は爆風で倒れた戸障子や、勝手口のガラスの破片を片付けていた。広島の実体が判明しないので、父や姉の安否を心配しながら、母といろ／＼話をしていると、突然父の声である。

「オーイやられた」と言いながら帰って来たのである。見れば父の後ろに見知らぬ女性が二人おられる。会社の職員である。一人は背中に火傷をしておられたが、他の人は外傷はなかったようである。

父は前頭に小粒の球血があった。とにかく応急手当せねばと思っていると、後から会社の男性が来られ、火傷には油が

よいと言われるので、家にあるものを出して手当をする。

父は原爆が投下された時、家の下敷きになり体を動かすすき間もなかったが、夢中になって何とか這い出たという。その中に「助けてくれー／＼」の声があるので、懸命に声をかけあい手をのぞけて、引きずり出したのがこの人達であったという。

それから後は誰がどうなっているか全く解らず、一目散に己斐方面をめざして逃げ、山越して石内へ帰って来たのであった。そして今頃は市内は火の海だと言う。

愛子は「出勤中で電車の中か、早ければ銀行にいたかも知れないが何とも言えない。」と半分諦めたような口振りとにかく、この世の地獄であると声をこぼらせて語るのである。

ひとまずみんな落ちつき平静になったが、私は姉のことが心配なので、自転車に乗って家を出た。

父と同じように己斐峠から帰るかも知れないと、白山八幡神社の前で待っていたが、少しでも早くと思って石内小学校の前まで移動して、橋の上で待っていたがなか／＼姿が見えない。

その頃県道では被爆者がたくさん、とぼ／＼と歩いて避難しておられる。見るも悲惨な姿で、埃まみれの茶褐色で被服の見さかえもつかず両手を前に垂らし、手袋をしておられる

のかとよく見れば、皮膚が垂れ下がっているのだ。いきなり顔をそむけたくなった。

でも姉は元気でいてくれればよいがと、神仏に念じながら待っていたがなか／＼帰って来ない。

その中に日は暮れて暗くなったが、矢張り姉は帰って来ない。父は今日はとても広島には入らないから、一晩待って明日捜しに行ったらよいと話していた時、家の前で自動車の停車音がした。

何だろうと立ち上がった時、「久保田さんの娘さんですよ」と言う声。一瞬みんな驚いて出てみると正しく姉である。母を始め一同涙を流して喜んだ。丁度午後九時頃だったと思う。聞けばその人は八幡の利松の商店の人で、市内へ救援に行かれ己斐の鉄橋を渡っていたら、姉と出会い親切にも石内まで、送って下さったのである。

姉は前日まで腹を痛めお粥を食べていたが、銀行を休んでは他の人に迷惑をかけると思って、無理をして出勤し被爆したのである。姉は銀行に着いて銀行内で雑巾掛をしていた時、原爆が投下され、一瞬思わず打ち伏したのであるが、気がついてみると周りは、瓦礫やガラスの破片で埋っていたが、幸いにも体にそれ程の被害はなかった。

それから西に向かって逃げようとしたが、火の手があたり延焼中だったので、西練兵場を東に突っ走り、饒津神社前の

川の丸太の筏にもたれ、熱射を忍んだという。

その中に多くの人が丸太につかまるので、丸太は揺れ黒い水をかぶったり、時には口に入るので呑んだりして、一日を過ごしたという。中には力尽きて倒れた人もあった由。

そうしている中に日が暮れ、市内の火災も下火になったので、電車道に出て己斐に向かって歩いていく中鉄橋の上で助けられたのだ。

帰宅しても姉はしばらくの間は、畳の上にうつ伏せになり、被爆後の状況を苦しそうにとぎれ／＼に語るのである。それにしてもよくも帰って来れたものだと思議に思い、みんな喜び合った。

父といっしょに避難して来られた女性も、火傷がひどく痛み苦しそうである。うつろのうちに夜が明けたので、私は姉をリヤカーに乗せて八幡の医院に連れて行く。

これから毎日私は姉をリヤカーに乗せて、医者に通うのが日課となった。最初は別に気もつかなかったのであるが、姉は左手の脈の打つ所が痛むというので、診察して貰うと、五厘ぐらいの硝子の破片がささっていた。

手術して取り除いたのだが、手首がだん／＼変色して紫色になり、最後には中関節まで拡がって行った。

そのうちに八月十四日の盆を迎え、姉も一時元気になり快復したように思え姉も「今日は盆じゃね。墓参りして来よう」

と言うので、私が付き添って裏山の墓に詣ったのである。それから一日経ってから急に病状が悪化し、遂に病床から起きようとしなくなった。

八月十五日、聖断によって終戦を迎え、涙ながらにラジオ放送を聞いたものである。父はこれからの日本は賠償金も払わねばならず、復興するには五十年はかゝるだろうと言っていた。

姉は日毎に衰弱して行くのが目に見える。通院出来ないの
で往診して貰うように依頼する。

父といっしょに来られた二人の女性の方も、姉の病状が悪
いので気をつかってか、私の家から出て行かれた。

姉の病状は次第に悪化し、八月二十六日朝から大雨の降る
日であった。その日の夜九時頃、二十才の生涯を終えたのである。私にとって唯一人の大切な姉であり親しかっただけに
残念で／＼ならなかった。

姉の葬式を涙ながらにすませ、父は一か月位休養していた
ら元氣になり、幸いにも勤務できるようになり、原爆の記念
にといつて瓦礫の中から焼けたゞれた鉄兜を持ち帰ったりし
た。

私も九月頃から学校が始まり、一面の焼野が原の市内を通
って学校に通っていた。

そして翌昭和二十一年正月を迎えてから父は風邪を引いた

と言って床に就いた。風邪なら三日ぐらいすれば癒ると思っ
ていたが、なか／＼治らず起きない。仕方なく医者に往診し
て頂いた結果「これが原爆症だ」と言われびっくりした。

病氣一つしたことのない元氣な父であったのに、原爆症に
は勝てず家族の必死の看護も空しく、昭和二十一年二月十日
午前十時五十三才の短い生涯を終えたのであった。

兄二人と姉それに父を失った母と私は、茫然としたが氣を
取りなおし、如何なる困難も克服し、強く生きるよう決意し
たのである。

終戦後の生活

昭和二十年を迎えてから戦局はいよ／＼急迫し、沖縄が占
領されてからは、敗戦の色が濃くなりじり貧に追いこまれて
行った。

しかし陸軍を中心とした軍部は、本土決戦を決意し徹底抗
戦の態勢を整えつゝあったが、遂に八月十五日聖断によって、
ポツダム宣言を受諾することになり、長く苦しかった大戦は、
遂に敗戦という残念な結末を迎えたのである。

戦争は尊い人命と莫大な物資を消耗するもので、我が国も
数百万人の若い男性を失ない、国内に於ける総べての物資を
犠牲にした。

戦勝を期して国民が汗と脂で造った軍艦や飛行機を始め多くの軍需物資、困苦欠亡に堪えて増産に励んだ食糧、生活必需品まで持てるもの全部を戦争遂行のため、投入し使い果たたのである。

まさに国破れて、山河ありの感を深くした。軍隊は解散し、戦地から命からがらの復員者、海外から裸一貫での引揚者で人口は急増した。東京を始め大都市は焼失し、日本国土は荒廃し、働く場所の生産施設は壊滅し、国内には食べるに食糧なく、着るに衣料なく、住むに家なく、全くの丸裸で人心は放心状態で、都会には浮浪者が溢れた。

広島市も原爆により一瞬にして廃墟と化し、七十年間は人や生物は生育しないとまでいわれていたが、不死鳥の如く草木は芽をふき、人間も次第に広島に帰り住むようになった。焼け跡に焼け残りの柱や板を拾い集め、雨露をしのぐトタン屋根の家が建ち始め、生活必需品特に食料品を中心としたいわゆるやみ市が出来だした。

被害が割合少なく農村との交通の便利な広島、己斐、横川駅等がやみ市の中心であった。

やみ市が最も早く生まれたのは、広島駅前で敗戦後わずか数か月で、約四〇〇軒にふくれ上がった。生活必需品は配給制がたて前なので、やみ市の取引きは、違法のものであったが、警察も国民の生活の円滑化のため、見て見ぬふりをして

いた。

やみ市に並べられているものは殆んどが、食料品と衣料であったが、進駐軍が進駐して来てからは、進駐軍から横流しの物資も入荷するようになり、チョコレートや外人の衣料等も多く放出されるようになっていた。

この頃街角に流れていた「赤いりんごに唇よせて、だまって見ている青い空」のりんごの歌は、すさんだ人心にうるおいを与える一服の清涼剤であった。

この頃になるとこれまで日本銀行が発行していた紙幣は使用できなくなり、新円が発行されたが、貯金していても使用出来る金額が制限されていたので（六千円以上は封鎖）物々交換特に米を持って行けば、何でも手に入る状態であった。

このように生活上一番大切な必需品は、食糧と衣料であるが特に食物はなくては生きて行けないので、米は何よりの貴重品で当時はなかなか手に入らなかった。とうもろこし、大豆糟、ぬか等によもぎを混ぜて作っただんご、顔の写るようなお粥のおじやを、列を作って食べたりして、ほんとに餓死寸前の状況であった。

市内から上等な絹の着物を持参して、米麦や大根等の野菜と交換して欲しいと、リュックサックを背にした所謂買い出しの人が農家に多く訪れた。しかし農家も自分の家で食べる米も不足勝なので、分けてあげる余裕のないのが実状であっ

た。

それ程までに食糧が不足すればする程、農家に対して供出はきびしく前述（平崎栄氏の談）のように、警察官が介入して供出を督促していた。

終戦後の昭和二十年から二十三年頃までの混乱期の衣食住の生活は実にきびしく、我々は心から敗戦の悲惨さをつくづく感じたものであった。特に食生活はきびしく餓死する者が、数百万人も出るのではないかと言われていたが、マッカーサーによる米国の食糧の放出があつてかろうじて生命が維持された。

また一面人間は環境に応じて生きて行く生命力を持っているもので、困ればそれを何とかして解決しようと努力工夫し、所謂生活の智慧を以て、苦境を切り抜ける能力を持っている。食物に困れば食べられる野草や、木の皮や葉や根を食べたり、マツチがなければ、太陽熱や火打石を利用して発火して、原始的な生活でしのげられるものである。

終戦後苦しまぎれに代用品で間に合わせたものとして、いろ／＼あるが、煙草は僅少ではあるが終戦後も配給されていたが、男女平等ということで女性にも配給されるようになった。

しかし絶対量が大変少ないので、ヨモギやイチゴの葉、それに松葉等を紙片に巻き、巻き煙草の代用として飲んだ。

清酒は喜びにつけ、悲しみにつけ必要な物であるが、貴重品でなかなか手に入らないので、薬用のアルコールに目をつけ、水で薄めて飲んだ。エチルアルコールは無害であったが、間違えてメチルアルコールを飲んで眼が見えなくなった人もあった。

また違法ではあるが、やみ米でどぶ酒を造って飲む人も多く、街々の食堂の殆んどは白いどぶ酒で賑っていた。

塩は砂糖以上に食生活に必要なものであるが、殆んど配給がなかったもので、海水を汲んで煮つめて塩を造った人もある。また米搗きも、白米の配給でなく玄米の配給であったので、非農家では一升瓶に米を入れて、木の棒を上下して時間をかけて搗いて食べた。

進駐軍と民主化

昭和二十年八月十五日、天皇の終戦詔書により終戦を迎え、九月二日東京湾上の米艦ミズリー号の艦上で、マッカーサー最高司令官と、日本代表による降服文書が調印された。

調印式に先立って八月二十八日、連合軍の第一陣は神奈川県厚木飛行場に降り立ったのを、手始めとして日本全国の占領が次々と開始されていった。

広島県への進駐は、広島市が原爆で焼け野が原になってい

たので、呉市の広港に入港することとなり、輸送船三十隻が十月六日から八日にかけて、呉地方へ八千人、広地方へ八千人、海田市地方へ三千五百人の部隊が進駐を完了した。

昨日まで「鬼畜米英」と呼んでいた連合軍が進駐して来るので、県民の不安は大きく、さまざまの流言や憶測も流れていたが、割に平穩のうちに完了して何よりであった。

進駐部隊も次第に増強され、県下一円に及び昭和二十年の年末には兵員総数は二万三千五百人に及んだという。

然し昭和二十一年一月になると、広島県の占領に当たっていたこれら米兵は三千人を残して帰国し、代って英連邦軍が進駐してきた。進駐軍司令部を呉市に置き、広島、島根、山口の三県を支配していた。

これら英連邦軍はイギリス軍、オーストラリア軍、ニュージーランド軍、スコットランド軍などの混成で、帽子服装等も極めて国際色豊かなものであった。

敗戦を終戦と言い、占領軍を進駐軍と呼んでいたが、マッカーサー司令官の権限は絶対のもので、終戦と同時に進駐して来た占領軍は、再び日本が軍事大国となり戦争をしないよう、日本の民主化のため次々と手を打ってきた。

即ち戦争犯罪人の裁判を実施するとともに、婦人参政権による女性の解放、労働組合の結成奨励、教育の民主化、圧制的専制的な制度の撤廃、経済機構の民主化等々が改革されて

いった。

特に家族制度（民法の改正）地主制度（農地改革）教育制度（六三三制、男女共学）雇用制度（労働組合の結成）経済機構（財閥の解体）等々は戦後日本が民主主義国家として、再出発するに当って是非ともなし遂げなければならない制度であったが、それらが嫌応なしに着々と、進駐軍の命により実施されていったのである。

そうして、国家統治の基本を定めた日本国憲法が進駐軍の指導によって制定され公布されたのであった。

然しながら見渡す限りの廃虚、物資不足特に食糧難、それに敗戦による放心状態の中での、国民生活の建て直しは、容易のものでなかった。

即ち軍事体制の下に、軍需優先による衣食住にかゝる生産は完全にストップし、窮乏のドン底にあえぎ、やみ市が繁昌し、インフレは急激に進行し、ストライキは全国に盛んに決行されていた。

ところが、昭和二十五年、終戦後日本から独立し、南北に分断された朝鮮半島に朝鮮戦争が勃発した。

そのため我が国は、軍需物資の調達等いわゆる特需による景気が上昇し、日本の経済は急激に活気を取り戻し、国民生活は次第に回復し始めたのである。

平和記念都市の建設

たった一発の原子爆弾で廃虚と化した広島は、七十五年間は草木も生えないと、まことしやかに語られていたが、秋になると生き残った市民によってあちらこちらにバラックが建てられ、官公庁も徐々に活動を始め、交通機関も次第に動き始める等、まがりなりに都市機能が回復しつつあった。

復興広島市は如何にあるべきか――いろいろ検討された結果、市、市議会、市民が一体となって具体的に計画を煮詰め、百米道路を始めとする幹線道路、中島地区一帯の平和公園等を具体化し、遂に昭和二十四年二月、市長、市議会議員が「広島原爆災害総合復興対策に関する請願書」を提出し、三月には念願の「広島平和記念都市建設法」が満場一致で国会で可決された。

こうして昭和二十六年にまず百米道路の平和大橋、西平和大橋が完成、続いて二十七年慰霊碑、三十年には平和記念館、資料館が次々と市民の前に姿を現した。

日本有数の軍都から一躍、平和都市へとみごとな転換であった。

平和の塔

石内地区のほぼ中央にある白山八幡神社の階段を登り、大きな石の鳥居をくぐると右側の杉木立のもとに、清楚な黒みがけの塔が建っている。平和の塔である。

石内地区の軍恩分会（三十五名）が中心になって、募金し、昭和五十八年十一月二十三日、郷土の英霊を追悼し、世界の恒久平和を祈念して建設した記念碑である。

昭和戦役に郷土より
従軍され祖国の為に散
華された七十五柱の英
霊を追憶し、恒久平和
を願って、この塔を建
立す

石内従軍者



平和の塔（石内白山八幡神社）

平和の塔について

世話人代表 岡田 幸夫

私達、長年外地に出征した旧軍人で組織する軍恩石内分会で、郷土の英霊を追慕し、恒久平和を願って、石碑を建てようという計画し、世話人会を発足させたのは、昭和五十八年七月でした。

世話人会は早速、各部落毎に昭和戦役（満州事変、日中戦争、大東亜戦争）に石内地区から何人出征、応召したか調査しました所、実に二百四十五人の人が従軍し、うち七十五人が戦死又は戦病死され、百七十名が生還していることが解りました。

そこで、石碑の建立についての趣旨を、戦友である生還者に呼びかけたところ百五十六名の賛同を得て、資金三百六十五万円をご寄付頂き工事は岩崎大理石株式会社に依頼しました。

石碑の高さは一米、巾一・五米、厚さ二十厘の黒みかげ石を台石に乗せ、英霊七十五柱の名簿をステンレスの箱に密封して納入しました。

表面の「平和の塔」の文字は灘尾弘吉代議士に揮毫して頂き、その下に「昭和戦役に郷土より従軍され、祖国の為に散華された七十五柱の英霊を追憶し、恒久平和を願って、この

塔を建立す」と碑文を刻みました。

除幕式には、天候にも恵まれ五日市町長村田清槌氏を始め、多数の来賓のご臨席のもとに、遺族や戦友二百数十人の参列を得て、厳粛盛大に挙行出来ました。

私達も今はなき戦友に対して、何か一つ肩の荷を下ろした気持ちがあります。人間は考える葦だといわれています。経験から反省が生まれ、それがやがて将来への指針として活用されます。

その意味からも真の平和を願う者は、戦争を体験した従軍者であり肉身を国家に捧げた遺族の方々だとも言えます。

終戦後四十年を経過しましたが、その間我が国は幾多の試練を経て堅忍持久、刻苦精励して今日の豊かな国家を招き出されたのだと思います。しかしながら私達は有史以来の大戦争に於て、実に多くの犠牲と損害を生じたことを痛感して居ります。

特に懸念万里の大陸で、大洋で国家の安泰と家族の幸せを信じつゝ国難に殉じた戦友を想う時、万感胸にせまるものがあります。

その私達も今は老境に入り、生存帰還者百七十名中、三十余名は他界されて居ります。最近の日本は平和で豊かな時代で、苦難を知らぬ若者の時代へと移行しています。

今私達の手で名簿を整理して郷土史の一頁として留めると

共に、隣りに建っている明治戦役記念碑と共に、昭和戦役記念碑として残すことにより、私達の子孫が真の平和を考え、明るい未来を築いてくれることを祈念して止みません。



現在の白山八幡神社

昭和戦役戦没者名簿

区分	氏名	死亡年月日	遺族住所	氏名	備考(死亡場所)
海空	角田義之	18・11・25	半坂(父)	全(故)増一	台湾方面戦死
陸	新宅秀明	20・9・29	半坂(義弟)	全梶田津守	湖北省岳陽療養所
"	中住優	21・3・31	半坂(一)	全一男	上海陸軍病院
"	中野正人	20・9・22	半坂(弟)	全稔	在郷死
"	前田繁登	19・12・24	原田(父)	全(故)重丸	大島島戦病死
"	玉原積人	19・5・31	五月ヶ丘(弟)	全賢三	アドミラルテイ諸島戦死
"	川原利人	12・11・30	原田(弟)	全水夫	江蘇省金山県戦死
"	松田矩人	20・6・14	原田(妻)	全綾子	比島ルソン島戦死
"	山崎繁之	20・5・3	原田(母)	全(故)サトヨ	
"	上田静登	20・5・1	五月ヶ丘(兄)	全政登	比島マウンテン州戦死
"	平岡寿美	20・1・21	平岩(長男)	全勇	湖北省武昌陸軍病院
"	溝下正明	20・10・24	平岩(義兄)	全栄	印度支那野戦病院
海	九鬼勲	18・11・11	平岩(弟)	全忠	ソロモン群島戦死
陸	渡部正一	20・8・16	平岩(妻)	全寿子	満州東寧
"	大原謙一	19・2・29	平岩(義姉)	全かわ代	マラッカ海峡アロア島戦死
"	平田斐夫	12・9・28	平岩(弟)	全穂一	欽口鎮附近戦死
"	西尾勝		平岩(弟)		満州間島省
開拓	森下穂	21・3・18	平岩(弟)	全明信	

海	〃	〃	〃	〃	陸	海	〃	〃	〃	陸	〃	〃	〃	海	陸	軍属	海	〃	〃	〃	陸
迫	中	大	中	大	沖	大	六	米	六	山	常	倉	森	広	森	平	倉	大	今	上	溝
政	村	下	村	下	野	西	拾	山	拾	中	広	本	田	本	下	野	本	原	野	寺	下
行	勇	敏	英	貞	敏	武	忠	静	正	泰	茂	幸	睦	幸	米	三	貞	末	寿	静	洋
20	19	12	17	19	19	20	19	13	20	21	20	19	19	19	20	16	20	21	20	15	20
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
4	10	9	9	8	6	7	11	4	6	2	2	10	10	12	10	11	4	11	8	1	8
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
16	16	26	13	21	11	24	13	7	3	15	25	25	1	30	3	30	1	15	22	1	20
上中(妻)		利松()	吾市(弟)	神原()	神原(父)	神原(兄)	中講(妻)	中講(弟)	中講(母)	中講(弟)	下講出身	下講(兄)	下講(母)	下講(弟)	平岩(兄)	平岩出身	平岩(妻)	平岩(義姉)	平岩(母)	平岩(母)	平岩()
全シナヨ		全敏之	全正見	全勝	全重男	全至	全トシエ	全徳敬	全マスマ	全明夫	全静雄	全シゲノ	全維夫	全明信		全八千代	全かわ代	全チエノ	全モモヨ	全栄	全栄
比島ルソン島戦死	ニューギニア島	山西省平型関口	江蘇省上海	仏印カムラム湾戦死	湖北省江陵県戦死	本州西部方面戦死	台湾花蓮港陸軍病院	江蘇省郡県	比島ルソン島戦死	ソ連カザクスタン収容所戦病死	スマトラ東方海岸	比島レイテ海戦戦死	ニューギニア島戦死	比島戦死	宮崎県都城陸軍病院	海南島海軍病院	比島ボンガオ島戦死	朝鮮或鏡北道病院	武昌兵站病院	広西省南寧県戦死	広島原爆死

軍属	陸	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	陸	海	〃	〃	〃	陸	軍属		
川本	胡山	平岡	小川	有井	岡野	榎田	坂井	増崎	山田	畠田	加古川	加古川	国田	香川	竹野	原	香川	久保田	岡島	丸山	若崎
猛	由行	要	秀光	賢治	雄	武夫	俊雄	吾郎	秀雄	勲三	勇	京市	幸	夫	静雄	宏	親	義之	久嗣	一喜	隆
19・6・24	13・5・30	22・12・24	20・5・20	20・12・10	20・4・7	19・4・11	21・7・21	19・12・31	20・5・25	18・8・6	17・2・14	19・11・8	20・8・18	20・7・17	13・5・22	19・7・16	19・4・20	19・7・12	13・4・25	20・4・13	
上中(弟)	上中出身	上中(長男)	下中出身広島市(妹)	下中(兄)	下中(甥)	下中出身	下中()	笹利(甥)	笹利(弟)	笹利(甥)	笹利(義姉)	笹利(長男)	笹利出身	上沖(弟)	上沖(妻)	上沖	上沖	上沖(弟)	上沖(義姉)	下沖(妹)	下沖()
全政直	全則之	玉藤ヨシエ	全秋人	全稔	向地清	全義典	全鈴雄	全只之	全光子	全辰男	全孝	全つたえ					全晃	全スエ子	全小夜子	上梶栄	
比島ミンダナオ島戦死	山西省碑山県	在郷死	ブーゲンビル島方面戦死	ソ連カタラ収容所戦病死	西部太平洋方面戦死	病院船高砂丸	南洋パラオ諸島戦死	ケイ諸島陸軍病院	ソロモン群島方面戦死	馬來シンガポール戦死	ビルマ戦死	安徽省宿果芦橋戦死	山西省繁峙県	南洋ラバール戦死	南太平洋戦死	江蘇省戦死	ルソン島マンチワン州				

海	〃	〃	〃	陸	海	陸	海	〃	〃	〃	〃	陸
伊藤良之	大下貫仁	道添巧	尾形政美	本田正則	谷本逸司	紙野武雄	尾形正美	本田春夫	上梶鶴人	山崎鶴稔	増田稔	西本積
20 10 28	20 3 17	20 8 16	15 5 4	15 11 13	20 5 4	20 10 29	20 6 10	20 9 9	13 4 6	20 7 1	17 11 14	20 8 6
		湯戸	湯戸(甥)	湯戸(一)	湯戸出身	湯戸(一)	湯戸(祖母)	湯戸(兄)	下沖(弟)	下沖(弟)	下沖	下沖(弟)
		全キクノ	全孝	全一馬		増崎巧	全タマノ	全俊彦	全栄	全泉		全巧
岩国陸軍病院	山西省戦死	山西省氷濟県	湖北省随県戦死	仏印インド支那カオロウ州		満州	日本海方面戦死	宇品陸軍病院	江蘇省大石渠戦死	ニューギニア島方面戦死	ソロモン航海中戦死	広島市原爆死

海	〃	〃	〃	陸	海	陸	〃	海	陸	〃	海	〃	陸	海	陸	〃	陸	海	〃	〃	陸
大	広	小	新	倉	新	三	森	角	細	倉	国	山	倉	六	香	岡	大	白	大	大	白
下	本	口	内	本	内	本	屋		末	本	成	根	本	拾	川		西	井	下	下	井
	維	健	敏	敏	義	倉				静	昭	孝	国		福	忠		綾			
進	夫	男	毅	明	明	三	儔	勲	豊	雄	義	門	夫	亨	登	彦	正	雄	勉	勝	正
上	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	下	〃	〃	〃	〃	中	〃	〃	〃	〃	〃	神
中										講					講						原
二	二	一	三	三	三	一	一	六	九	一	二		四	五	一		九	五	四	二	
五	四	五	五	八	〇	〇	四	二	〇	七	一		二	八	六		六	七	〇	四	
三			一										一								

(有) (有)

〃	〃	陸	海	陸	海	陸	海	〃	陸	海	〃	陸	海	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	陸
岡	有	向	奥	加	中	大	川	免	西	森	宮	梶	宮	倉	杉	迫	西	中	佐	岡	中
野	井	地	田	藤	田	下	本	出	村	山	本	川	下	本	田	久	本	島	伯	田	島
鉄	秋		三	盛	二	虎			俊	山	将	脩			義	サ	房		繁	幸	
雄	人	清	郎	雄	稔	務	夫	明	三	勇	幸	三	登	剛	男	一	雄	漸	男	夫	轟
〃	〃	〃	〃	下	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	上
二	一	二	三	五	一	一	一	一	三	七	一		一	一		一	四	四	五	七	七
〇	六	七	一	三	四	〇		〇	八	七	七	四	一	一	〇	六	六	五	一	六	二
〃	〃	〃	〃	中	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	中

(有) (有)

海 “ ” 陸

玉 清 玉 新

貞 谷 貞 宅

球 正

勉 定 瑠 治

“ ” ” 下
沖

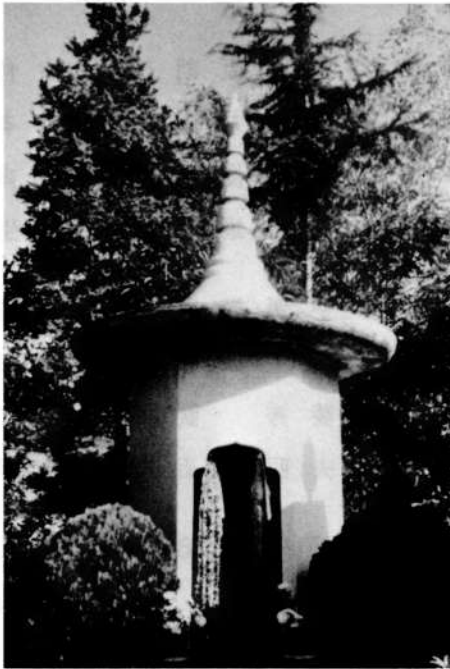
四 三 一
九 六 一 六
〇

(有) (有)

戦没者慰霊碑

石内地区の平岩にある浄土真宗本願寺派浄土寺の鐘樓門を入ると、右側にお経堂と並んで、六角形の形をした丸い塔が、小じんまりと建っている。

石内地区の明治以来の戦没者（原爆で被爆死した学徒も含む）の慰霊塔である。昭和三十年三月、石内村が河内、八幡、観音、五日市の五か町村が合併した時、合併記念として村費三十万円を以て、建設されたものである。



慰 霊 塔 (浄土寺)

合祀してある英霊は、明治大正戦役関係が十一柱、昭和戦

役関係が七十六柱、原爆で死没された四十柱である。

一、明治大正戦役関係（順序不同）

前田 庄太郎	大下 源太郎	川本 蔵太郎
田中 実雄	久保 佐一	石田 長次郎
小井出保太郎	道上 亀太郎	広本 新太郎
兼国 寿登	津江 新一	

二、昭和戦役関係（順序不同）

(一) (戦死及戦病死) (委細は平和の塔の項参照)

今野 寿見	伊藤 良之	六拾部 正昭
六拾部 忠夫	畠 薫三	原 宏
西本 積	本田 正則	西尾 勝
本田 正美	大下 敏雄	尾形 孟
尾形 政美	沖野 敏	岡島 久嗣
大原 謙一	岡野 静雄	大西 武
大原 末男	大下 貞美	小川 秀光
大下 貫仁	渡部 正一	若崎 隆
川原 利人	加古川 勇	川本 猛
加古川 京一	紙野 武雄	香川 静夫
香川 親	竹野 静雄	玉原 静積
田中 誠軌	常広 茂	中村 美之
中住 優	中野 正人	中村 勇
上梶 春夫	上寺 静男	上田 静登

(二)原爆関係(順序不同)

鈴木幸子	中野須磨子	厚木チエ子	藤本佳子	上田弘	柳慶次郎	新内スミ子	淋蒔アキノ	椎木幸枝	米山静男	森下稔	広本信幸	平野三雄	溝下洋太	坂井俊雄	胡山由行	松田矩夫	山中泰男	山崎鶴人	倉本貞生	久保田義之
大下英子	久保田義夫	岡田満津代	井出良江	上田寿子	迫シゲ子	池之子肇	田村芳法	空直美	角田義之	森下三	平田斐夫	新宅秀明	道添巧	有井賢治	榎田武夫	前田繁登	山崎繁之	国田文幸	倉本幸雄	
柳アヤメ	岡田一夫	厚木基緒	竹野正樹	柳正則	上田喜一	迫ユキノ	麻生良之	倉本敏枝	谷本逸司	森田睦治	平岡寿美	平岡正明	溝下政行	迫田稔	増田五郎	増田秀雄	山田一喜	丸山喜	九鬼勲	

中原ヨシエ
豊原ユキ
大原峯子
平崎実夫
田村節雄

小野誠一
豊原文子
築山幸一
田村アキノ

小野美保子
安畑準太郎
植村友一
田村和子

出征兵士の手記

私の軍隊生活

岡田 幸夫

徴兵検査から出征まで

(一)支那事変と徴兵検査

昭和十二年七月七日、蘆溝橋畔で発した支那事変は、いよいよ拡大し日中戦争となり、我が軍は連戦連勝遂に北京、天津等主要都市を占領し、首都南京も攻略した。

然し排日抗日を称える蔣政権は、徹底抗戦の姿勢を崩してはいなかった。東洋平和を願い八紘一字の楽土建設を国策としている我が国は、国民精神総動員と称し、戦時態勢の確立に力を尽していた。

漢口は陥落したが、戦いは今後何年続くか解らない非常時の昭和十二年四月二十七日午前六時から五日市小学校で行われた徴兵検査で、僕は第一乙合格となった。

甲種合格は、空、福田、太下、森山、西本、岡野、久保田（七名）

第一乙種は、常広、前田、志茂、吉田、尾形と僕（六名）

第二乙種は、若崎（一名）

丙種は、六拾部、森京、新宅（三名）

その時、検査官から「君は青年学校にもよく出席し、学科の成績も良いが少し体重が少なく、目が悪いのが残念だ」と言われた。

(二)現役兵証書来る

時局が非常なので、「第一乙・第二乙の合格者は補充として現役よりも早く入営するらしい。多分来年の三月頃になるかも知れない」という噂がもっぱらであった。

勿論僕も入隊は覚悟していたが、十月二十九日丁度雨降りの日、役場から兵隊に出られる心得を持って来たという。見れば現役兵証書である。今年甲種も第一乙も全部現役編入となり、来年一月と五月に分れて入営することになり、僕は一月十日に入営することになっている。

僕は同じ入営するなら現役がよい。今は戦時中なので二年の満期で帰れるか分らない。同じ二年三年と居るのなら下士官志願しようか等いろ／＼考えていた。

又僕は今まで余り体が丈夫でない。病気になるねばよいが、軍人として戦死は本望であるが病死では面目ない等とり越し苦労もした。

(三)父母の恩

この世に生を享けてから早くも二十年。その間父母や祖母から受けたご恩は筆舌で表せない。何一つ恩返しもせず入営（或は戦死するかも知らない）するのが申し訳なく、たゞ

「有難うございました」という以外言葉を知らない。

昔から「忠即ち孝」ということを聞いている。この上は入営したなら一生懸命軍務に精励し、祖国のため奉公の誠を捧げることが何よりの孝行であると覚悟する。

ほんとに長い間お世話になりました。お父さんお母さん、それにお爺さん、今はなきお婆さん。幸夫は心から感謝申し上げ喜んで戦地に赴きます。と家を後にした。

当時入営してつらいのは誰も同じことで、古参兵にしごかれて……苦しいと聞いていたが、僕が一番心配したのは訓練よりも内務班のことだった。

特に明治十五年、明治天皇のより賜りたる「軍人勅諭」の暗誦のことであつたが、先輩よりの注意で一生懸命に練習していたので、入営後大変楽をした。又青年学校で軍事訓練を真面目に受けていたので、初年兵教育もそれ程苦勞しなかつた。

四出征

原村の検閲も無事に終り、外出が許可されるようになり、一日の帰宅が許されるといよ／＼出征である。

西練兵場に完全武装して整列を終り、聯隊長の訓示を受けた後、市中行進して宇品港に到着し、休憩中家族や知人と最後の別れを惜しみ、小舟で輸送船に乗り込んだ。家族の姿が見えなくなるまで手を振る。やがて輸送船は出航し、関門海

峽を通過すると祖国は遠のく。

船内は初年兵同志の気安さから、外見は誰一人として悲壮な姿をした者はいないようだった。

「戦地で弾の当るのは運の悪い者よ。俺は大丈夫だろう」「生きて帰ってくるまで祖国よさようなら」の心境のように見えた。

戦場でのこぼれ話

(一)まぼろしの決死隊

昭和十六年十一月、僕達第五師団の将兵を乗せた輸送船は、太平洋上を一路南下していた。船内は日一日と暑さが増し、全員に夏衣袴が支給され、冬物は全部返納した。

我々がマレーに向うことを知ったのは、海南島三亜港に集結してからのことである。

そんな或る日、歩兵聯隊の第三大隊（市川正少佐）を主力とする決死隊が結成され、我が歩兵砲中隊の第一小隊も参加することになり、僕は第一分隊長として砲一門持つて参加した。

そして第二五軍参謀辻中佐から作戦の目的と要領が示された。

「諸君、日本は大東亜共栄圏を守り、自存自衛のため止むな

く米英と宣戦が布告される。そこで我が軍は宣戦布告の日に、泰国シンゴラに上陸し、マレー、シンガポールを占領せんとする。マレー作戦で一番困ることはペラツ河にかゝる橋梁を敵に破壊されることである。

若しこの橋が破壊されると、我が軍が上陸しても進撃できなくなり大変な痛手を受ける。そこで諸君は泰国兵に変装し、泰国兵の軍帽と軍服を来て泰兵に変装し、橋が破壊されないよう橋を確守し、本隊の上陸進行を容易にするよう決死の覚悟で努力せよとのことだった。

しかし、いよ／＼上陸地点に来てみると、現地の泰国兵が発砲し交戦状態となったので、折角の決死の計画は水泡に帰し挫折してしまった。

師団が敵の攻撃を排して、ペラツの橋梁まで進出出来たのは、上陸後二十日余り経った一月二日であった。若し計画通り僕達が上陸を決行していたら文字通り全員が死んでいたと思う。

(二)天皇陛下万才

マレー作戦はシンガポールの占領を以てその目的が達せられる。昭和十七年一月末、ジョホールバルを攻略して、目的のシンガポール島が眼前に見える。

一週間の敵状視察と戦準備を終え、いよ／＼敵前上陸が開始された。闇夜の海に小銃中隊を乗せた舟艇が、砲兵の援

護射撃を受けながら進発して行く。やがて我が分隊も舟に乗り海上に出る。敵弾が前後左右に飛来する。

やつのことで細い栈橋を見つけ接岸上陸し、敵の砲撃の中を、伏せを繰り返しながら約二百米進んだ時、激しい集中砲火を受ける。「天野がやられた」との部下の声。夢中で近より、「衛生兵来い」と呼ぶと徳川衛生兵と、藤井上等兵が来てくれた。

大急ぎで応急手当をする。その時敵陣より又発射音、思わず三人で天野を包むように伏せた瞬間、一米位の所に敵弾落下、頭から土砂を被った時「天皇陛下万才」と叫んだ「藤井しっかりせい」と背中に手を廻してみると、肩の後に拳の入る程の穴があき肉がない。「天皇陛下万才」「南無阿弥陀仏」と交互に称える声が、だん／＼細くなり遂に息が絶えた。

僕は彼の右腕を切断して、三角巾に包み首に吊して前進した。

終戦から帰還

(一)臺北に転進

シンガポール陥落後、マレー半島の警備に当たっていた第五師団は、昭和十七年八月、待望の部隊復員命令が発令され内地に帰れると喜んでいたが、残念にも十一月になって中止と

なり、豪北に転進することになった。十八年一月シンガポールを出帆し、ジャワ島アンボン島を経由してニューギニア島カイマナに上陸、そこで輸送船から舟艇に替え、ケクワ迄進出した。

こゝで私達十三年現役兵は内地帰還命令を命ぜられたが、下士官候補として入隊した私と栄井、中野の三名は中隊に残ることになった。この時はさすがに淋しかった。

(二)病院船桶丸事件

昭和二十年に入ると戦況はいよゝゝ悪化し、二月は硫黄島が守備隊二万余が玉砕し、三月には米29による東京大空襲があり、六月には三か月の死斗の末沖繩が占領されたが、第五師団の警備するニューギニアや豪北諸島には敵機による空襲は殆んどなかった。

昭和二十年八月一日、第十一聯隊主力一、五六二名はひそかにケイ諸島ズラに集結し、全員白衣を着用して病院船(桶丸)に乗船されたのである。武器、弾薬も梱包して赤十字のマークをつけて、搭載し豪北より脱出を図ったが、翌日発見され敵艦に停戦を命ぜられて、立入検査の結果、武器は発見されそのまゝ拿捕され、モルクレ基地に連行された。

佐々木聯隊長は軍旗と共に、飛行機で先行されていたが憔悴され終戦と共に軍旗を焼却後死没された。尚師団参謀長と師団長も責任を感じて自害されたという。

運命のいたずらか同じ十一聯隊でありながら、我々は歩兵砲中隊で大きな砲を持っていた関係で、残留していたので捕虜にならずにすんだのである。

(三)終戦

昭和二十年八月十六日、通信隊の曹長が「岡田曹長外電がしきりに日本が降服したと報じているぞ。日本は敗けたらしい」と話してくれる。まさかと思つて中隊長に聞いてみると「大隊長に聞いてみろ」と無言で出て行かれる。間もなく大隊長に呼び出され「人事係がそんな流言を流してどうする。日本が敗けるものか」と叱られた。

下士官兵には知らされなかったが、上級の将校は知っていたのか分らないが、空襲はびたりと止み、現住民の態度が変り、毎夜大火を焚いて踊ったり唄ったりするようになり、自然に敗戦ということが分った。

当時の兵士は、勝った敗けたよりも「早く戦争が終つて日本に帰りたい」というのが偽らざる気持であつたと思う。

ケイ諸島附近の部隊は、ケイヅラ島に集結し隣の島に進出した豪軍司令官の命により、自主的に武装解除し我が部隊は歩兵第四十二聯隊(吉川大佐)に編入され、特設第四大隊十三中隊となつた。

(四)帰還

小さな島に約一、二〇〇人の部隊が集結したため、食糧確

我が人生の一頁

下沖 久保田 正平

曾て帝国海軍の一員として、護国に裨益するを信念に、情熱と身命を故国に捧げて、真摯奮励した若き日の一頁を記す。

大東亜戦争の真只中、当時航空母艦「準鷹」の乗組の一員であつた私は、昭和十七年五月二十日、第二機動部隊に編入。アリューション作戦に従事、第二艦隊司令長官南雲中将指揮下北方アリューション群島方面作戦（敵前上陸作戦）に出陣した。

六月とはいえ、北海の荒天と寒さで艦内は極度に温度が下り、夜昼とも防寒服でも寒く、寝られぬ毎日が続いた。

六月三日、夜明け艦内に非常呼集が鳴り渡り、一同戦斗配置についた。すると我が方艦隊上空に爆音が聞こえ、直ちに艦砲射撃が約一時間余り、敵機が一機二機と撃ち落されるのが目の前に見えた。

七月五日、アリューション群島に近づくや夜明け前に、機動部隊全艦戦斗配置につく。

海上は濃霧で視界はきかず悪天候の中、続々と友軍機の発艦するのを見送る。一方では上陸用艦艇が一せいにアッツ・キスカ島に前進、約半日くらいかゝつた。

我々日本軍は損傷なく、無血占領に成功した。敵方は艦艇及び戦斗機等ほとんど全滅に近い損傷であつた。

時に六月五日、午後すべての戦斗は終了し帰艦の途についた。

全艦隊の全員に次の感状があつた。

感 状

昭和十七年六月「アリューション」群島方面作戦に於て、濃霧を冒し悪天候に耐え、長駆「ダッチハーバー」を、反覆攻撃し所在の敵艦船飛行機の一部を撃破し、軍施設を潰滅したるは、尔後の作戦に寄与する所極めて大にして、其の功績顕著なりと認む。仍て茲に感状を授与す。

昭和十八年三月十五日

連合艦隊司令長官 山本五十六

その後、我々第二艦隊機動部隊は、北方より南方作戦に移動するよう命令があり、八月二十四日、第二次ソロモン海戦に参加した。

米側は、サラトガ、エンタープライズ。

日本側は、空母翔鶴、瑞鶴、瑞鳳、飛鷹、準鷹、竜驤の各空母が対決した。

十月初め我が第二航空戦隊は、ラバウルに本部を置き、ソロモン群島のブカ島に第一線基地を置いて戦うこととなつた。

彼の有名なブインで山本五十六大將が機上で、壮烈な戦死を遂げられた想い出深い地の対岸である。そのブカ島での我等陸戦隊の作業である。昼の中に何も彼も準備怠りなく作業を終り、夕方近くなると敵の爆撃機が来るのを、待機して応戦するのである。

我々主計科員は兵科は勿論、航空兵等の食事支給に当る者も、昼仕事が終り夕方からは、一切火や煙は出せない黎明爆撃の連続であつた。ブカ島より僚機が発進すれば、直ちに米軍機が一万米の上空から爆弾投下、また低空からの機銃射撃の連続である。

塹壕内に居れば、五十米間隔で爆弾が投下され、戦場とはいへ生きた気がしない。

流石に物量に誇る米軍の攻撃には耐えられない塹壕内で爆弾の直撃を受け多数の戦友が戦死した。

必勝を信じ、戦っているものゝ何かしら米軍の方が、戦力が優位にあるのではないかと不安な気持になつたのも事実であつた。

十月末頃より米軍は、優秀なレーダーを開発し、実戦に使用し始めてからは、昼夜を分たず盛んに攻撃を繰り返し、命

中率も一段と高くなり、海上艦艇よりの艦砲射撃が激しくなりそのため、飛行機や飛行場の被害も甚大で、第一線基地としての役目が果たせない状態になつてしまつた。

そこで十一月末か十二月初めに、第二航空戦隊司令部より撤退命令が出され、前線基地隊長以下九百人余は引揚げ準備に取りかゝつた。

引揚船は商船を改造した「清澄丸」という船で機銃が四基あるだけの無防備の商船である。

二日間の準備を終え、みんな秘密裡に乗船し、暗夜にまぎれて出港した。ところが途中夜半、米軍機ロッキード五機が飛来し、襲撃にあひ清澄丸は機銃弾が多く命中し、多数の負傷者が出た。清澄丸は必死の蛇行作戦を繰り返し、撃沈寸前のところを幸いに駆逐艦の急援によって救われ、命からがらトラック島に引き揚げた。

九死に一生を得て

下講 倉本 静雄

私は昭和十三年一月十日、郷土の皆さんの歓呼の旗に送られ、現役兵として呉海兵団に入団、五か月のきびしい教育を受けて、巡洋艦「鬼怒」の乗組員を命ぜられ艦隊訓練に出港した。

日中戦争の最中であり、国際情勢も緊迫していたので、我々は一朝有事に備えて、月月火水木金の訓練に励んでいた。昭和十四年二月十日、我々艦艇は台湾の高雄に集結した。陸軍兵士十数万が南支バイアス湾に敵前上陸するのを、護衛し援護するためであった。

武装した十数万の大軍を数百隻の商船で、輸送するのであるが、威風動々と二列縦隊で乗船し、出港する姿はさすがに帝国陸海軍健在なりとの感を深くした。

いよいよバイアス湾に侵入し、我が軍の援護射撃のもとに、敵前上陸を敢行し敵の陸上砲台を爆破して、私も陸戦隊員として陸軍兵と共に、敵前上陸を無血でなし遂げ、以後の作戦を有利に展開させた。

昭和十四年四月には、第十四期普通科砲術練習生として、横須賀砲術学校で半年の訓練を終え、その年の十月、水上機

母艦千代田に乘組みを命ぜられた。

時局が急変し、昭和十六年日米の暗雲が漂う頃、我々は柱島付近にいたが我々の船を母艦として、秘密裡に特別任務を受けてきびしい訓練をしていたのが、あの緒戦真珠湾攻撃をした特殊潜攻艇の連中であつた。

それから数か月経ってから、我々は日本海軍の総力戦であつたミッドウエー作戦に参加した。

この戦いで我海軍は、加賀、赤城等の主力母艦を失ない、飛び立つた飛行機は帰る母艦もなく、この戦いで制海、制空権を完全に米国に奪われ戦力は全く逆転した。

我々の艦千代田は後方にいたので、被害は少なかった。その後我々は北方作戦に参加することになり、水上戦闘機を載んで北方キスカ島に向つた。

七月というのに北極に近いキスカはさすがに寒く、特に夜になると寒さが身に沁みた。駆逐艦三隻と千代田とが夜中の一時頃、湾内に侵入したのであるが、敵の知る所となり、激しい魚雷の攻撃を受け、陸地五十米の所で駆逐艦二隻は沈没してしまつた。

乗組員は海中に飛び込んで、泳いで陸地に向つたが零下一〇度の海水であつたので、誰一人として海面に姿を見せた者はいなかつた。

この時も、我々は運よく命を捨てることなく助かつた。

昭和十七年十月、南洋トラック島で長い間乗っていた千代田を退艦し、横須賀砲術学校第十期高等科砲術（測的班）練習生として入校した。昭和十八年五月、同校を卒業後、駆逐艦「夕霧」に乘組み、白山丸にてトラック島に乘艦トップにある測巨手として勤務していた。

昭和十八年十二月一日、ニューギニア方面に、陸軍兵士を輸送する任務に着いた。往きは約六〇〇名の陸軍兵を夜間に乗じて送り込み、復りは病人や工員四〇〇〇人を乗せて帰る予定である。

予定通り午後ラバウルを出港し、駆逐艦三隻で湾内に入港、兵士を下船させ、病人を乗船させ直ちに大急ぎで出港。

湾外に出たと思ったらさあ大変、左右より待ち受けたように艦砲射撃だ。蛇行運転すること約一時間、命からがら逃げ帰った時、艦長命令で敵艦に接近、魚雷九本を一度に発射した所、敵の巡洋艦に三発命中し、敵艦は真つ二つに折れて爆沈した。

歓声をあげたのも束の間、それからが大変になった。敵は総反撃に移って来た。物量にものをいわせて攻めて来る。我々は「三十六計逃げるにしかず」で逃げ出したが、一番先に敵弾が我が艦の後部爆雷庫に命中し火災が発生、敵弾の命中率も次第に正確となり、次々と弾丸が我が艦に当り今度は釜室に命中したので、蒸気が吹き出し艦は動かなくなった。危

険を感じた艦長は、総員退避の命令を出した。

トップの測的室より船橋に下りて見ると、艦長は負傷していたが「自分は艦と運命を共にする」と言つて船橋から動かなかった。

船橋より甲板に下りて見ると、足の踏み場もない程戦死者で一ぱいである。艦が半分ぐらい沈んだ時、私は運を天に任せて海に飛び込んだ。我々の乗っていた艦は数分後、海中へ姿を消した。

南方とはいえ朝方は非常に寒く、泳ぐのに体が思うように凍えて泳げない。陽が高くなると次第に暖くなって来た。

何時間か泳いでいると、二米余りの角材が浮いているのを見つけ、それにつかまって八人が命を細々とつないでいるのを恐ろしいことには二米余りの鯨がウヨ／＼と泳いでいるではないか。

負傷して血を流していた二人の戦友は、遂に鯨に生きながら食べられた。傍で見ていた我々は生きた気はしない。

それに敵の飛行機が何度か低空飛行して、機銃掃射をするので、その都度海中にもぐり難をのがれた。

空腹になると艦に積んでいた南瓜やきうりが海上に流れていたのをそれを拾って食べ飢をしのいだ。

死線をさまようこと丸一日我々は一応死を覚悟していたが、有難いことには夕方になって、我が国の潜水艦が助けに

来てくれ、やっと艦上の人となり、潜水二〇米で帰途に着いたが、敵の爆雷攻撃が激しく、余りに爆音がひどいので、頭に一斗罐をかぶされ外から叩かれるような感じがした。

この輸送の任務に着いた我が軍は陸海合せて約八〇〇名であつたが、生存者は僅か一二名であつた。

その後ラバウル八一警備隊員となり、数日後東飛行場横の高台にある砲台の測的手として入隊、戦闘配置は高い櫓の上にある測巨機である。東飛行場は戦闘機隊で毎日敵のB 29が三〇機五〇機と、空襲を繰り返す。その度毎に二、三発は命中し被害を受けた。

或る日、私の配置の櫓の真下に爆弾が落下し、地煙と土砂が吹き上げた時は、もう駄目だと思つたが幸い手に軽い負傷をしただけで助かつたが、この時四名の戦友が戦死した。

もうこの頃になると、日本本土からの弾丸や軍需物資の補給が全く無くなり、戦闘能力のない集団となり、弾丸も少なくなつたので発砲中止となり防空壕を造り空襲に備えながら、昼は畑へ出て農作業をするようになった。

或る日、畑に出て農作業していると敵機の空襲を受け、「早く逃げろ」と言つて弾薬庫に飛び込み又通路に飛び込むと同時に、爆弾の直撃を受け六名の戦友が戦死した。

私は幸にもこの度も運よく助かつたが、一週間余り耳が全

く聞こえぬようになった。

その後度々の作戦に参加したが、神仏の加護か幸いに命ながらえ終戦を迎え、昭和二十一年五月十日、名古屋復員局に帰り、九年数か月ぶりに懐しい故郷に帰つたのである。

私の従軍歴

下沖 山崎 幸人

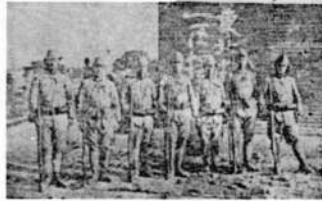
大阪
朝日
廣島版

魯南作戦の花・決死隊九勇士

急坂を攀ぢ上り

苦闘實に五時間

お、つひに輝く日旗



昭和十三年六月二十七日付の朝日新聞に「魯南作戦の花・決死隊九勇士」【〇〇にて秋武特派員発】高さ三百メートルの絶壁にも近き急坂の岩山を、手榴弾の雨と戦ひながらよち登り、苦闘実に五時間の末遂に山頂の敵五百を撃退した、魯南作戦の花と謳われた決死隊九名の奮戦物語である。

我が第五師団第十一聯隊の平野部隊は、敵の前線據点たる沂水を衝くため七日午前五時半頃、辛店南方の三岔店の山岳地帯を進撃中であつた。

突然三百米の山頂にかくれていた敵約五百が、迫撃砲、小銃で猛射を浴びせて来た。我が方も直ちに応戦したが地の利が悪い。敵は有利な地形を利用して周囲の山から適確な射撃を浴びせて来る。

我が方には弾薬も少なく地の利が悪いので、肉弾突撃の肚を決めた平野隊長は決死隊を募つた。

そして決死隊長に松崎軍曹、隊員に上等兵二名（内一人が山崎幸人）一等兵六名の計九人が選ばれた。

午前六時過ぎ平野部隊長の訓示を受け、悲壮な決意のもとに出発したが、山には遮へい物となる樹木もなく、峨々たる岩山で山頂からは猛射を浴びせて来る。

九名の決死隊は四方から集中する弾丸を右に左に、僅かに岩蔭に身を隠しながら蟻が壁を這うように登って行く。筆舌につきぬ苦斗の後漸く山頂に近づけば、あせり出した敵は死物狂いで、手榴弾を投げ出した。

死斗五時間余、遂に鬼神の如き剛胆さを以て、山頂に達した。度胆を抜かれた敵は算を乱して潰走、かくて午前十一時山頂に感激の日章旗を掲げたのである。

一方決死隊の安否を氣遣つて、山の中腹まで登つて来た水

延中尉（広島市尾長出身）指揮の戦友が続いて山頂に達し、潰走する敵に向って猛射を浴びせた。

敵は二百米後方の突角に陣を構築し、第一陣地を奪還する逆襲を企て、彼我对陣したまゝ夜に入り、我が軍は夜襲を敢行し一斉に突入、ひるむ敵を追い落し、敵陣を完全に占拠したが、この戦斗で先頭に立って進んだ松崎軍曹は敵陣占領の一步前で、無念敵弾に胸部を命中され、どっと倒れながら二、三步よじ登り、敵陣占領の発火信号を見たのち莞尔として息をひきとったのであった。

(注)（以上は昭和十三年六月二十七日朝日新聞掲載のままである）

私は昭和十一年一月十日、現役兵として広島歩兵十一聯隊に入営。当時は現役は満二か年であるが、青年学校を卒業し成績のよい者は、一年半で除隊となっていたので、翌十二年七月には除隊になると心待ちにしていた。

ところが日中戦争が始まり除隊延期となり、昭和十二年八月一日、多くの人に見送られ宇品港を出港し、中国大陸に向かった。

釜山、奉天、山海関、天津を経て豊台まで進攻して行った。豊台から八達嶺への戦斗は、激戦で三日間の攻防を繰り返した。我々としては始めての戦斗で大変な損害を被った。

即ち我が中隊は中隊長以下戦死者、負傷者が続出し、約五百名余りの中隊の中残ったのは、寺尾曹長以下約一個小隊五十名くらいであった。それから保定の攻略、石家荘の戦斗に参加し、中国の中心都市北京へ入城した。

戦線は次第に拡大して、広い荒野を踏み分けて張家口、大同と大きな街を攻略入城して、遂に十一月大原の攻略戦となった。

大原は中支に於ける軍事、政治、経済等の重要な位置にあったので大軍を擁し防備怠りなかったので、戦斗も大変激しかった。

我が軍は第五師団が中心となり、攻撃したのであるが攻防常なく、攻めたかと思うと又押し返され、奪取したかと思うと又奪い返され、大変な犠牲を払って、大原を占領した時は我が軍の犠牲者も多く心から万才を叫び喜んだものである。

大原を占領すると今度は、済南、通加、青島へと、毎日十二、三里（約五十軒）を行軍するのである。完全武装しているので背中に十kg以上の背囊^{セサカ}を背負って、険しい山岳地帯や広大な平原地帯を歩くには聊か疲労した。

昭和十三年四月には有名な徐州作戦に参加した。「徐州徐州と人馬は進む、徐州いよいよか、住みよいか。しゃれた文句に振り返りや、お国訛のおけさ節、ヒゲが微笑む、麦畑」歌では如何にものんびりしたような感じがするが、戦斗は

苦しくはげしい戦斗が続いた。敵弾が雨あられのように飛んで来るが、ヒューヒューと耳をかすめて後方に飛ぶのは安全なのだが、自分の前に飛んで落ちるのが恐ろしいのである。

敵と対峙して撃ち合っている時の人間の心理は、正気の沙汰でなく狂気のようなものである。二、三か月の攻防の結果やっと徐州を占領したが我が方の被害も甚大であった。

この付近の戦斗で、石内出身の丸山一喜君や、竹野静雄君、上梶春夫君等が戦死された。丸山一喜君とは同じ部隊ではなかったが、偶然にこの戦斗で出会いお互に無事を喜び合ったのであるが、その翌日名誉の戦死を遂げられたということである。

徐州を占領した後平野部隊の戦死者が多かったので、その遺骨を内地へ帰還させることになり、私と他に二人計三人で数十人の戦友の遺骨を胸に懐しい日本へ一時帰った。

内地に帰って、部隊葬、石内へ帰って村葬に参列し、戦友の冥福を祈った。

折角故国に帰ったのに息つく間もなく、又原隊にとんぼ返りで復帰した所、昭和十三年六月、ノモンハン事件が勃発したので、急拠支援することになり、海路大連に上陸し、奉天を通過して、チムハルに到着した時、戦斗が終結し遂に直接戦争に参加しませんでした。

しかしこの戦いは、我が日本軍は大敗し多大な被害を受け

たのであった。その後我々は大連で輸送部隊として勤務し、バイアス湾上陸に参加して赫々たる戦果を挙げ、更に広東攻略へも参加した。

又南寧の戦いに参戦した時には、石内出身の中島轟君、美能進君、田中熊雄君とも出会い懐しさで一ぱいであった。

第五師団の将兵は昔から勇敢で、むつかしい大戦には必ずといってよい位、先頭きって参加し大きな武功をたてゝいることは周知の通りである。

昭和十五年三月、日米間に暗雲がただよう頃、我が軍は仏領印度に進駐することになったが、その直前昭和十年兵は内地に帰還することになった。

我々の中隊で無事に帰還した同年兵は十名で、その年の六月正式に除隊となり夢にまで見ていた石内に無事に帰り、我が家の敷居をくぐった。

除隊後ありがたいことには、私は魯南作戦で決死隊に参加した功績によって勲七等功七級金鵄勲章を受賞して感激した。

その後、銃後の一員として増産に励んでいましたが、大東亜戦争の末期昭和十九年七月、広島第二部隊に応召を受け、奄美諸島の徳之島の守備の任務についた。守備といっても武器弾薬はないので、毎日田畑に出て南瓜やいも等を作ったり、地元の人々に竹槍訓練の指導に当たっていた。

然しB 29の空襲は毎日繰り返され、時には機銃掃射も受けていた。その中終戦を迎え、昭和二十一年十一月復員したのである。

参考文献（抜すい）

敵機進入経路について

（昭和四十六年八月六日、広島役所編集、広島原爆史より抜すい）

（敵機の行動と防衛態勢） 昭和二〇年八月六日、晴、高雲少々、視程一五―二〇軒、南風二米程度、雲量一、視界三〇軒、七時九分警戒警報発令、豊後水道及び国東半島を北上、敵大型三機は広島湾西部を経て、広島県中部を旋回、七時二五分播磨灘に脱去す。

七時三一分県警戒警報解除、八時六分、松永監視しょうは大型二機西北進の敵機を発見、八時九分、松永監視しょう三機と訂正、八時一四分中野探照灯台西条方面に大型機爆音を聴取す。八時一五分西条上空B 29西へ。

広島投下の爆弾諸元（弾体の長さ三米、直径七〇㎝、重さ四、〇〇〇㍑）

被爆時の火の色は

（一九八二年七月蒼林社中野清一著 広島原爆災害のつめあとり）

○敵機三機八、〇〇〇米で、東北より広島へ進入西進し、三

個の落下傘は投下弾及び一個の爆弾を投下せり。B 29は直ちに右に旋回し、山陰方面へ離脱す。

○マグネシウム様の強い光を発し、同時に白雲発生上昇せり。

○特殊爆弾を、原子爆弾と新聞に発表されたのは、昭和二〇年八月一四日（仁科芳雄博士）でTNT爆薬二〇、〇〇〇㍑に相当と発表。

○炸裂、閃光、火球、発生同時、爆元上空五七七米と推定、大量にマグネシウムをたいたような、又炭素孤光か電車のスパークの様で、色は青白色、白色、黄赤色……市内黄赤遠くからは青白

○火球の中心温度は理論的には五、〇〇〇万度 火の球の広がった時の表面温度は、九、〇〇〇度―一、〇〇〇度で、白い雲を頂にし、赤黒い雲を中にし黄色をおびた雲を、周辺にめぐらして、五色の雲界が松茸の生えたように、又南瓜の上へ上へとのびてゆくような形態に成長して行った。

○爆風、爆心直下（細工町）から三軒―一〇軒の間で、秒速六〇〇米―八〇〇米（台風の場合は平地で最大七〇米―八〇米の風速）これは爆風というより衝撃波といえる。

衝撃波とは空気が弾性体のような性質をおびることをいう。（二軒離れた地でも大人を吹き飛ばす程の力がある）

○黒色のしゅう雨（黒い泥雨）長径一九軒、短径一一軒、少しでも雨の降った所、長径二九軒、短径一五軒といわれ、海

の魚も浮上、池の魚も浮上死多数であった。

放射能をおびた雨のため、二か月後でも胃腸障害多発、牛も草を食べて下痢、雨は二〇分から数時間続いたが、一時間後に降った所多し。

原爆日誌（被爆より終戦まで）

（昭和五七年八月一〇号アサヒグラフ原爆の記録より）

昭和二〇年八月六日、米第二〇航空師団、第二一爆撃旅団、第三一三支隊、第五〇九混成部隊所属のB 29、三機は午前一時四五分テニアン島の基地を発進した。

「エノラゲイ」なる一機が八時一分広島上空に進入、約四分後に、投下の原子爆弾第二号（第一号は実験弾）によって、広島は一瞬の間に灰じんに帰した。

○八月七日 大本営発表（午後三時三〇分）

1. 昨八月六日、広島市は敵B 29少数機の攻撃により相当の被害を生じたり。

2. 敵は右攻撃で新型爆弾を使用せるものゝ如きも、詳細は目下調査中なり。

○トルーマン大統領はラジオで「六日広島に投下した原子爆弾は、戦争に革命的な変革を与えるものである。日本が降服に応じない限り、更に他の場所にも投下されるであろう。」と放送した。これを傍受したのは七日午前一時過ぎ。

○七日午後「広島暴爆」を議題に開かれた関係閣僚会議の席上で、東郷外相は米放送の内容につき報告し、「もはやボツダム宣言を基礎に、終戦を考慮すべき好機」なる旨を提案したが、陸軍側は「調査を待つて措置すべし」と反対。

○八月八日、東郷外相は宮中地下室で天皇陛下に単独拝謁、原爆に関する米英放送につき詳細報告、天皇は原爆のような新兵器が出現した以上、速かに終戦措置を講ずるよう、首相に伝達することを命令。

内務省は新型爆弾の防御法として、一機でも油断は禁物、待避壕が有効、待避壕は覆いのあるものを選び、屋外にいる者は身体の露出部を少くせよという防空総本部談を発表。

○八月九日、ソ連参戦の報を受け、急拠最高戦争指導会議が同日朝、開催され、米国が果して今後継続的に原爆を投下するかどうかと対立していた席上、長崎へ原爆が投下されたという情報がいった。

○西部軍管区司令部発表（八月九日一四時四五分）

1. 八月九日午前十一時頃敵大型二機は長崎市内に進入、新型爆弾らしきものを使用せり。

2. 詳細は目下調査中なるも、被害は比較的僅少な見込み。

○八月一〇日、情報局総裁は午後四時三〇分談話を発表。

敵米英は最近に発明せる新型爆弾を使用して、人類歴史上かつてみざる残虐無道な惨害を、無この老幼婦女子に

与えるに至った。

同日の陸軍大臣布告「全將兵に告ぐ。断固神州護持の聖戦を戦い抜かんのみ、断じて戦うところ死中自ら活あるを信ず…。」

○八月十一日、原子爆弾被爆地へ派遣されていた、技術院松前博士等の報告は、広島の新製爆弾を、ウラニウム爆弾なることを確認した。

しかし軍は原子爆弾という言葉の発表に反対し続けた。

○八月十二日、連合国側の回答を十二時四五分桑港放送で傍受、東郷外相は受諾を決意した。梅津参謀総長、豊田軍令部総長は八時二〇分回答文に反対の旨奏上。東郷外相、木戸内府受諾に意見一致。天皇もこれを承認された。

○八月十三日、米機の伝弾（午後五時東京に投下されたもの）

「私共は皆様に原爆投下に来たものではありません。……戦争を直ちにやめるか否かは、かかってお国の政府にあります……。」

○八月十四日、御前会議が午前十時三〇分から開かれ、天皇の意志が明確に示された。午後の会議で詔書は決定した。ポツダム宣言受諾に関する証書は、午前十一時づ

けで発布、十一時二〇分頃より玉音放送の録音が行われた。

○八月十五日、この日正午、天皇の玉音放送は無事に行われた。

「…新ニ残虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻リニ、無コヲ殺傷シ、惨害ノ及フ所真ニ測ルベカラザルニ至ル…」と続く（終戦）

日本分割統治案

（昭和六〇年一月二五日朝日新聞より）

日本分割統治案は、第二次大戦末期にアメリカ統合参謀本部内に設けられた統合戦争計画委員会で立案され、終戦の翌日昭和二〇年八月十六日に出来上がった。（J W P C三八五一一）

それによると北海道、東北がソ連。関東、中部はアメリカ。近畿がアメリカと中国。そして中国、九州がイギリスで、四国が中国という具合にそれぞれ統治。

東京はベルリン方式で、これら四か国の共同管理という内容。

しかしこの案は、米国務省の特別調査部内の「極東班」で検討され始め、日本研究の学者や元日本駐在の大使館員といった、日本通の努力によって、分割は避けるべき

だという方向で、国務省の公式意見が固った。

メンバーはクラーク大のジョージ・ブレイクスリ教授をチーフにコロンビヤ大のヒュー・ポートン助教授他であった。

必死に生きる敗戦直後

(昭和四三年九月二五日号朝日新聞社アサヒグラフより)

われらが「敗戦」を「終戦」と呼んだように、本土に到着した米軍は「占領軍」ではなく「進駐軍」と呼ばれて歓迎を受けた。銀座四丁目でも米軍の水陸両用車が見受けられた。

戦争直後の都市は、浮浪児や、パンパンが溢れ(東京有楽町ガード下)国民の多くは、戦時中から続いた食糧飢餓に悩まされて、ヤミ屋のご厄介になるか、買い出し列車のスシづめを我慢して、農村に足をはこばねばならなかった。

天皇の戦争責任を問う声は、極めて少なかったが昭和二年五月に起きた「米よこせ」デモは皇居におしかけて、飢餓の苦しみを訴えた。

昭和二〇年秋ごろから、インフレの進行があり、二三年ごろまで続いた。史上最大の超インフレ津波だった。

物価は日に日に高騰し数百倍になった。

食糧不足もひどく、二年五月飯米獲得を叫ぶデモ隊が赤旗を、ひるがえして坂下門から宮城に押し入り、この時のプラカードに「朕はタラフク食べているぞ、汝人民飢えて死ぬ。ギョメイギョジ」と書かれたのを、警官が見つけ責任者が検挙されるという、いわゆるプラカード事件が起こった。この頃は食糧配給も遅配が続ぎ、飢えをしのぐにはヤミ食糧に頼らなければならなかった。

広島、長崎で何が起ったか

(一九八二年七月岩波ブックレット飯島宗一著より)

○アメリカ合衆国政府は、開発計画に対する資金援助を決定し、一九四一年十二月六日(日本では七日)実に日米開戦の前日のことです。

その後アメリカ原爆製造チームは、三年七か月の日子をついやし、一九四五年七月、三個の原子爆弾を完成しました。(一発は実験用)

○一九四五年八月六日、午前八時十五分、広島に二発目のウラン爆弾が投下されました。そのエネルギーは高性能の通常爆薬TNTに換算して、一二・五キロトンに相当するといえます。

○熱線によるやけど、核爆発に伴って非常に強烈な熱線

が放射されるということで、爆心地では三、〇〇〇度（C）
四、〇〇〇度の高温状態が出現したと考えられます。
○太陽熱（赤外線）が数百倍から数千倍の強さで、瞬間的に作用したと同じ効果が、原子爆弾の爆発の際に現われたのです。

これは人体の表皮を焼いて炭化させ、内臓の水分を蒸発させてしまいますし、皮膚の熱傷をひきおこします。

熱傷は原爆障害による初期の高率死亡の、もっとも主要な原因であり、被爆した人に苛酷な苦痛を与えました。

○爆風による外傷、瞬間的な衝撃波を生じて、建物やその他の建造物はふつとび、人体にも直接間接に外力がはたらいて、いろいろな形の外傷が出ました。

爆心地近くの人は、この激しい爆風によって地上にたたきつけられて死亡した人や、建物の下敷きになったり、とび散ったガラス片、屋根瓦、コンクリート破片等で死亡された方、又は外傷者多数で負傷者をなやませ治療も困難でありました。

○急性放射線傷害 熱傷も外傷もそれ／＼深刻でしたが、その中最も注目すべきものは、第三のエネルギー即ち原爆放射線の傷害作用です。

○中性子線とガンマ線とが、地上と人体に影響を与え、又死の灰（放射性降下物）として落下放射線の線源にな

った。

このように二重攻めの形で、人間も動物も食物もその他もろ／＼の物質も放射線の影響をうけた。

○一籽以内 悪心、おう吐、失心、こん睡、食欲不振の症状

○二籽以内 傷を負わなかった人でも、だん／＼顔色が悪く、疲れ易く、息苦しく、活動力減少、貧血、出血、点状出血はんが現われ、発熱した。

○三籽以遠で被爆した人でも二％は脱毛現象あり。

○生体防御機能の破壊 熱傷、外傷、悪心、おう吐、発熱、下痢、血便、出血はん、脱毛、貧血などのまろ／＼の傷害が被爆者を苦しめ、あるいは死に至らしめたが、放射線に由来するもう一つの重要な急性の傷害は、白血球やリンパ球がこわされるために起きる生体防御力の脱落又は低下の現象である。

○死の同心円の図 広島の死者約十三万人（二〇年末迄）
○消えない傷あと ケロイド、原爆白内障、がん、発育障害と老化、胎内被爆（小頭症）
○巨大な死（筆舌につくし難し）

編集を終えて

石 田 秋 三

この度、広島市教育委員会から、被爆体験の継承事業として、被爆の記録を提出するようにとの要請を受けました。私ども石内地区では、予てから二度とくりかえしてはならない原爆の悲惨な状況を記録に留め、後世に残したいと考えていましたので、早速公民館の運営委員を始め、地区の各種団体の役員にお集り頂き、編集について協議しました。すると「この機会をのがしては永久にこうした記録は作れない。出版する費用は何とかするから、できるだけ具体的に当時の状況が解るようにまとめたらい」ということになり、次の通り編集委員を決めて頂きました。

そこで委員会では、当時の状況をよく知っておられる方々を、編集協力委員にお願いし、度々聞きとりの話し合いをしたり、古老を訪ねて当時のお話を聞く等して、資料集めにとりかかりました。

幸いに、石内公民館に昭和五十年頃、各戸から提出されていた被爆時の状況（特に黒い雨の調査）の記録が保存されていましたので、大変役にたちました。

原爆が投下されてから、既に四十数年も経過していますので、当時の記憶もさだかでなく、特にいろ／＼の規則や統制令、通牒等の公布の年月日等は、正確を期したのですが、資料が乏しく誤りがあるかも知れないと心配しています。

しかし時局が大きくゆれ動いて、戦争へ突入して行く時代の流れや、挙国一致して戦争遂行に協力したが、残念にも敗戦という結果を迎えた経過や、原爆の悲惨な状況が理解して頂ければ有難いと考えています。

我が国は未曾有の第二次大戦に於いて、数百万人の貴い人命を失い、国土は荒廃し、国破れて山河ありという感を深くしました。しかし幸にして、国民の努力によって今日のような豊かで、平和な生活ができるようになったのも、こうした貴い犠牲の上に築かれていることを忘れてはなりません。

戦後月日は流れて、現在戦争を知らない若い人が国民の半数以上を占めています。

しかし、何れにしても、人間が人間を殺し合う戦争が、この地球上にあつてはなりません。まして原爆の使用は人道上、絶対に許されません。

科学技術の進歩は私達人間の生活を豊かにし、便利にしますがこれを悪用すれば、核兵器となり、若しそれを使用する

と世界人類が滅亡します。

このように考えますと、原爆禁止、核爆発実験停止、核兵器廃絶という結論に達しますが、現実の世界は米ソ二大国が、互に抑止力と言いながら核の保有を続けている現状は、まことに残念なことです。

平和公園の慰霊碑の碑文「安らかに眠り下さい。過ちは繰り返しません」の言葉のように、このさゝやかな記録によって、原爆と戦争の悲惨な実状を少しでも知って頂き、再びこうした戦禍を繰り返さないよう、世界の恒久平和を祈念してやみません。

こゝに編集を終るに当り、話し合いにご参加頂いた協力員の方々や貴重な資料や、手記をお寄せ下さいました方々に心から厚くお礼申し上げます。

編集委員長

石田 秋三

編集委員

西垣内 博

同

有岡 克己

同

加古川 辰男

同

寺尾 悦記

同

田中 孝雄

同

道添 富造

同

向地 清

同石内公民館長

宮川 国雄

同五月が丘公民館長

久保田 晃

同石内公民館主事

三浦 英二

編集協力委員 (順不同)

増田 勲 空 一 衛 上田 政登 中野 予四郎 森下 政一

沖野 重男 六 広 英 夫 宮下 唯雄 木田 克人 加藤 盛雄

前田ミツギ	森京昌江	上土井ハルイ	倉本静雄	新宅秀夫	奥田等
久保田恵美子	山根ヨシ子	西尾トシコ	久保田正平	上梶栄	美能進
増田房江	岡野斐子	一本木チサ子		大西勇	平崎栄
倉本恵美子	加古川光子	迫シナヨ	岡田幸夫	西垣内稔	
	谷本君枝	奥田アヤメ	山崎幸人	山根吾作	

お礼のことば

この冊子は表題の通り、被爆前後の石内村の状況を、なるべく具体的に記述し、この地球上に再び戦争や、まして原爆投下という人類破滅の悲惨事が起こらないよう、悲願をこめて後世に伝承し、誠めの書として編集したものです。

そこで、さゝやかな冊子ですが、これを石内地区各戸に無償で配布し、子々孫々に伝えて貰いたいと考え、その経費について、石内地区環境整備推進委員会に相談致しましたところ、多額の印刷製本費の全額を快よくご出宝頂き、この度めでたく出版発行の運びとなったわけであります。

ここに謹んで、石内地区環境整備推進委員会に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

被爆後の石内村の生活と体験

原爆と戦争

発行日

昭和六十三年八月六日

編集・発行

石内地区被爆誌編集委員会

印刷所

石内公民館

たくみ印刷(株)

電話 二七八―二二二一 番

